

平成24年度文部科学省委託「幼児教育の改善・充実調査研究」

子ども自ら遊びをつくる幼保合同保育の実践開発

—保育者の協働と教育的意思決定に焦点をあてて—



平成25年3月

奈良市教育委員会

本報告書は、文部科学省の幼児教育の改善・充実調査研究委託費による委託業務として、奈良市教育委員会が実施した平成24年度「幼児教育の改善・充実調査研究」の成果を取りまとめたものです。
したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。

あ い さ つ

本市では、平成21年5月に「奈良市教育ビジョン」を策定し、向こう10年間に本市の目指すべき教育の姿を示しました。幼児教育については、これを生涯にわたる人間形成の基礎を培う重要な教育であるとして教育ビジョンの基本目標の中に位置付け、その充実を図るとともに幼・小の発達と学びの連続を大切にした幼小連携の推進も進めてきました。

平成20・21年度には保育所保育士、幼稚園教員、小学校教員の連携充実を目指し「保育や教育を共に考え、学びの基礎の充実をめざした連携体制の構築」をテーマにして、文部科学省の調査研究事業の委託を受け、研究を進めてきました。引き続き文部科学省の事業委託を受けた平成22・23年度は、その取組の継続、発展を図るとともに、保育者の実践力や専門性を高める研修の在り方や資質の向上に重点を置いた調査研究を行い、幼児教育の改善、充実を図ってきました。本年度は、これまでの調査研究の成果を生かしつつ、「子ども自ら遊びをつくる幼保合同保育の実践開発」を研究テーマとし、保育者の協働と教育的意思決定に焦点を当てた保育実践の開発を行っています。

幼児教育は、幼児の発達の特性に照らして主体的な「遊び」を重要な学びとして位置付け、組織的かつ計画的、継続的な指導を通して行う必要があります。本調査研究で得た成果をそれぞれの幼稚園・保育所で生かし、さらなる幼児教育の充実を図るとともに、今後は本市教育ビジョンが掲げている発達と学びの連続性を踏まえた教育の推進を行い、幼児期の教育と小学校教育への接続についても研究を進めてまいりたいと考えております。

最後になりましたが、本研究を進めるにあたり、終始熱心にご指導いただきました、奈良教育大学准教授掘越紀香先生、帝塚山大学教授岡澤哲子先生、帝塚山大学教授清水益治先生、奈良教育大学教授横山真貴子先生、奈良女子大学准教授本山方子先生、また研究協力園の皆様から心から感謝を申し上げます。

平成25年3月

奈良市教育委員会

教育長 中 室 雄 俊

はじめに

平成 24 年度、文部科学省から「幼児教育の改善・充実調査研究」の委託を受け、「子ども自ら遊びを作る幼保合同保育の実践開発」を行って参りました。その成果をまとめ、ご報告させていただきます。昨年度の「幼稚園教員等の資質向上：子どもの遊び・行動の見取りと評価」では、子どもの遊びの記録から子どもの育ちを見取り、保育を評価する課題に取り組み、幼稚園・保育所・認定こども園での公開保育研究会や、パイロットモデルとなった幼稚園と保育所での連続した幼保合同保育を公開・実施し、繰り返し保育実践を幼保の保育者で省察する機会を持つことで、保育者の資質を高めることができました。同時に、このような研修の機会をより多くの保育者に提供し、全市的に広めることが課題となりました。

そこで今年度は、子ども自ら遊びを作る「幼保合同保育」の実践開発を行い、保育カンファレンスのあり方も見直しながら、より多くの保育者に研修の機会を提供できるように、特色の異なる 3 地域での取組を進めて参りました。その際、「保育者の協働」と「教育的意思決定」に焦点をあてたことが今年度の特徴です。幼保合同保育を行うためには、まず「保育者の協働」が求められます。連続した幼保合同保育の事前事後には、幼稚園・保育所それぞれの子どもの生活や育ちを伝え合いながら、今ここでの子どもの姿から子どもの思いや学びを見取り、よりふさわしい環境構成や援助について活発に話し合いました。研究協力園の実践者だけでなく、研究部員も継続的にかかわることで、保育実践を見直す新たな視点が提供され、参加者全員の気づきを深めることのできた保育カンファレンスも見られました。

そして、「教育的意思決定」という耳慣れない用語についても、繰り返し話し合われました。「幼稚園教員と保育所保育士の両者が幼児教育を行うにあたり共有すべき意思決定」という定義をもとに、自分たちで「保育内容の選択や援助、環境構成において、教育的な判断がどのように行われ、決定されているのか」と解釈し、幼保合同保育の中で、各保育者の判断や意思決定を意識し、共有するようになりました。研修でも、初めは「教育的意思決定とは何ですか」という質問ばかりでしたが、次第に「教育的意思決定とは、こんなことを指すのではないのでしょうか」という確認や提案へと変化してきたことは 1 つの大きな成果と感じております。また、幼保合同保育を積み重ねてきたからこそ、保育者間の教育的意思決定のズレを感知し、時に揺さぶられ、自分の教育的意思決定を自覚し見つめ直すことがより促されたように思います。さらに、目の前の子どもたちがどのような学びをしていたのか、その子どもの学びを深め、遊びを発展させるためには、どのような教育的意思決定がより望ましいのかについて省察し、子ども自ら遊びを作るための場を保障する援助や環境構成について深く検討することにつながりました。

今年度までの幼保合同保育や研修での成果を、市内の保育者にさらに浸透させるとともに、子どもの育ちを連続して支えるためにも、今後は小学校教員との協働へと広げていくことが求められるでしょう。子どもたちのよりよい育ちを保障し、質の高い幼児教育を新たに切り開くため、これからも私たちはたゆまぬ努力を続けて参ります。

平成 25 年 3 月

奈良市幼児教育推進委員会

委員長 掘 越 紀 香 (奈良教育大学)

目 次

あいさつ

はじめに

頁

I. 本研究の概要	1
1. 奈良市における幼児教育と事業について	
2. 研究の目的	1
3. 研究課題（3つの柱）	1
4. 研究の取組	2
(1) 研究協力園での実践	
① 幼保合同保育の実践	
② 幼稚園教員の保育所での保育実習	
③ 保育カンファレンス	
(2) 講演会	
(3) 研究集会	
5. 研究協力園について	3
(1) 神功幼稚園・神功保育園	
(2) 帯解幼稚園・帯解保育園	
(3) 六条幼稚園・京西保育園	
6. 研究組織	4
7. 研究構想図	5
8. 成果と今後の課題	6
II. 子どもの学びのめばえに向けての保育者の協働	8
1. 神功幼保合同保育の実践	8
2. 教育的意思決定について	17
3. 保育者の協働について	18
III. 指導案一本化の試み	20
1. 帯解幼保合同保育の実践	20
2. 教育的意思決定について	28
3. 保育者の協働について	30
IV. 協働3年目、保育者間の意思決定の揺れ	32
1. 六条幼京西保合同保育の実践	32
2. 教育的意思決定について	42

3. 保育者の協働について	・・・・・・45
---------------	----------

V. 成果と課題	・・・・・・47
----------	----------

おわりに

(資料編)

資料1：合同保育をつくりだすためのプロセスの理解とその試み	・・・・・・1
資料2：主体的な研修会の企画・運営の実施	・・・・・・3
資料3：講演会	・・・・・・5
資料4：研究集会	・・・・・・11
資料5：幼保合同保育研究のスケジュール表	・・・・・・15
資料6：神功幼保合同保育研究資料	・・・・・・19
資料7：帯解幼保合同保育研究資料	・・・・・・27
資料8：六条幼京西保合同保育研究資料	・・・・・・33

I. 研究の概要

平成 24 年度文部科学省委託 幼児教育の改善・充実調査研究

子ども自ら遊びをつくる幼保合同保育の実践開発

— 保育者の協働と教育的意思決定に焦点をあてて —

1. 奈良市における幼児教育と本事業について

本市では、平成 22 年度、文部科学省委託「幼児教育の改善・充実調査研究」の指定を受け、「保育実践力を高め、就学前教育の充実をめざした研修の在り方」を研究主題として、保育者の実践力や専門性を高めていく研修の在り方について研究を行った。平成 23 年度は、「子どもの遊び・行動の見取りと評価」を研究主題として幼稚園教員・保育所保育士が共通の視点を持ち、子どもの活動の姿を見取り、保育観や評価の在り方について研究を行った。

このことを踏まえ、平成 24 年度は、研究協力園による幼稚園教員と保育所保育士の協働と教育的意思決定に焦点をあて「子ども自ら遊びをつくる幼保合同保育の実践開発」の研究を行うことにした。

2. 研究の目的

本研究は、保育者の協働による教育的意思決定に焦点をあて、幼保合同保育を通して、子どもが自ら遊ぶ保育実践を開発することを目的としている。

□「教育的意思決定」とは、幼稚園教員と保育所保育士の両者が幼児教育を行うにあたり共有すべき意思決定を指す。具体的には、保育者の援助や環境構成が、遊びを通した子どもの育ちや学びを促し支えているかどうかの判断をいう。

昨年度の取組では子どもの遊びや行動の見取りと評価の在り方について幼保合同保育を通して共通理解を深めていった。今年度は、保育自体の質の向上をめざし、保育者が、自らの保育が子どもの育ちや学びとどのように結びついているのかを反省的に問うため、「教育的」意思決定に焦点をあてた。

3. 研究課題（3つの柱）

本研究では次の3点を重点課題とし、研究協力園での実践を中心として研究を進めた。

① 子どもが自ら遊びをつくる幼児教育の実践開発

○幼保合同保育を通して、先進的実践を開発する。

子ども自ら遊びをつくる幼児教育の実践における「教育的意思決定」としては、

- ・子どもの遊びに自律性があるか
- ・子どもなりに遊びを通してどのような問題解決に臨んでいるか
- ・遊びの中にどのような「学び」の要素があるか

という3観点に基づいてなされると考え、研究を進めた。

- ② 幼保合同保育の保育研究会やカンファレンスの公開常態化とそのための環境整備
- 保育者の協働の在り方について実施園のほか、市内の保育者が共同で検討、共有する場をもつ。
- 子ども自ら遊びをつくる保育での保育者の協働における「教育的意思決定」としては、
- ・環境構成、保育者の援助の仕方、保育内容の選択などにおいて、各保育者の教育的意思決定がどのように行われ、決定されるのか。
 - ・幼保合同保育の中で、各保育者の判断や意思決定を自覚するなかで、どのように歩み寄り、すりあわせ、協働していくのか。
- という2点から保育者の協働の在り方について検討した。(※各研究協力園での実践報告における「2. 教育的意思決定について」参照)
- ③ 幼児教育の実践デザインや自主研修の企画・運営に対する研修の実施
- 保育者の学び合いを促す。
- ・研究部員は、研究協力園で公開保育前後のカンファレンスに参加し、子ども自ら遊びをつくる保育について実践研究を行い、遊びの環境や援助の仕方に焦点をあてて話し合う。繰り返しその機会をもつことで、自園などにおいて研究の企画・運営を進められることをめざした。

4. 研究の取組

本研究は研究協力園での実践を中心にして以下の取組を行った。

(1) 研究協力園での実践

① 幼保合同保育の実践

幼保合同保育を実践する研究協力園（神功幼稚園・神功保育園、帯解幼稚園・帯解保育園、六条幼稚園・京西保育園）の保育者が協働で「子ども自ら遊びをつくる保育」を研究テーマとして、幼保合同保育カリキュラムを作成し、年間2回（1回につき1日から3日）の公開保育を行う。

② 幼稚園教員の保育所での保育実習

研究協力園の幼稚園教員が夏休み期間を利用して、保育所で保育士との合同保育や保育実習を行うとともに「子ども自らつくる遊び」に焦点をあて、子どもへの援助や言葉かけなどについて保育の振り返りを行う。

③ 保育カンファレンス

研究部員（幼稚園教員と保育所保育士）が研究協力園の幼保合同保育のカリキュラム作成や、保育前後のカンファレンスに参加し、幼保合同保育のサポートを行う。カンファレンスでは、環境の構成や子どもの姿の見取りの気付きについて、様々な視点から協議を行う。幼保合同保育に関わることで研究部員の資質の向上を図るだけでなく、学んだことを踏まえ自園での取組に生かす。(※ 研究協力園での実践についてはⅡ～Ⅳ参照)

(2) 講演会

「子ども自ら遊びをつくる保育」の質の向上を図るため、先進的な取組を行っている幼稚園と大学より講師を招聘し、幼小連携の実践を踏まえた保育内容、環境の構成、保育者の援助等に関する講演（対談）を行った。講演会に先立ち、市立幼稚園・保育所の幼保合同保育実践研究の発表を行い、講師から講評を受けた。このことで市内の保育者には、幼保合同保育の実践研究と幼小連携の実践を通しての先進的な取組を知らせ、広めることにつながった。(資料：3 参照)

- ・講師：鳴門教育大学教授 木下 光二氏 ・鳴門教育大学附属幼稚園教頭 佐々木 晃氏
- ・演題：「幼児期から児童期への主体的な学びにつながる保育・教育とは」
- ・場所：奈良県文化会館 小ホール
- ・日時：平成 25 年 1 月 12 日（土）
- ・参加人数：幼稚園教員 63 名、保育士 41 名、私立幼稚園教員 5 名、他市幼稚園教員 61 名
小学校教員 4 名、学生 58 名、市庁部局関係者及び学校教育課指導主事等 7 名
合計 239 名

（3）研究集会

市立幼稚園・市立保育所の保育者を対象に、奈良市幼児教育推進委員会の 1 年間の研究の取組の概要報告と 3 組の研究協力園の実践報告を行った後、保育実践者 3 名と研究部員 4 名、進行役として推進委員 1 名を交えての『保育者の協働や教育的意思決定』についてのシンポジウムを行った。市内全園に研究成果を広めるための研究集会であったが、予想を上回る参加者があり、実践研究に対する関心の高さがうかがえた。（資料：4 参照）

- ・場所：春日野荘 吉野の間
- ・日時：平成 25 年 2 月 3 日（日）
- ・参加人数：幼稚園教員 62 名、保育士 72 名、学識経験者 4 名、
市庁部局関係者及び学校教育課指導主事等 8 名 合計 146 名

5. 研究協力園について

本研究は、園の規模、これまでの取組状況、地域性などが異なる 3 組の研究協力園で実践を行った。特色が異なる 3 組での研究を行うことで、多様な取組が見られた。各研究協力園の研究の特色は次のとおりである。

（1）神功幼稚園・神功保育園 「子どもの学びのめばえに向けての保育者の協働」

ニュータウンに開園された両園は、いずれも各学年 1 学級 20 名前後の規模であり、保護者の教育に対する関心も高い。平成 20 年度には、両園がある中学校区が小中一貫教育推進パイロット校に指定され、保幼小連携・小中一貫教育の実践を通して、互いに小学校への学びをつなげることをめざした取組を進めてきた。このような経緯の中で取り組んできた両園の研究は、小学校就学に向けた子どもの共通経験に視点を置いたものである。就学前の子どもたちに身に付けてほしい力、学びのめばえを、幼保合同保育を行う中で幼保の保育者の見取りや環境の構成について話し合い、教育的意思決定を共有することを通して、小学校への滑らかな接続につなげようと試みた。

（2）帯解幼稚園・帯解保育園 「指導案一本化の試み」

奈良市南部の田園風景の残る中に位置する両園ではあるが、帯解保育園の 1 学級 20 名前後の園児数に対し帯解幼稚園は 1 学級 5 名の小規模園である。平成 17 年度に文部科学省・厚生労働省の「総合施設モデル事業」の指定を受け、その後、年 3～4 回の行事交流を中心とした連携を進めてきた。本研究ではこれまでの取組に加え、保育者の保育観や子ども観の共有化を行い、子どもの援助や見取りを協働できるよう幼保合同保育の指導案の一本化を行うことに重点を置いた。指導案の一本化を行っていく中で、教育的意思決定の在り方についても保育者間で討論を重ね、保育の質を高めることにつながった。

(3) 六条幼稚園・京西保育園 「協働3年目、保育者間の意思決定の揺れ：

『“遊びのイメージ”の違い』への気付き』

両園とも各学年2学級程度（1学級20～30名）の規模であり、地域や保護者の園への関心は高く、協力的である。平成22年度からは文部科学省指定「幼児教育の改善・充実調査研究事業」の研究協力園として研究を進め、昨年度は3日間連続幼保合同保育を幼稚園で、今年度は保育園で連続した幼保合同保育を実施した。幼保合同保育の中で、同じ遊びであっても互いの園での遊び方が違っていたため、遊びが進展しなかったケースがあった。保育者間の遊びのイメージが異なっていたため、子どもの遊びがかみ合わなかったのである。保育者の協働を意識し始めて3年目、改めて保育者が互いの遊びのイメージが違うことに気付くことで教育的意思決定の在り方を考え、保育者の協働が進展した実践である。

6. 研究組織

奈良市幼児教育推進委員会 14名

幼児教育を専門とした学識経験者	5名
市立幼稚園園長	4名
市立保育園園長	3名
市庁部局 保育課主幹	1名
奈良市教育委員会事務局 学校教育課主幹	1名

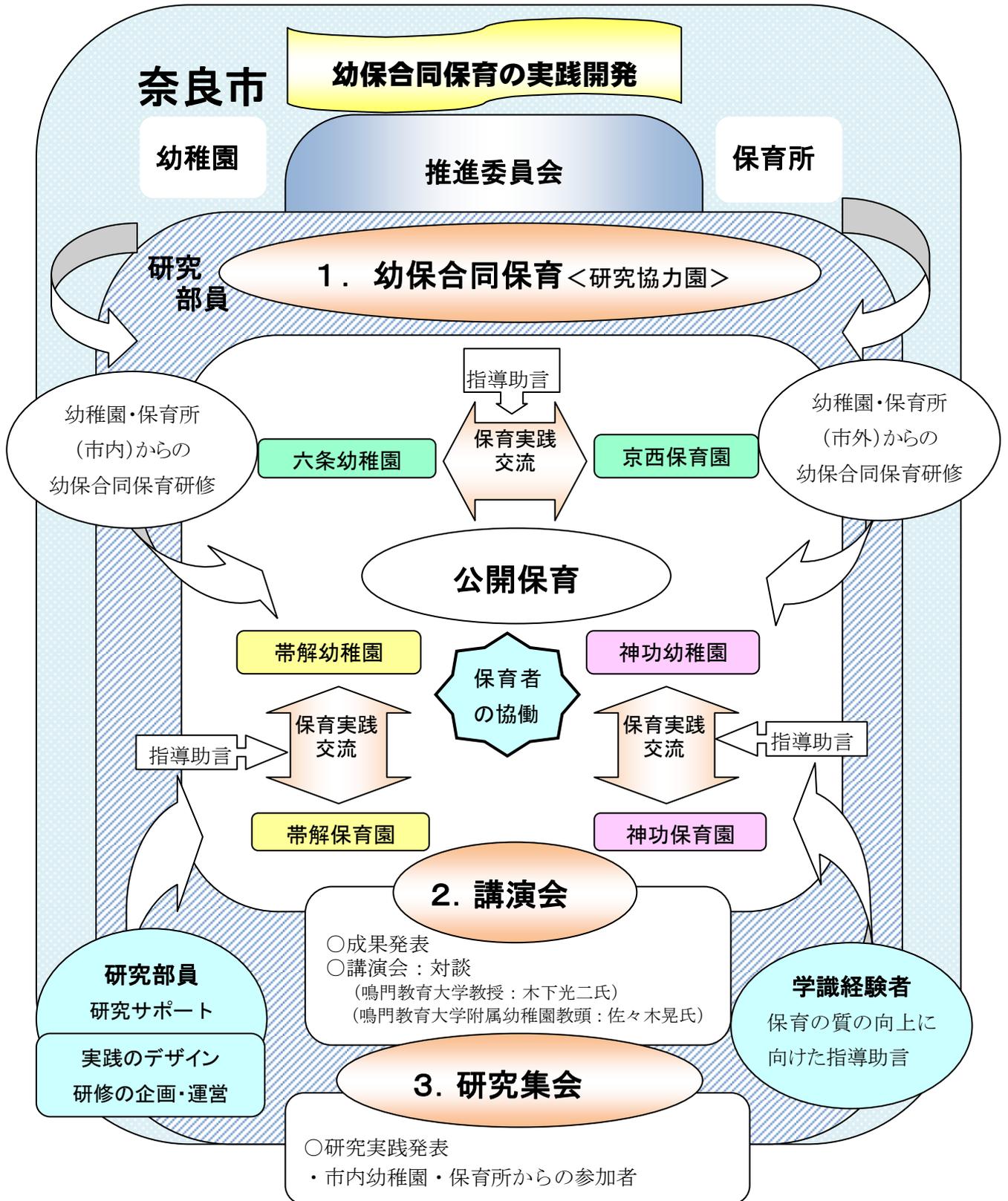
推進委員会は調査研究全体を総括し、研究指定園での公開幼保合同保育についての指導助言を行い、本調査研究の推進を図る。また、推進委員の研究協力園で、子ども自ら遊びをつくる幼児教育の実践開発を行う。

研究部員作業部会 23名

幼稚園園長	3名
幼稚園主任	5名
幼稚園教員	2名
保育所副園長	2名
保育所保育士	11名

研究部員は、隣接している幼保の保育者がペアとなり、3組の研究協力園のうち、1組の協力園に1年を通じて幼保合同保育のサポートをする。1組の研究協力園には、研究部員が7～8名ずつ関わる。

7. 研究構想図



8. 成果

本研究では、教育的意思決定に焦点を当て、3つの研究課題に即して取り組んできた。

(成果)

1. 「子ども自ら遊びをつくる」幼保合同保育の実践事例の開発

①小学校との接続を意識し、学びにつながる保育内容を充実した実践事例

子どもの困りや失敗は成長するチャンスであり、その困りや失敗を子ども自らの力で乗り越えていくことができるように見守り、援助することが教育的意思決定につながることを示した。

②指導案一本化がこれまでの保育からの脱却につながった実践事例

お互いの保育を見直し、具体的に指導案を作り上げていく中で、各自の教育的意思決定を見つめ直し、これまでの保育から脱却することで、保育者の資質向上が図られた。

③保育者間の意思決定の揺れがより質の高い教育的意思決定につながった実践事例

保育者間での「遊びのイメージ」のズレによって生じた意思決定の揺れに焦点をあて、「子どもが自ら遊びをつくりだす」ために、より望ましい教育的意思決定について考え共有することの大切さを示した。

幼保合同保育がどのような幼児の学びを生み出したのかについては、次のような成果がみられた。

①子どもが、葛藤を乗り越えるために考え、自ら遊びをつくりだす連続した幼保合同保育

異なる環境、異なる集団、異なる遊び方の中で、子どもは戸惑いや困り、衝突などの葛藤を体験する。幼保合同保育を積み重ねることで葛藤を乗り越え、子ども同士で協力して工夫したり、新たに挑戦したりする過程に学びが見られ、夢中になって自ら遊びをつくりだすことにつながった。また、互いに親しみを感じる仲間となっていく過程も見られ、入学に向けて期待を持つ良い機会にもなっていた。

②幼保合同保育による日々の遊びの広がりや深まり

幼保合同保育での、豊かな遊びや遊び方の刺激を受けて、自園に戻ってからも、さらに遊びが広がって展開する姿が見られた。また、幼保合同保育を年間カリキュラムの中に位置付けることで、子どもの育ちや学びが日々の保育につながっていった。

2. 幼保合同保育における保育者の協働の在り方

どの園においても、保育者が協働する際に、①子ども自らの遊びを大切にして、子どもの姿から思いや学びを見取り、理解する ②子どもの遊びを教育的意思決定のもとに見守り、援助する の2点を重視して共有していく過程が示された。

まず保育者同士が協働する場合、保育者の見取りや援助の姿勢についての共通理解がなされていた。協働が進むにつれて、子どもの思いや学びを見取ったうえで、自らの教育的意思決定を意識し、保育者間で共有しながら保育に臨むようになっていった。

また、協働の基本として、何を経験させ、どのようなことを育てていきたいかというねらいを、事前に保育者間で話し合い、保育後に振り返り、共通理解を図ることの積み重ねが大切であった。

3. 実践デザインや研修の企画・運営に関する保育者の資質の向上

昨年度からの課題に対し、本研究では次の点で成果がみられた。

①教育的意思決定を意識し、考え続けることによる保育実践の変容

全ての場面（指導案作成－保育実践－カンファレンス）において教育的意思決定は必要であり、このことを意識することで研究部員の保育力の向上が図られた。

②幼保合同保育をつくりだすためのプロセスの理解とその試み

研究協力園の実践に研究協力園以外の園の研究部員が計画段階から参画し、幼保合同保育をつくりだすためのプロセスを学んだことにより、実際に、研究部員が所属する幼稚園や保育所で、幼保合同保育につながる交流会が行われた。

③主体的な研修会の企画・運営の実施

自らの園で公開保育（研修会）を実施し、研究部員がキーパーソンとなって、自園の保育者とともに保育実践について話し合い共有することで、本市の幼児教育の改善・充実が図られた。

4. 教育的意思決定に焦点を当てて

教育的意思決定に焦点を当てたことにより、保育者は、①なぜこの環境を用意するのか ②この遊びの場面ではどのような援助や環境の構成が必要なのか ③どのような援助をどのタイミングで行うことが望ましいのか 等の視点が鮮明になった。そのため、幼保の保育者がともに、幼保合同保育だけでなく普段の保育も振り返るようになり、教育的意思決定について普段から意識付けることにつながった。さらに、保育士の学びとしては、「遊び」に対する考え方の転機になっていた。いつもより見守る姿勢をとることで、子どもが遊びの中で何を学んでいるのかに気付き、子ども自ら遊びをつくる保育の在り方について学ぶことができた。

（今後の課題）

今後の課題としては、過去の調査研究で成果を上げてきた幼保連携の取組を小学校につなげていくことにある。幼保合同保育を通して深まってきた子どもに対する見取りや評価の在り方、保育における教育的意思決定の大切さが小学校教育へどのようにつながっていくのか。また、子どもの育ちがどのように小学校の授業の中で生かされているのか。幼保の違いを克服して幼児期の教育として捉え、幼保合同保育を公開し、カンファレンスを実践して、保育の質を高めてきた成果を生かして、就学前教育と小学校教育とをつなげていくことが、今後の大きな課題となるだろう。

具体的には、次のように考える。

- ① 幼稚園教員、保育所保育士、小学校教員の合同研修の在り方の改善
- ② 幼小の違いを克服できる幼保小接続の在り方の研究
- ③ 接続期のカリキュラムの開発

今後も引き続き幼児教育の改善と充実を図りながら、より質の高い幼児教育が小学校教育に円滑につながり、子どもの学びが連続していくように努めたい。

Ⅱ. 子どもの学びのめばえに向けての保育者の協働

小学校就学に向けた子どもの共通経験

— 神功幼稚園・神功保育園 —

1. 神功幼保合同保育の実践

1) 目的

- ・ 幼保合同保育の「子どもが自ら遊びをつくる」活動を通して、保育者の協働とその過程を研修し、子どもの発達に応じた幼児教育としてよりよい在り方を探る。
- ・ 就学前に子どもたちが身につけてほしい力、学びのめばえを、幼保合同保育をする中で保幼の保育者が見取り、小学校への滑らかな接続につなげる。

2) 研究協力園の概要

《神功幼稚園》

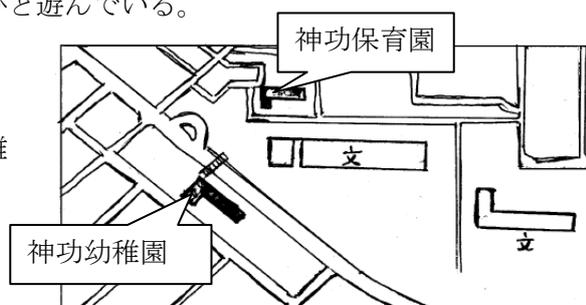
昭和54年に開園された。平城宮跡の西北方に位置し、平城ニュータウンとして開発された閑静な住宅地のなかにある。近くには保育園、小学校、中学校、公民館が隣接されておりとても教育に関心の高い熱心な地域である。また、公園等も整備されていて緑豊かな自然環境に恵まれている。園の教育目標は「夢をもち、豊かな心で主体的に活動する幼児の育成」で、子どもたちは、自分の考えをしっかりとっているが、他人に伝える力、問題解決能力に課題が感じられる。

《神功保育園》

平成元年4月に開園された。園の保育目標は、「自分の思いを言える子」「意欲を持って最後までやり通す子」「友だちを大切にできる子」である。子どもたちは、自分の行動に自信がなく、思いを言葉にして伝えられない受け身の姿がある反面、友だちを大切にできる姿がある。また、集中力がありコツコツと難しい事に取り組む達成する喜びを感じのびのびと遊んでいる。

《神功幼稚園と神功保育園の立地状況》

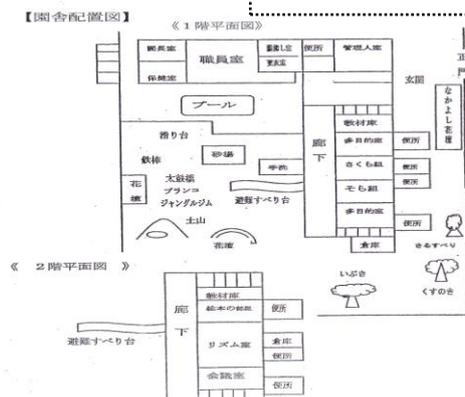
神功幼稚園と保育園は歩いて5分ほどの距離にあり、小学校もすぐそばに隣接している。



- ・ 園児数並びに職員数 《神功幼稚園》園児38名、職員5名

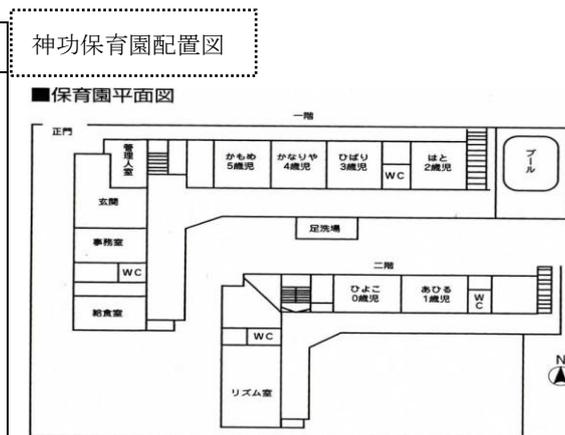
学年	学級数	園児数(人)	職員(数)
2年保育 4歳児	1	19	園長 1人 担任 2人
2年保育 5歳児	1	19	特別支援 1人 業務員 1人
合計	2	38	合計 5人

神功幼稚園配置図



《神功保育園》園児 119 名、職員 29 名

学年	学級数	園児数 (人)	職員 (数)
0 歳児	1	9	園長 1 人
1 歳児	1	20	副園長 1 人
2 歳児	1	24	担任 22 人
3 歳児	1	22	調理員 3 人
4 歳児	1	20	(内パート 1 人)
5 歳児	1	24	パート 2 人
合計	6	119	(午前 1 人、午後 1 人) 合計 29 人



3) 方法

- (1) 「子どもが自ら遊びをつくる」ための援助や環境の構成について保幼の保育者が子どもの姿をみながら協働することを柱とする。
- (2) 幼稚園教育要領と保育所保育指針を踏まえ、指導案作成に向けて協働作業をする。
 - ・遊びの姿を出し合い、子どもの発達を踏まえ、各年齢の担任が協働し指導案を作成する。
- (3) 幼保合同保育を年 3 回行う。(場所：神功幼稚園内 6 月、7 月、また 10 月は 2 日連続して行う)
- (4) 保幼小連携交流として、小学校の「おもちゃランド」に参加し園児と一緒に活動する。
- (5) 幼稚園教員が、保育所に小学校教員と一緒に出かけ、保育に関わる。
- (6) 幼保合同保育における反省評価をし、研究部員作業部会によるカンファレンスをうけて、成果と課題を明らかにする。

4) 取組の特徴

保幼小連携の実践を通して、互いに小学校への学びをつなげることをめざしている中で、両保育者の保育観の違いを事前カンファレンスや指導案作成、活動の内容の検討において出し合い、互いをより詳しく知ることを行った。

互いに譲れない保育内容は何かを示し、遊びから学びへつなげることをめざす中で、日々楽しく活動できるために主に環境の構成を事後カンファレンスで話し合った。

保育者としては、限られた日であるために、幼保合同保育の一日の活動が楽しい活動であるようにと考え、困ったり悩んだりする場をつくるよりも、より楽しく遊べる環境を配慮として選んだ。

5) これまでの幼保交流、幼保合同保育の経緯

10 年前より毎年 4 回程度、幼保の交流を実施し、これまでの交流の実績の上に今年度幼保合同保育が実現した。平成 21 年度「保幼小連携推進事業」の委託を受け、市の目指す三つの柱『基本的な生活習慣・社会性の基礎を養う・活動意欲の向上』に向けて研究を行った。園や学校での大きな課題に向けて幼児期における生きる力の基礎を育成し、保育園では『元気なからだと豊かな心をもった子どもを育てる』、幼稚園では『夢を持ち、豊かで主体的に活動する幼児の育成』の目標にした。小学校教育への滑らかな接続を重要課題として、保幼小の連携事業で育てたい力を『互いの思いを伝え合う力を育てる』と設定し、友達や異年齢の人との関わり合いや交流活動の体験を重視した実践を行った。前年度の保幼小連携を継続させる

ために「話し合い、記録、カリキュラム作成」の流れを文章に残し実践を継続させた。

平成23年度 奈良市小中一貫研究会が、平城西中学校・神功小学校であり、小学2年生の「おもちゃランド」の授業に幼稚園（5歳児）保育園（5歳児）が連携して参加した。その中で子どもの学びや育ちにつながる教員・保育者の関わりを明確にして、互いの教育を理解し、それぞれの違いを踏まえた教育を充実させることを確認した。

6) 幼保合同保育の経過

(1) 実践研究経過概要

①日時 平成24年6月12日(火) 9:45~11:00

公開保育内容 (場所: 神功幼稚園 リズム室)

雨天のため、予定を変更しリズム室で一斉的な活動をした。遊びの内容としては当初予定していた「あたまであくしゅ」「ぼっとん」のリズム遊びに加え、「元気体操」「誕生月なかま」絵本「99ひきのきょうだい」を取り入れた。リズム室にクラス名の看板を立てたり、幼保の子どもたちが顔を見合える、向かい合って手をつなぎやすいよう、安心して交流できるような環境の構成をした。幼稚園の教員が進行し、保育園の保育士が幼児をサポートしていった。

②日時 平成24年7月10日(火) 9:45~11:15

公開保育内容 (場所: 神功幼稚園 園庭)

好きな遊び「シャボン玉」、「ホイップ」、「水鉄砲」、「砂場」、「浮かぶものをつくる」、「リズム遊び」「固定遊具」等で遊んだ。できるだけみんなが楽しく、また理解しやすく遊ぶことができるように、言葉だけではなく視覚的にわかりやすいように、どこでどんな遊びがあるかを掲示したり、遊びのコーナーの材料用具の整理や表示の仕方を工夫したりした。保育者が子どもの遊びの様子や会話を聞きながら、連携をとりあい援助を行った。

③日時 平成24年10月31日(水) 9:45~11:15

公開保育内容 (場所: 神功幼稚園 園庭)

神功幼稚園に保育園児が来園して、「ぼくたちの町」や「遊びランド」で遊ぶ。子どもたちは自然物を使ってつくって遊んだり、砂場で遊んだりしていた。レストランでの遊び、むしの広場での遊び、どんぐりをころがし等の好きな遊びを行った。

④日時 平成24年11月1日(木) 9:45~11:15

公開保育内容 (場所: 神功幼稚園 園庭)

前日のカンファレンスから遊びの場を再構成した。子どもの遊ぶ様子をみながら、保育者間で連携を取り合い臨機応変に援助した。保育園児の人数の多さに戸惑う幼稚園児やいつもと違う環境に戸惑う保育園児の姿も見られた。保育では個々の子どもの姿を見取り、共通理解し、必要な援助についてその都度教育的意思決定を行った。また、カンファレンスでは子どもの姿を具体的に出し合い、保育を振り返った。

(2) 実践事例

～虫への興味が子ども自ら遊びをつくることにつながった事例～

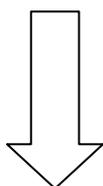
< 4歳児・虫の広場づくり >

A児は、幼稚園で新しい環境や遊びになかなか取り組めず、2学期になっても教師の指示を求めることがある。しかし、虫や小動物には興味を示し、友達とも楽しく関わる姿が見られた。虫が少なくなってきた10月下旬、飼育ケースの後ろに図鑑をおいて、「ほら、虫がいるみたいでしょ」と自ら気付いたことを話す姿がでてきた。幼稚園では、A児の思いを遊びに生かしたいと思い、図鑑をカラーコピーし、虫の広場づくりが始まった。

遊びの中で本物のクモも現れ、子どもたちはその姿をみてクモの巣をつくったり、木をつくったりする遊びになっていった。



その時期に、10月31日の合同保育にむけて保育所との事前打ち合わせで、その様子を話すと保育園児が同じように虫に興味があり、「夕方、虫の鳴く頃に、子どもたちは誘われるように虫とりをしています。」という。

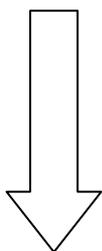


保育者の話し合いによる共通理解

幼保の子どもたちの共通の興味から「虫の広場づくり」の遊びを10月31日、11月1日の合同保育にも生かそうと考えた。

10月31日(水)(合同保育3日目)

かまきりの卵を幼稚園5歳児が発見しA児に伝えた。その場に一緒にいた保育所の子どもたちともかまきりの卵の発見を喜び合う姿がみられた。「どうしたら、この卵を虫の広場に貼れるだろう。」と考えた。写真に撮って切り取り、貼ることで虫の広場に飾ることができた。幼保間の事前の写真の交換で虫の広場のことは知っていた保育所のB児も虫を貼りたいと言ってきた。それをきいた幼稚園のC児が自分の道具箱からのりを取ってきて「これで貼ったら。」とのりを手渡してくれた。二人は貼りながら虫の話をしたり、つくったりする楽しんでいた。



保育者の話し合いによる考察

幼保の子どもたちが夢中になり、発見や遊びを楽しめた。保育者が虫への興味が幼児の成長につながることを話し合いの中で感じていたから、この発見や関わりを大事にできたと考える。

11月1日（木）（合同保育4日目）連続した2日目

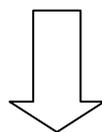
虫が好きなA児とB児が「今日はバッタがいるかな。」とつぶやき、「探しに行こう。」と一緒に探し始めた。

「電車に乗っていこうか」と電車に乗って、他の遊びをしている友達と手を振り合ったりしながら畑に行った。偶然にもバッタを2匹見つけることができた。



その後C児が「バッタはどこにいたの。」と言っていることにA児が気づき、「畑の方にいるよ」と一緒に探しに行きバッタを見つけ、捕まえることができた。

子どもの姿を通しての
保育者間の教育的意思決定



A児は友達に「そのバッタどこで捕まえたの。」と聞かれ、「畑で見つけたよ。」と自信を持って答えることができた。保育者はB児が普段なかなか遊びを見つけられないことが気になっていたが、いきいきと活動し友達と関わる姿がみられていた。

その姿を他の子どもたちに知らせたいと思い、保育中に保育者間で連携を取り合い、話し合いでバッタ発見のニュースを取り上げることにした。話し合い後は子どもたちの自信につながり、合同保育後も各園で同じような遊びが続いた。

～子どもの姿から保育者が教育的意思決定をした事例～

< 4歳児・ケーキをつくりたい >

物事にじっくり、ゆっくり関わろうとする幼稚園4歳A児は集団生活をスタートさせたばかりなので保育園児がたくさん来ることに戸惑う姿がある。10月31日は、多くの友達が来たことでなかなか遊びが見つけれずいた。その折、保育所の園長が声をかけたことで、A児はうれしそうに園内を案内したり知っていることを話したりしていた。園長はすぐに遊び出せないA児の様子に「A児はこれでいいのかな。」と保育者に尋ねた。A児の日頃の様子を聞いたことで、この姿がA児にとっては安定していると判断してその姿を認めた。

2日目もA児は戸惑いを見せ、すぐには遊べなかったが、しばらくしてどんぐりや落ち葉を集め、宝箱をつくった。その宝箱に集まったもので「ケーキをつくりたい。」として、スポンジに木の実を貼り付けケーキをつくった。また「このケーキを買ってください。」と店の人になって遊ぶ姿がみられた。



保育者の話し合いによる気づき

A児が「自分もやってみたいな」と思いながら、園長先生と友達の遊びを見ていたのだと思った。このことは、保育者間で子どもの姿の連携をとり、援助をどのようにするのかと判断したことが、A児にとって「自らやってみようとする姿」につながったと考える。

友達と関わらせたい、遊びに誘い入れたいと思いがちだが、子ども一人一人の姿をしっかりと見つめ、この子の育ちには何が必要か考えていくことが教育的意思決定につながると考えた。また、合同保育においては、それを両園の職員間で話し合っていくことの大切さを感じた。



～保幼小の連携から自ら遊びをつくることにつながった事例～

< 5歳児・遊びランド >

保育者の話し合いによる共通理解

幼保の5歳児と一緒に、保幼小連携の交流として、神功小学校の「おもちゃランド」に参加した。両園ともに経験している「おもちゃランド」の遊びを、合同保育での遊びにも生かしていくことができればイメージもわきやすく、共通の思いをもって遊べるのではないかと保育者間で検討した。各園での子どもたちの様子を連絡しあったところ、小学校で経験した同じような遊びが始まっていた。そこで、合同保育前の打ち合わせで、その遊びが生かせるように環境を考えることにした。



【保育園での子どもの姿】

自然物などをみると、「どんぐり使ったおもちゃあったなあ。」「これを斜めにしたら転がっていくかなあ。」とおもちやランドを振り返るような会話が聞かれたので、自然物を使ってつくことにした。どんなおもちゃをつくりたいのかを聞き、素材を用意した。子どもたちは友達と工夫しながらつくっていった。小学校の「おもちゃランド」には、おもちゃと共に、一つ一つのコーナーに看板があることも覚えていて、段ボールで看板をつくり始めた。子どもたちは「幼稚園におもちゃを持って行って遊びたい。」と話し、幼稚園にもっていくことになった。

【幼稚園での子どもの姿】

子どもたちはおなもみの的あてや、どんぐりころがしゲームをつくっていた。どんぐりなどの自然物を使って、ケーキやアクセサリをつくったり、お店屋さんやレストランごっこなどを始めた。友達と思いを出し合い、イメージを膨らませながら、場を構成したり、看板をつくったりしながら、試したり、工夫したりして遊びを楽しむ姿が見られた。

写真等で連絡しあう。

【幼保合同保育の子どもの姿】

両園の遊びを併せた「あそびランド」ができた。子どもたちは自分でつくった場所を離れなかったり、小学生がしていたように「いらっしゃいませ。」と呼びかけたりする姿があった。壊れかけると修理したり、遊びやすいように工夫したりしていた。イメージがわきにくく集中しにくい A 児は、的あてゲームの店員になった。小学校でもらった景品（折り紙）をつくらうとしたので、材料を用意すると夢中になってつくる姿が見られた。他の子どもたちも景品のルールは理解していた。

1 日目、的あてと景品づくりの場が離れていたことにより、店員と景品づくりを平行して行うことができなかった。そこで、2 日目は並行して行えるように環境を再構成した。前日には気付かなかった遊びの場に気付いたり、H 児のつくっている様子を見て、他児が手伝いに来たりする姿がみられた。



保育者の気付き

互いの共通の経験を取り入れたことが、共通のイメージをもって遊ぶ姿につながった。保育者が景品づくりと店の係と一緒にできないと考え、子どもの気付く前に場所を変更したことは、子どもたちに任せてもよかったのではと反省した。2 日間の合同保育をより充実した楽しい経験になるようにという、保育者の意図（思い）が強すぎて、環境（場の構成など）を準備しすぎてしまったのではないかと、カンファレンスで気付くことになった。

《考察》

実践研究の事前事後のカンファレンスにおいて、保育者たちは、互いの子どもの姿を示し知り合うことで、共通した援助や環境の構成をする実践を行った。保育者は幼保合同保育という数日の限られた中での交流と考えて、子どもたちに楽しい一日を過ごさせたいという思いが強かったといえる。事後のカンファレンスでは、第三者的に保育を見た研究部員から保育者の思いが強すぎるのではないかという意見がでた。その視点から、保育者は自分の保育を振り返ることにつながり、自園の「子ども自ら遊びをつくる」実践研究を再構築しようとするようになったといえる。

11/1 の保育内容について その後のカンファレンス内容の一部

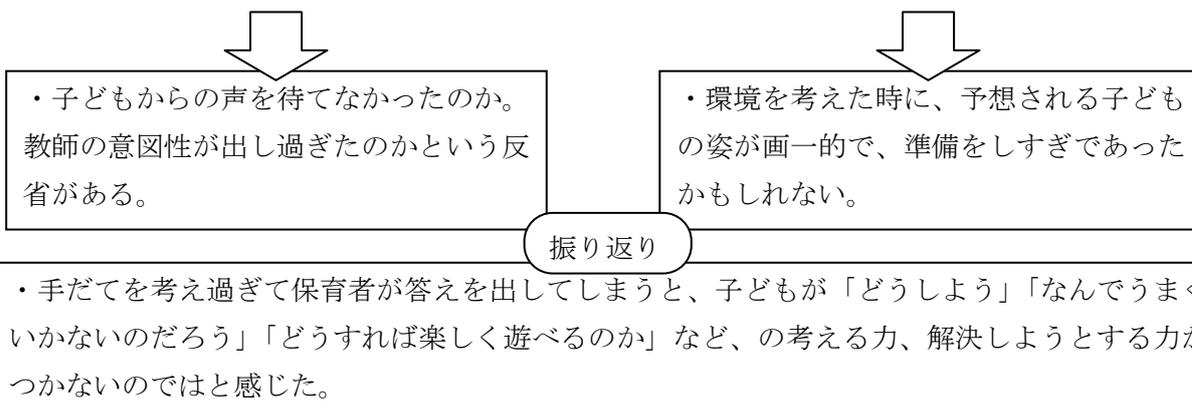
①園庭に引かれた白線は必要だったのか。

幼稚園

・合同保育を行うために、子どもにとってわかりやすいということに重きをおいた。棒で線を書いたり、水で線を引く経験もしているが、「みんなの町」をイメージした時、線路がはっきりしたほうが、始めて遊ぶ保育園児もわかりやすいだろうと考えた。また、線路があることで、子どものイメージを広げていけると考えた。

保育所

・前日の 31 日は、保育園児は幼稚園の園庭で遊ぶ経験が少なく、思いつき走り回ってほしいという思いがあり、線を引いて 2 人乗りにした経緯がある。白線もあえて途中までにして、子どもたちがどうするのかを見守ることにした。子どもたちは途中までの白線に気付き、線をつなげたことで、遊びが「みんなの町」から広がったと思われる。



②風が吹き何回も倒れたケーキ屋さんの看板を保育者がもっていたが、もし持つことをやめていたらどうだったか。

幼稚園・保育所での振り返り

・強風のため、何回も看板が倒れ、危険性も感じられた。子どもから「先生、押さえといて。」との声もあった。子どもは軽くて飛びやすいケーキは風の当たらない場所へ、重くて飛ばされない様なケーキは台の上に置くなど、自分たちで考えて工夫していた。看板をもたなければ、怪我をするかもしれないと考えたので、今回の対応を行った。一方で、怪我をしないように見守りつつ、何回も倒れる看板をどうするのか、子ども自ら答えを出すまで待つこともできたかもしれない。『子どもにどんな力をつけたいのか』を考え、これからの保育に生かしていきたい。

幼稚園・保育所でのまとめ

・幼保合同保育の実践研究を行ったことで、「この環境構成はこれでよかったのか」「こんな子どもの変化があったよ」などの話し合いを、保育者間でたくさんすることができた。研究部員からもいろいろな角度から子どもの様子を聞き、とても勉強になった。「これでよかったのか」「もっとこんな方法もあったのでは」と考えていくことができた。保育所、幼稚園の子どもをつなごうとするのではなく 4 歳児、5 歳児の今の発達や興味を探り、夢中になれる遊びができれば子どもたちはつながっていくことを感じた。

また、今回の幼保合同保育を研究する中で改めて、小学校への滑らかな接続に繋がるような、幼保合同保育、保幼小連携の重要性と継続していく大切さを感じた。

(3) 幼保合同保育の取組における学び

①子ども自らつくる遊びについて

6月、7月、10月、11月と継続した幼保合同保育では、季節や発達段階に応じた保育内容を計画した。6月、7月は、子どもの興味関心に応じて、水遊びを中心に展開した。水遊びでは子どもたちが試したり、工夫したり、失敗したりする経験を重ねることができ、自ら遊びをつくりだすきっかけとなり、学びの芽生えにつながった。

10月、11月では、幼稚園での継続的な遊びを基本に計画した。小学校2年生との交流「おもちゃランドで遊ぼう」の経験や自然物を取り入れての遊びを中心に展開した。どんぐりを保幼で一緒に拾ったことで、どんぐりを使った遊びをつくる姿が見られた。木の実を使った遊びがおもちゃランドでのゲー

ムでの遊びにつながった。

幼保合同保育を通して、子どもたちは楽しかった遊びを「やりたい」、「続きをしたい」、「もっとしよう」という意欲が育ってきた。4歳児は、自分一人が楽しむのではなく、「みんなでしたい」という思いが出てきた。子ども自ら遊びをつくり出すためには、子どもたちの思いを共有させることと、遊びに広がりをもたせることが大切であると感じた。1年を見通しながら、ねらいや保育内容等について検討の機会をもつ中で、幼稚園でのカリキュラムの捉え方、計画に基づく保育の展開を知ることができたことで、保育所での保育とつなげて学ぶことができた。具体的には、保育所保育士は、幼稚園教員がカリキュラムを子どもの発達に沿って経験してほしい保育内容を計画し、子ども自ら作り出す遊びもカリキュラムに位置づけて、保育を進めていることに気付いた。また、指導計画にある「遊び」でなくても、「ねらい」に沿った活動であれば、子どもの思いを受け止めて活動を展開することに重きを置いていることも分かった。その視点を生かして、子ども自ら遊びをつくり出すための援助を考えるようになった。

しかし、保育所では0歳からの保育環境を保障することが必要であり、幼保合同保育での環境構成（遊びの場の確保や遊びの続きを残しておくこと）を残しておくことが難しい現状がある。幼保合同で「子ども自ら遊びをつくる」保育を実践したことにより、学びや経験を大切に環境構成の捉え方について保育士の気持ちの中で、学びにつながる子どもの見取りを行い、記録しようとする変化が見られた。保育士が子どもの見取りを深めることが、援助の仕方を考えることにつながり、そのことから子どもの遊びにも、自ら遊びをつくりだそうとする変化が見られるようになった。

②環境について

子どもによって望ましい環境構成は異なることに気付いたり、人的環境を一人一人の子どもに合わせたりしたことで、子どもの発達や学びの連続性を（幼保合同保育→保幼小連携）に繋げる努力がいることに気付いた。また、幼稚園児だけで遊ぶ時より遊びの場を広げたり、場と場の配置をどうするか等、子どもの遊ぶ様子を予想したりしながら関わりがもてるような場づくりをした。その中で、環境の構成とねらいの関係の重要性をあらためて認識することができた。子どもの遊びの盛り上がり方、興味の変化を敏感に感じ取り、それに応じた環境や動線を検討する機会をもてたといえる。

保育者がどのような子どもの姿を願って保育をしているかによって環境設定は変わるが、「ねらい」によっては、保育準備を含めた環境設定をどこまでするかについて意見を出し合い様々な角度から見ていくことが必要であると感じた。

③保育者の援助について

子どもが困ったり、悩んだり、失敗したりしながら友達同士の学び合う姿を大切にすることや見守ることや、援助のタイミング・言葉かけ等、保育者が目の前の子どもの姿を見て「子どもの遊び方や工夫を見守る」「教え込もうとせずに子どもの気付きを大切に」「連携をとって子どもの様子を見守るようにする」ことを学ぶことができた。

一人一人の子どもへの援助をするためには保育者間で密な連絡を取り合い、情報を共有することが大切だと感じた。紙面での文章だけでは捉え方の違いがあるので直接話すことが必要であると思われる。

2. 教育的意意思決定について

1) 保育者の教育的意意思決定の自覚

保育者がまず教育的意意思決定にむけて、①教育的意図を意意識すること。②指指導案を振り返ること。③次の保育を決めること。④指指導案を作成することで共有することが大事であることを確認し合った。また、指指導案作成や活動の内容を決めるときに、綿密に打ち合わせをし、互いに教育的意図を意意識するようにしたことで意意思疎通が図れた。それは保育者が目の前の子どもの姿を見て、互いに会話しながら臨機応変に教育的意意思決定を行い、援助や判断をすることにつながった。

2) 保育者の学びと変化

6月の幼保合同保育は、雨天のため実施するかどうか迷った。朝から電話で何度も協議し、楽しみにしている子どもの思いを最優先し実施することにした。指指導案から雨天でもできることを考え、その為の環境や援助について判断しなおし、環境を構成した。しかし、計画は大事であるが、子どもの経験からの学びを考えたとき、どうすればよいかの判断が難しかった。

幼保合同保育では、子どもの実態も違うし人数も増える等、いつも遊んでいる環境をどう構成したらいいかと悩んだ。保育者が保育所の子どもが来て人数が増えることを予想して遊びの場を広げたが、幼稚園の子どもたちだけで遊ぶのには遊びにくい環境であった。このことは、子どもに適した環境でなかったかもしれない。カンファレンスをして、保育についての様々な意見を聞くことで、子どもに遊びの場を広げたい思いがあれば、自ら環境に関わって広げていくはずと捉え直すことができ、そのままの環境から始めたらいよいよことに気付いた。また、子どもの困った思いが出せる場があってもよかったのではないかと反省した。

子どもの思いや気付きを大切にしたいが、「いつ声をかけるのか」「どこに何を置くのか」など教育的意意思決定を意意識するあまり、それぞれの場面で「私は今こう判断したが本当にこれでいいのか」と迷ってしまうことがあった。しかし、その迷いについて保育者間で話し合うことで意意思疎通がはかれ、同じ気持ちで保育をすることができた。

【幼稚園教員の学び】

日頃から園内の職員同士で話し合いをしながら、子どもの姿を振り返り、援助はどうするのかなどを考えることにより、職員が共通理解をもって保育することができ、明日への遊びにつながった。保育所と幼稚園の職員が、場の構成や明日への保育について話し合うことにより、子どもの見取りの視点などを知る機会になった。互いに観察し、話し合う機会をもつことの大切さを改めて感じた。

今回の幼保合同保育にむけて、まず4歳児、5歳児の幼稚園の幼児の姿をしっかり捉えていこうと教師間で遊びの様子や反省を毎日出し合うことから始めた。教師間で話し合う機会を多くもち、環境構成や援助の在り方を考えていくことができ勉強になった。「子どもが自ら遊びをつくる」ためにどのような環境構成や援助をしたらよいか教師間で話し合うことができた。

幼稚園では幼保合同保育の前や後も遊びが継続している。いつもの遊びに保育所の幼児がはいってくることを十分に予想しながら環境構成を行ったが、いつもと違う環境に戸惑う幼児の姿もみられた。様々な幼児の姿に臨機応変に対応できる教師の力量が必要だと感じた。

「教育的意意思決定は迷うことからのスタート」という話があったが、正にそのとおりだった。これでいいのかなど疑問を持ち、自問自答し、意見を聞き、決定し、共通理解し、遂行する。また疑問をもつ、という繰り返しだったが、その時間を有意義にすることが、自身の教育観の更新・修正に繋がっていく

のだろうと実感した。

【保育所保育士の学び】

幼保合同保育に向けて幼稚園と共に、変化していく子どもの姿をその都度出し合いながら、話し合いを重ねてきた中で、年齢ごとの子どもの発達やカリキュラムをふまえ、環境とつなげた『ねらい』を見つけ出していくことの大切さを改めて感じた。さらに子どもが興味をもっている遊びの環境を、そのねらいにつなげるためにどのように発展させていくか話し合い、実際の環境設定等を共に経験する中で、様々な形で保育者間の意見交換ができた。

幼稚園との話し合いの日程や時間の調整をしていく中で、生活時間やその他様々な違いを実感した。保育所では子どもを保育しながら平行して話し合いを進めていかねばならず、保育士間で共通理解していく時間の確保が難しかったが、保幼の保育の取り組みの様子や子どもの姿、それを受けてどのような環境設定や援助を行っていくのかなど、多くの時間を費やし話し合ったことで共通認識をもって保育に臨むことができたことはよかった。しかし、保育所では子どもたちが長時間過ごしているの中で話し合いの時間を確保することは難しく、もう少し効率的な方法が考えられたらよかったです。

幼保合同保育を通して、遊びの見取り・環境設定・援助方法についてなど、たくさんの方から意見をいただき多くのことを学んだ。この経験を今後の保育に活かせるように広い視野をもって、柔軟な対応ができるようになりたい。

3. 保育者の協働について

1) 研究協力園における協働について

(1) 遊びの視点の違いと調整

保育所と幼稚園では、“養護”と“教育”という視点からか、遊びの捉え方に違いがあった。幼稚園では、子どもがおりのままの環境に関わって自ら遊びをつくりだすことを考え、子どもの姿を通して環境を整えることを行おうとするが、保育所では子どもの発達の姿とその時期ならではの遊びを経験させようとした環境を整えようとする違いがあると思われる。“養護”の視点から、『生命の保持』と『情緒の安定』を第一に考える保育士にとって、低年齢の乳幼児も関わる遊び場や園庭で、遊びを継続して発展させるための環境をどのように作っていけばよいのが課題になった。そこで、幼保合同保育を「子ども自ら遊びをつくりだす」という観点を大切にしながら、進めることにした。

保育者間で、幼稚園での日々の保育で考えている「遊びを通して行う総合的な指導」「環境を通して行う教育」ことについて、話し合いを積み重ねた。また遊びの内容に於いて、テレビを媒介とした遊び、キャラクター等の扱い等の意見の相違があったが、出し合うことで多様なものの考え方にふれることができた。こういった保育者間の話し合いの中で協働する姿が生まれ、保育観や教育観の確認や調整につながっていった。

保育観の違いはあっても、子どもたちが自ら学ぶ力、就学前に身につけてほしい力は共通であると考えた。幼保合同保育をするなかで、そのことを保育者が共通理解し話し合うことで、学びの芽生えを培うことができると思われる。

(2) 協働して実践したことの学び

指導案の作成や環境の構成などを一緒にしていくなかで、保育者が自分の思いを出し合うことをしてきた。また、話し合いを重ねることで互いの思いをくみ取ることができるようになったので、自園での保育内容が深まったと感じた。たとえば、幼稚園教員の子ども自ら遊びをつくりだす保育に向け

での環境構成について知ったことや、子ども一人一人の見取りを話し合ったことで、保育所保育士と幼稚園教員が同じ視点に立って、子どもが何を考えて遊びを進めているのかを読み取るようになったこと、また指導案を作成するなかで、子どもの姿やねらいや大切にすることについて話し合うことができたこと等を通じて感じる事ができた。

2) 研究部員の協働から自園への取組について

(1) 幼稚園研究部員の学びと自園の取組に向けて（研究部員の感想から）

- ・子ども自ら遊びをつくる保育を目指すために、幼保の指導計画を再確認し、その時期（自然環境・経験）ならではの遊びを展開することや、幼稚園や保育所で継続した遊びを展開している中から共通した遊びを取り入れるようにすること。また、子どもたちがこれまでに興味・関心をもち試行錯誤しながら遊びを展開しているところへ、自然なかたちで興味をもった幼児と一緒に遊ぶことで、気付かなかった遊び方や楽しみ方を知り、改めて考えたり工夫したりしながら遊び込んでいくことができるのではないかと捉えた。
- ・保育内容を照らし合わせながら、どちらの園に行っても自然な形で一緒に遊べるように、保育者の連携を密にしながら無理のない幼保合同保育を計画すること、職員の合同研修、互いの保育を公開し保育参観や保育参加をすること、合同行事の実施（合同の誕生会・運動会等）を考えた。
- ・幼保合同保育研究の計画としては、窓口になる保育者を決め、日程調整や連絡等を行う。まずは、幼保の保育者間の打ち合わせで幼児の実態やその時期の幼児の様子を出し合いどんなことをねらいにしているか、配慮が必要な幼児など共通理解しておきたいことを話し合う。当日、一緒に過ごす時間の指導案を共通のものにする。保育を行いその後、保育園の午睡の時間等を利用してカンファレンスを行うことを実施しようと考えている。

以上の研究部員の感想からみられることは、「子ども自ら遊びをつくる保育」の幼保合同保育を行うために、どのようなことから始めればいいのかを実践研究に参加することから学ぶことになり、自園でも実施しようと考えていることにつながった。

(2) 保育所研究部員の学びと自園の取組に向けて（研究部員の感想から）

- ・保育者間の関係づくりが大切だということ学んだ。保育者が意見を活発に交わし保育を一緒に考えることで、保育内容も深まり、共通の目的、ねらいに向かって保育し、臨機応変な保育、教育的意思決定も可能になると気付いた。
- ・保育者が幼保合同保育の必要性を認識し、継続的に行うことが大切であり、保育内容は丁寧に互いの園の子どもの姿や普段の遊びを出し合い決めていくようにしていきたい。子どもへの援助や環境の構成は普段から大切にしていることを出し合い、教育的意思決定を行いながら、進めていくことが大切であると気付いた。そこで、幼保互いの子どもの遊びの情報交換や共通の遊びの実践を行うこと、共通の形式の指導案の作成をすること、行事や遊びの交流、カンファレンスを行うこと等をすすめていこうと考える。
- ・自園で幼保合同保育を実践し発展させていくには、幼保としての保育観ではなく、一人一人の保育者がもっている保育観を共有し、違いと共通点を知ること（保育者理解）と、子どもと触れ合い知ること（子ども理解）からのスタートだと思われた。

以上の保育士研究部員の感想からも、幼保合同保育の必要性を感じ、子どもの遊びを充実させることから始めて、保育者間での話し合いや関わりを深めようとする思いが感じられた。

Ⅲ. 指導案一本化の試み

— 帯解幼稚園・帯解保育園 —

1. 帯解幼保合同保育の実践

1) 目的

幼稚園教員・保育所保育士が互いの保育観を学び合い、行事を交流の柱として、幼保合同保育の指導案作成の一本化を行いながら協働による教育的意思決定に焦点をあて、保育内容の質を高める。

2) 研究協力園の概要

《帯解幼稚園》

昭和 51 年 4 月に奈良市立帯解幼稚園として開園。二年保育年少 4 歳児、年長 5 歳児、計 4 学級の保育を想定して創立された。本園は奈良市南部、JR 桜井線（万葉まほろば線）帯解駅より東に徒歩 3 分の所に位置している。園周辺は緑の木立や田畑が広がり、自然環境に恵まれている。近年は、幼児数減少に伴い年少 4 歳児 1 学級、5 歳児 1 学級計 2 学級である。

園の教育目標は、「豊かな心を持ち 明るく元気でたくましい子どもの育成」である。園児は明朗快活で、様々なことに興味をもち何事にも積極的に取り組む姿が見られる。しかし、少人数のクラス編制となり、園での集団生活の経験に深まりや広がりが見られにくい傾向がある。

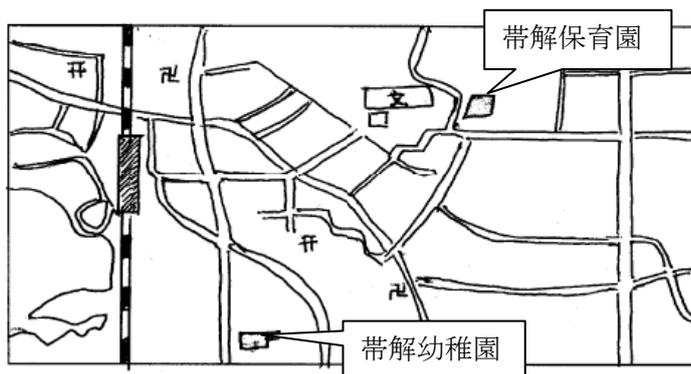
《帯解保育園》

昭和 28 年 11 月に帯解町立帯解保育園(1 年保育)として開園し、昭和 30 年には、奈良市立帯解保育園(3 年保育)となる。昭和 50 年に新園舎となり 0 歳児産休明け保育がスタートした。本園は奈良市南部にあり、周囲は田畑に囲まれており、自然に親しめる環境に恵まれ季節を感じることができる。また、帯解寺・円照寺・正暦寺などが近くにあり文化的な環境に恵まれている。園児は、明るく素直で活発で、いろいろな事に興味をもち意欲的に遊ぶ姿が見られる。

園の保育の特色は「豊かな自然に触れ、心もからだも育つ保育園」であり、保育目標として「生き生きと遊ぶ子ども」「自分も友だちも大切に子ども」「意欲的に遊ぶ子ども」をめざしている。

《帯解幼稚園と帯解保育園の立地状況》

帯解幼稚園と帯解保育園は歩いて、15 分ほど離れた所に位置している。帯解保育園の隣には、帯解小学校がある。

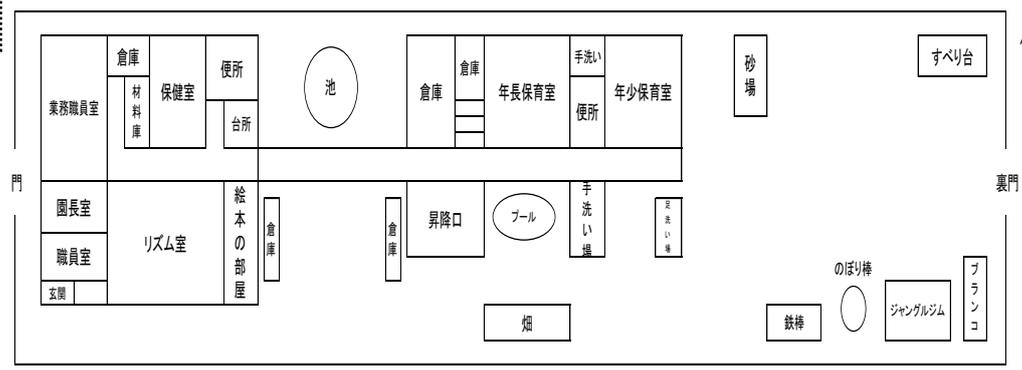
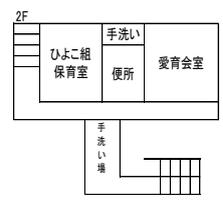


・園児数並びに職員数

《帯解幼稚園》 園児 10 名、職員 4 名

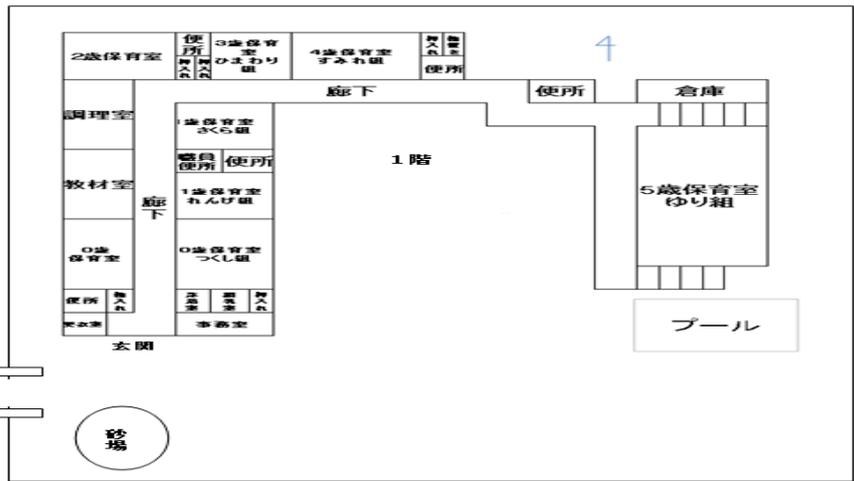
学年	学級数	園児数 (人)	職員 (数)
2 年保育 4 歳児	1	5	園長 1 人
2 年保育 5 歳児	1	5	担任 2 人
合計	2	10	業務員 1 人 合計 4 人

帯解幼稚園配置図



《帯解保育園》 園児 124 名、職員 33 名

学年	学級数	園児数 (人)	職員 (数)
0 歳児	1	16	園長 1 人
1 歳児	2	21	副園長 1 人
2 歳児	1	22	担任 24 人 (正規: 12 人 臨時: 12 人)
3 歳児	1	23	看護師 1 人 (他園と兼務)
4 歳児	1	15	調理師 4 人
5 歳児	1	27	パート 2 人 (午前 1 人・午後 1 人)
合計	7	124	合計 33 人



帯解保育園配置図

3) 方法

- (1) 幼児が一緒に遊ぶことや園外保育に参加することを行事として捉え、行事の交流を柱とする。
- (2) 幼稚園教育要領と保育所保育指針を踏まえ、合同指導案作成に向けて協働作業をする。
 - ① 1 回目の幼保合同保育では、活動の内容を決め、それぞれに環境構成や保育者の援助について打ち合わせ指導案を作成する。
 - ② 2 回目では、教育要領と保育指針をもとに、幼保互いに指導案を作成し互いの共通点を見出し、4 歳児・5 歳児の発達を踏まえ、各年齢の担任が協働し指導案を作成した。
- (3) 幼保合同保育を年 3 回行う。(奈良市立帯解幼稚園内 2 回・園外保育地域神社)
- (4) 幼保合同交流として帯解地区敬老会に参加し、園児と一緒に活動する。
- (5) 幼稚園教員が、保育園にて 2 歳児・3 歳児の保育補助として保育に関わる。
- (6) 幼保合同保育における反省評価をし、研究部員作業部会によるカンファレンスをうけて、成果と課題を明らかにする。

4) 取組の特徴

子ども自ら遊びをつくる保育の実践研究として、帯解幼稚園が過小規模園であり、子どもにとって人との関わりを体験する機会にもなる幼保合同保育をすすめた。保育者の保育観や子ども観の共有化ができ、幼保合同保育の活動を話し合うことから、指導案の一本化が必要であると考えたことになった。その中、教育的意思決定の在り方についても、話し合いを重ねることで保育内容の質の向上を図ることになった。

そこで、幼稚園教育要領と保育所保育指針を互いに読み合い、共通理解をする中で、指導案の作成ができた。互いの意見が加わった指導案に基づき幼保合同保育を実践した。

5) これまでの幼保交流、幼保合同保育の経緯

平成 17 年度に文部科学省・厚生労働省の「総合施設モデル事業」の指定を受け、市立帯解幼稚園と市立帯解保育所において調査研究を行った。幼稚園教員と保育所保育士が互いの保育を参観し合ったり、園児同士の交流をしたりするなどの幼保合同保育を実施した。調査研究内容としては、幼稚園教育要領と保育所保育指針を踏まえ、共通の活動を考えた交流、2 日～5 日間の幼保合同保育、給食の体験、互いの園行事への参加、地域の敬老会での合同交流などを行った。幼児にとっては、人数の少ない幼稚園児と保育園児と一緒に遊ぶことで、集団的な遊びの豊かな経験ができた。教員と保育士にとっては、幼稚園と保育所における互いの文化の違いを知ることができたが、日頃の保育の習慣や指導案立案、環境構成、援助の仕方などについて互いの理解を深めることに難しさがあり大きな課題となった。その後、平成 18 年度からは、子どもの様子や年齢の発達を踏まえた保育内容について打ち合わせを行いながら、年 3 回～4 回の交流を実施してきた。

6) 幼保合同保育の経過

(1) 幼保合同保育の概要

①日時 平成 24 年 7 月 12 日 (木) 9:00～10:30

公開保育内容 大雨、雷注意報発令のため、幼保合同保育は 7 月 18 日 (水) に延期

②日時 平成 24 年 7 月 18 日 (水) 9:00～10:30

公開保育内容 (場所: 帯解幼稚園園庭)

子どもたちは砂や土を使って遊んだり、草花や野菜の皮で色水やごちそうづくりをしたりして遊んだ。子どもの姿から、遊びのおもしろさや楽しさが体験できるように、新しい素材や用具を準備したり、砂場の砂の量を増やしたりした。子どもたちが他の遊びに関心をもつことができるようにテーブルを配置した。また、保育者が遊びの中で仲間として楽しむことで、子どもが遊びに興味や関心をもつことができるようにした。子どもが初めて出会う友達と遊ぶ楽しさに気付いたり、まわりの友達に関わったりできるようにしながら、子ども同士のつながりをもてるようにした。トラブルや衝突が起きた時は、互いの幼児の思いを十分聞くようにした。

③日時 平成 24 年 11 月 9 日 (金) 10:00～11:00

公開保育内容 (場所: 園外保育—八坂神社)

どんぐりや落ち葉拾いに行く。

前日までに、保育者が八坂神社の自然環境を把握し、子どもが興味や関心を深められるような保育者の関わり方や、安全面について十分に話し合った。また、保育者自身が感動を表し、互いの園児と意識的に関わるようにした。

④日時 平成 24 年 11 月 14 日 (水) 9:30～11:00

幼保合同保育 平成24年11月9日(金) 指導案	
担任	幼一二年保育4歳児年少 ○○○○ 保一4歳児 ○○○○ 幼一二年保育5歳児年長 ○○○○ 保一5歳児 ○○○○ ○○○○ ○○○○
ねらい	(4歳) ○ 幼稚園と保育園の友達と一緒に遊ぶことを楽しむ。 ○ どんぐりや落ち葉などの自然物を使った遊びを楽しむ。 (5歳) ○ 幼稚園と保育園の友達と親しみをもつかわり、一緒に遊ぶことを楽しむ。 ○ 落ち葉や木の葉を使った遊びを通して、色や形、大きさに興味をもち、楽しむ。 (共通) ○ 公共の施設での過ごし方を知り、約束を守って遊ぶ。
内容	(共通) ○ 幼稚園と保育園の友達と一緒に歌を歌ったり、手遊びを楽しむ。 (4歳) ○ 園外保育へ行き、身近な秋の自然を観る。 ○ 幼稚園と保育園の友達と親しみ、親しみを感じる。 ○ どんぐりや落ち葉の色や形、大きさに興味をもち、楽しむ。 (5歳) ○ 色づき始めた木々や落ち葉に気づき、季節の変化を感じる。 ○ 友達と話し合い、落ち葉やどんぐりを拾い、集める。 ○ 友達と一緒にどんぐりを並べたり、絵に描いたり、遊ぶ。 (共通) ○ 集団で行動する際の約束を知り、守る。
○予想される幼児の活動 ◇環境構成 ○保育士・教師の援助	
保育園	7:30 ○登園する。 ○持ち物の給食をする。 ○戸外で遊ぶ。 9:30 ○片付けをする。 ○手洗い、うがい、お茶を飲む。 ○園外保育へ出かける準備をする。 9:45 ○園外保育へ出発して行く。
幼稚園	8:30 ○登園する。 ○持ち物の給食をする。 ○戸外で遊ぶ。 9:20 ○片付けをする。 ○手洗い、うがい、お茶を飲む。 ○園外保育へ出かける準備をする。 9:40 ○園外保育へ出発して行く。
10:00 ○八幡峠に着く。幼稚園、保育園の友達と話し合い、交流する。 ◇前日まで、保育士・教師が八幡峠の木の葉や木の葉の色づき状態を把握し、幼児に興味心を喚起できるように、お話をしたり、安全面について十分話し合っておく。 ◇安全に遊び、取り組めるように保育士・教師間で動線を話し合い、境目の入り口や距離に十分配慮する。 ○歌を歌ったり、手遊びをする。 ◇保育園、幼稚園の幼児が互いに親しみ、一緒に遊ぶことができるように準備する。 ○保育士・教師が園内に入り、一緒に遊ぶ姿を表現し、多くの友達と遊ぶ姿を知らせる。	

合同保育の指導案として、一つに表すために、ねらいの文言の検討、また、ねらいを年齢別、共通とに分けた。一日の流れが表わせるように、自園での様子も記述した。

「養護」とは何であるのかを、話し合いの中心にしたことで、期間案には記述する必要があると捉えた。

幼稚園では、「健康」の領域に見られる内容であるが、保育所保育指針に表記されていることを基本にして記述した。

幼稚園の期間案から作成、「養護」の記述を入れる

期間案 平成24年11月5日(月)～11月17日(土)		
(幼) 2年保育年少もも組	男児3名 女児2名 計5名	担任 ○○ ○○
(保) 4歳児すみれ組	男児6名 女児9名 計15名	担任 ○○ ○○○○ ○○ ○○○
幼児	○ 体を動かすことに適したこの時期に、縄遊びや、フープ遊びに意欲的に挑戦している。また、年長児に混じってボール遊びや、鬼ごっこをする姿も見られ、遊びのルールを教えてもらいながら、楽しむ姿が見られる。 ○ 友達と一緒に遊びたいという気持ちが高まり、誘い合って遊ぶ姿が見られる。その反面、自分のを十分伝えられない時や、相手の思いに気づかずトラブルになることもある。 ○ 秋の自然物(落ち葉や木の葉、秋の草花など)を取り入れて、ままごと遊びをしたり、自分ものを作ったりしている。それを使って遊んだり、飾ったりする姿も見られる。	
ねらい	○ 友達とかわかって遊ぶ楽しさを味わう。 ○ 自分の思いや考えを伝えたり、友達の気持ちにも気づいたりしながら、一緒に遊ぶ。 ○ いろいろな自然物を使って遊ぶ楽しさを知る。	
養護	○ 寒暖の差や活動量に応じて、衣服の調節や室温に留意し健康に過ごせるようにする。 ○ 子どもの考えや、気持ちを受け止め意欲的に自分の思いを表現できるようにする。	
内容	○ 戸外でボール遊びや縄遊び、鬼ごっこなどをして体を動かして遊ぶ。 ○ 遊びのルールや約束を知り、守って遊ぶ。 ○ 木の葉や木の葉を集めたり、遊びに使ったりする。 ○ 自分の思いを言葉で伝え、友達にも思いがあることに気づき聞く。 ○ 友達と一緒に歌ったり、手遊びを楽しむ。 ○ いろいろな自然物や材料を使って好きな物をつくる。 ○ 幼稚園、保育園の友達との触れ合いを楽しむ。	
環境	◇ 興味をもった運動遊びに取り組みできるように。 ◇ 秋を感じる絵本を用意し読み聞かせたり、集めた自然物を、整理できるような分け入れられるようにしておく。 ○ 友達の中で自分の考えを言ったり必要なときには、話し合ったりして互いに具体的に知らせたりできるようにする。 ○ 身近な自然物や使いたくなるような材料を用意し、意欲的に遊びに取り入れたい、つくったりできるようにする。 ○ 幼稚園と保育園の交流の場では、すぐに遊びの輪の中に入り、幼児の姿も予想されるので、そのような時は保育者も一緒に行動を共にしながら、無理なく親しんでいけるようにする。	

板神社の写真の掲示をしておく。
○ 自分なりに新聞工夫したり、友達とイメージを共有したりしながら取り組んでいることを、保育士・教師も仲間として遊びに入り、認めていく。また、友達と相談しながら一緒にやる楽しさを認め、まわりに知らせ、友達と一緒に協力する楽しさや満足感を味わえるようにする。
○ 自分の意見や考えを聞き入れてほしいという思いから、友達と意見が合わず遊びが通みにくくなることもある。保育士・教師は見守りながらも、互いの思いに気づけるよう声をかけよう。
○ 年長は、4回目の交流で、保育園の友達とかわかる気持ちもたまってきたので、互いに再会する喜びを感じられる言葉かけをする。

日・曜	11/4(日)	11/5(月)	11/6(火)	11/7(水)	11/8(木)	11/9(金)	11/10(土)
幼	好きな遊び						
保	好きな遊び						
日・曜	11/11(日)	11/12(月)	11/13(火)	11/14(水)	11/15(木)	11/16(金)	11/17(土)
幼	好きな遊び						
保	好きな遊び						

合同保育までの、各園での様子がわかるような項目を入れ、遊びの流れがつながるように心がけた。

日	11/5(月)	6(火)	7(水)	8(木)	9(金)	10(土)	11(日)
幼	好きな遊び	好きな遊び	好きな遊び	好きな遊び	好きな遊び	好きな遊び	好きな遊び
保	好きな遊び	好きな遊び	好きな遊び	好きな遊び	好きな遊び	好きな遊び	好きな遊び
日	11/12(月)	13(火)	14(水)	15(木)	16(金)	17(土)	18(日)
幼	好きな遊び	好きな遊び	好きな遊び	好きな遊び	好きな遊び	好きな遊び	好きな遊び
保	好きな遊び	好きな遊び	好きな遊び	好きな遊び	好きな遊び	好きな遊び	好きな遊び

平成24年11月14日(水) 指導案		
人数	幼稚園 — 二年保育5歳児 あお組 男2名 女3名 計5名	保育園 — 5歳児 ゆり組 男17名 女10名 計27名
担任	幼稚園 — 〇〇〇	保育園 — 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ○ 幼稚園、保育園の友達に親しみをもってかかわって遊ぶ楽しさを味わう。 ○ 友達の間でいることに興味をもったり、自分の考えを相手に伝え、相手の意見も聞いたりしながら、一緒に遊びを進めていこうとする。 ○ 秋の自然物や様々な素材、用具を使って自分なりに工夫して遊ぶことを楽しむ。 	
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・友達や保育士、教師と挨拶を交わす。 ・どんぐりや木の葉、木の枝などを使って遊ぶ。 ・自分のイメージに合った素材を選び、試した工夫したりしながら好きなものを作る。 ・自分で工夫したところや考えたところを友達に伝える。 ・共同の素材や用具を大切に扱い、みんなで賢し借り貸しなが遊ぶ。 ○ 予想される幼児の活動 口教師の援助 ◇ 環境構成 	
9:30	<ul style="list-style-type: none"> ○ 先生の話聞く。 ○ 自分たちで工夫して活動を進めることができるように幼児に様々な自然物や素材があることを知らせる。 ○ 好きなものをつくる。(○ 予想される幼児の活動 口 保育士教師の援助 ◇ 環境構成) ○ 保育士、教師がきっかけを作ったり仲間として遊びに加わったりすることでまわりの幼児とかかわりながら活動に取り組めるようにする。 ○ 幼児が気付いたことや見つけたことなどを表現している姿を見逃さず、そのことが幼児同士に伝わっていくよう声をかけていく。 ○ 思い描きながら考え、工夫している姿を大切に受け止め、また、さまざまな材料の扱い方や表現方法を知らせ、表現することを楽しめるようにしていく。 ○ 幼児同士の会話や表現から自分の思いを出したり、友達の思いを受け止めたりしながら協力して遊びを進めることができるか見守る。 ◇ 自然物を使った遊びの写真を幼児が手に取ることができるように置いておく。 	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ どんぐりころがししよう(ボール)。 ◇ 遊びが広がりやすいように大きな板を用意したり、どんぐりころがしに参加したい幼児もどんぐりころがしなら遊べるように小さな素材を用意しておく。 ◇ どんぐりころがしに興味もてるような素材を用意しておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 秋の森を作る。 ◇ 大きめの木の枝をいすに固定して立てておき、高い場所にも幼児の手が届きやすいようにおく。
	<ul style="list-style-type: none"> ペコヤ板・木片・くぎ・どんかち(7)・大型積み木(2) 紙コップ・牛乳パック・どんぐりボンド(2)・筒・空き箱 はさみ(4)・てふき(2)・机(1)・セロハンテープ(1) 	<ul style="list-style-type: none"> 毛糸・リボン・布・フェルト・コルクつまようじ・ねじ・くぎ 包装紙・和紙・ぼたん・ダンボール片 ボンド(2)・のり(2)・てふき(4) いす(2)・巧接台 小枝・どんぐり葉っぱ・木の枝・大きめの木の枝(2)
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 危険な道具を使用する時の約束事を確認し、安全に使用できるように使い方や約束を幼児に説明しておく。 	

期間案では、養護を記述したが、一日の指導案では、遊びの環境の構成や援助について、具体的に記述した。援助については、教育的意思決定をしながら話し合い、指導案にまとめていった。

指導案の一本化といっても、大きく変更するのではなく、同じ紙面で幼保の保育内容が入っている期間案・指導案(日案)を作成したといえる。指導案の文言の内容には、言葉の違いは見られたが、発達に即したねらいや内容、環境の構成、援助についての記述は、両保育者が理解できる内容になった。

また、指導案作成にあたっての保育者の話し合いの場が、保育内容を考える時の教育的意思決定の場となっていた。話し合いの場での幼稚園教育要領と保育所保育指針の読み取りを行う機会にもつながった。

～公開保育研究部員記録から～

日時 : 平成24年11月14日 9時30分～11時15分
 場所 : 帯解幼稚園 天候 : 雨のち晴れ
 参加人数 : 幼稚園児…9人 保育園児…42人 幼稚園教員…3人 保育士…6人
 参観者 : 幼稚園…2人 保育園…9人 指導助言者(学識経験者)…1人 指導主事…1人
 作業部員…5人

(ねらい)

- ・幼稚園、保育園の友だちに親しみをもって、かかわって遊ぶ楽しさを味わう。
- ・友だちのしていることに興味を持ったり、自分の考えを相手に伝え相手の意見を聞いたりしながら、一緒に遊びを進めていこうとする。
- ・秋の自然物や様々な素材、用具を使って自分なりに工夫して遊ぶことを楽しむ。

状況・場所	行動・反応	見取り(発達の姿を捉える)
・小雨の中を歩いて幼稚園に到着し、部屋の環境を見渡しながら友達と話す。	・名前を呼びあい、再会を喜ぶ姿が見られた。 すぐにクラスに案内され、たくさんの自然物や準備物を見て「やったあ。」と声をあげながら目を輝かせ、出迎えてもらった友達と一緒に座って話を聞く姿が見られた。 ・部屋の中では、たくさんの素材を選び思い	・朝の出会いだけでも、交流の関わりが深まっている姿が感じ取られた。 ・前回一緒に集めた自然物などが並べられている様子を見て、期待の気持ちが言葉に現れていた。

<p>・ 4 歳児 5 歳児に分かれて各クラスで遊ぶ。</p> <p>・ 自分のしたい遊びに取り掛かる。</p> <p>・ 10 時 20 分頃になると部屋の中の人数は半分ぐらいになる。</p>	<p>思いに作ることを楽しんでた。</p> <p>・「できたんどうするの?」「この棚に飾ってどうか。」「うん。」と棚に飾り次の場に行ってしまう。</p> <p>・「これ開けれへん。」と糊の入れ物を持っていた保育所の幼児に、幼稚園児が「貸して。」と手を差し伸べた。保育所の幼児は「ありがとう。この子も開けたって。」と手を怪我している子の糊を手渡した。「いいよ。」と糊を開け、何事もなかったように制作を始めた。さらに下に敷く台紙を、幼稚園児は保育所の幼児の分も多い目にもらって渡していた。</p> <p>・徐々に、素材を選んでじっくりと工夫し、友達と話しながら作る幼児が増えてきた。</p> <p>・「両面テープどこ?」と探し回っている幼児に「こうしたらできるよ。」とセロテープを丸めて使う方法を教えてもらい「さすが。」と受け取った。</p>	<div data-bbox="614 152 1018 459" data-label="Image"> </div> <p>・興味のあるものを集めて使いだした。</p> <p>・最初はたくさんの素材に触れることがうれしく、できたものにあまり執着の無い幼児が多かった。</p> <p>・さりげないやり取りの中に、回を重ねてきた幼保の関わりが見られた。</p> <p>・時間をかけて作りたいものをイメージし友達と話しながら作ることで、飾って置くよりも持って歩く姿が見られた。</p> <p>・セロファンテープで両面テープができることに感心していた。</p>
<p>・たくさんの素材があり最初は、何かを作りたいという思いを実現することよりも、目新しいものを使ってみたいという思いから、作れたらすぐに棚に飾って終わる幼児がいた。しかし徐々に、友達と話しながら作ることを楽しみ、イメージを共有することで気の合う友達と遊びを進める姿が見られた。</p> <p>・はじめから全ての素材を出してしまうのではなく、子どもからの要望など必要に応じて準備することも大切な援助になるのではないかと感じた。</p>		

<どんぐり転がしの事例>

5 歳男児 A 男と B 男が、紙筒の棒を使って、どんぐりコースを作っている。B 男は大型積み木を階段に置き、A 男は筒を置いて、もう 1 本の筒をつなげようとする。A 男はどんぐりを転がして下から出てくると喜ぶが、筒が転がるため、両方の筒を手でもつ。他の男児たちが来てどんぐりを転がしていたが、A 男は「何でおれがずっと持たんとあかんの?」と文句を言う。「おれが」と B 男は短い筒を横に置き、長い筒を支えようとするが転がる。A 男も 2 つの筒をつなげて置こうとするが転がるため、

「これ難しいな」と話す。A 男と B 男は道具カゴから板を見つける。A 男は 2 枚重ねて上の筒を支える台にし、「ほら」と手を離すと筒は転がらない。しかし、すぐに下の筒が転がったため、B 男も板を 2 枚置き、A 男が 2 枚足して、下の筒を支える。再びどんぐりを転がすが、風が吹いて筒が転がり、A 男は慌てて直す。B 男は上につなげて、道具カゴに立て掛けようとし、板を 2 枚置いて台にする。A 男は床につく部分に板を 3 枚置き、高さが足らずさらに 5 枚持ってくる。A 男はどんぐりを入れ、出てこない、「あれ？」とのぞき込む。筒を揺らして出てくると「おー、来た！」と喜ぶ。しかし、風が吹くなどしてすぐに筒がずれ、そのたびに A 男と B 男がつなぎ目を揃えることが繰り返され、なかなか転がせないため、人が少なくなる。B 男も別の遊びへ行くが、A 男は筒が転がらないよう、牛乳パック 2 つで筒を挟むなどしている。30 分近く遊んでいたが、強い風が吹いて、筒のコースごと崩れてしまう。A 男は「あー！風どうにかして！」と不満そうに困っている。その後、保育者がガムテープを持ってきて A 男にかかわる。B 男も戻ってきて、つなぎ目をガムテープで貼るのを手伝う。

(研究実践保育者からの反省)

この日のドングリ遊びでは、5 歳児の 4、5 名が戸外のプールの段差を使って、筒をつなげ、どんぐりを転がして遊んでいたが、風が強かったこともあり、何度も筒が転がってコースが崩れていた。何とか筒が転がらないように、と繰り返し協力して取り組み、板を置いて台の高さを調整する工夫も見られた。しかし、強い風が吹いてコースごと壊れてしまった。このとき、保育者はどのように援助すればよかったのか、ただ見守って子どもが答えを出すのを待つのがよかったのかを考えさせられた。子どもの学びを大切にしつつ、適切な援助がないと、子どもが達成感を味わう機会を逃がしてしまうのではないかと感じた。

また、事前に様々な場合を想定し話し合っておくこと、保育を振り返って話し合う機会をもち、次の保育へつなげていくこと、子どもへの援助について共通認識しておくことは、適切な援助につながるのだと再確認した。

(3) 幼保合同保育の結果

①子ども自らつくる遊びについて

幼保合同保育の前に子どもと一緒に遊ぶ楽しさを感じることができるようねらいを出し合い、子ども自ら遊びをつくり出せる環境や援助とは何であるかについて話し合いを重ねた。そのことで、保育者が子どもの遊びについての共通理解や共通認識ができたといえる。

子ども自ら遊びをつくりだすためにはどの程度の環境や援助が必要であるかということについては意見がまとまりにくかった。子どもの思いと保育者が用意した環境とのずれに気付くことになった。3 回の幼保合同保育の実践から、幼保の子どもが経験していることや保育の中で興味を示しているものの中から共通している点を照らし合わせて環境や援助を考えた。このことから、幼児は普段の経験の中から新しい遊びを見つけたり、友達のさまざまな意見を取り入れたりしながら遊びを進めようとする姿が表れたと考える。

幼保合同保育では指導計画を持ち寄り、すり合わせをし、子どもの興味、関心を具体的に出し合い、育てたい力を保育者間で共通認識し保育内容を考えたことで、回を重ねるごとに子どもが親しみを感じ、言葉を交わしたり、次の交流を楽しみにしたりする姿が見られるようになった。また保育者同士が親しく話したり、互いの園児に声をかけたりすることが、子どもたちの安心につながり、自らが遊びだすきっかけとなった。

②環境について

子どもの実態を話し合いながら様々な行動や言動を予測し、どのような遊びをするか、その遊びを進めていくためにはどのような素材・用具が必要であるか等話し合った。また、興味が集中すると予想される遊びや時間を必要とされる遊びなどで、関わりが生まれるような位置関係などを考慮した。必要に応じて用具や素材を提供したり提案したりすることで、遊びが深まる手だてとなることが分かった。

しかし、子どもの実態を出し合い、予想しながら様々な素材や材料は用意したが、「この素材はこれをつくるため。(たとえば、カラービニールで葉っぱの服をつくる)」という保育者の思いが強く表れた環境構成になっていたことを反省した。

初めての環境の中で遊ぶことを考慮し、用具や素材の提示において、自らが選びやすく片付けやすい、誰が見てもわかりやすいように、分類や表記の仕方を工夫し、自分たちで片付けたという達成感を味わえるように配慮した。

また地域の神社など身近な環境に目を向けどんぐり拾いを計画したことは、自分の集めた自然物を使って、「つくりたい」という子どもの意欲につながったのではないかと思われる。素材を画一化せず、様々な大きさや形の物を用意し、自らが自由な発想で使いこなせるような素材・材料の提示の仕方が必要であった。また、活動の途中で環境を再構成する場合においても、子どもと共に取り組み、自らがどのように遊びの場を展開していくかを見守るべきであった。

③保育者の援助について

幼保合同保育の活動で、互いの子どもに保育者それぞれが積極的に関わる機会が増していったことで、子ども同士が互いの思いに気付いたり、伝えたりしようとするようになった。工夫したり試そうとしたりする子どもの姿を見守り、保育者が提案したり声をかけすぎたりしないように共通認識することで、遊びの中で共に考えたり感動を共有しながら遊びが進められたりできた。

しかし、言葉かけや提案の程度や関わり方が、「あまり～しすぎないように」という共通認識では、実際の保育の中で、どこまでは声をかけていいのか、どこまで関わればいいのかと、援助に迷いが生まれてしまった。その結果、遊びが深まるきっかけを与えられず、子どもの思いが遊びの中で生かされなくなったこともあったかもしれないように思われる。

2. 教育的意思決定について

1) 保育者の教育的意思決定の自覚

- ・ 幼保合同保育において当初保育のねらいから環境、援助をどのように捉えて遊びとつなげていくか、言葉かけをどのようにしようかということが、共に教育的意図を明確にもって、子どもたちに関わられていなかったことを反省する機会になった。
- ・ 子どもの姿を見取り、援助の在り方を判断していく中で、保育者がすぐに答えを出してしまうのではなく、今何に気付いているのか、何を学ぼうとしているのか、自分の力で解決しようとしているのかを、よく見極めて、「見守る」「まかせる」「言葉がけをする」などの援助の在り方を教育的に意思決定していく必要があるとわかった。
- ・ 保育内容を考えた環境の構成や子どもの動きを見ながらの援助について、手を貸すかどうかや声をかけるかどうかの葛藤の中に教育的意思決定があると気付いた。

2) 保育者の学びと変化

- ・カンファレンスにおいて「ドングリ転がし」の場が話題になった。その中で、保育者は「こうなることが当たり前だろう。」と思い込んでいる所があった。板の上で転がすドングリ転がしで遊んでいた子は、ドングリに釘を打っていた姿もあり、ドングリ転がしのできあがりのイメージがなかったのではないかと。また、筒でドングリ転がしをしていた子どもたちは、協力し、意見を言いながらしていたと捉えた。しかし、約30分間も筒でドングリ転がしをしていたが、風で転がってしまい、「風どうにかして！」と言った事に対し、保育者は見守りをしただけに終わった。見守りも必要だが、言葉かけや援助をしたら、違った展開になったのではないかと思われ、子ども自ら遊びをつくるための援助はどのようにすればいいのかを考える機会になった。
- ・互いの保育者がそれぞれの場面で判断し援助するので、タイミングの難しさを痛感するとともに、事前に様々な場合を予想し話し合っておくことや、事後に話し合う機会ももち、共通理解しておくことが大切であると感じた。
- ・子ども自ら遊びをつくりだすための環境を整えることの大切さを改めて感じた。子ども自ら遊ぶ中はどうしたらいいのか考える力はあるか、遊びの中で何か学ぶ力となっているか等、遊びの様子を見守ることと、遊び込む姿への声かけのタイミングの難しさを感じた。保育者の判断力により、子ども自ら遊びをつくりだす世界の広がりや左右されるので、保育者の見極めの大切さが問われると感じた。

【幼稚園教員の学び】（研究協力園幼稚園教員の感想より）

- ・幼稚園の幼児にとっては、過小規模園であることから同じ年齢の多数の幼児とかかわることで最初は緊張した様子であった幼児も3度目の幼保合同保育では保育園の幼児と名前を呼び合って遊ぶ姿がみられるようになった。このような経験をこの時期に重ねていくことで、様々な考えや思いにふれ、人と関わる力が身に付いていくのだということが幼児の姿から見受けられた。
- ・幼保合同保育に取り組んだことで、保育への思いや幼児の発達、遊びの姿など重なる部分がたくさんあるからこそ、その中で言葉や遊びの用具や素材の使い方などの少しの違いを擦りあわせていく部分に難しさを感じた。しかし、重なり合う部分もたくさん見出すことができる機会となり、共に保育にかかわる保育士・教員として、幼児の姿から何を読み取り、感じていくことが大切かということを通認識できたと考える。このことが、年長児は小学校で関わり合う幼児の中に共通するものが生まれ、また新たな関わりへとつながるのではないかと考えることができた。
- ・幼保合同保育に取り組む中で、最初は何をどうしてよいのか迷いや気構えがあったが、何度も回を重ねて研修したり、カンファレンスに参加し実践した保育を様々な角度から見直したり、たくさんの先生がたからの意見を頂くことで、多様な保育展開の在り方を知ることができた。また、自分の保育の進め方や幼児への言葉かけや、そのタイミング等についての傾向を知り、自分の保育や保育観を見つめ直す機会をもつことができた。この積み重ねが、幼児理解につながり教育的意思決定の共有化につながっていくのではないかと思われた。
- ・幼児にとっては、同じ地域の中で育っていくであろう幼児たちが交わり、多様な考え方や思いの表し方に接する機会がもてたことで、様々な気付きや刺激を受けたのではないかとと思われる。また、交流の回数が増すごとに大勢の中で自分をどう表出していくかを、幼児なりに模索し、他者を受け入れ、友達関係を築いていこうとする力につながっていくのではないかと思われた。

【保育所保育士の学び】（研究協力園保育所保育士からの感想より）

- ・保育所では、環境構成を考える中で「こういう遊びをしてほしい」という保育士側の意図が強く働くことが多く、固定された遊びの環境になってしまいがちだが、子どもが考えたり工夫したりしながら遊び

を進めるためには、どんな環境構成であるべきかを考える機会となった。子どもたちの遊びを見ながら、必要な物を足したり、片付けたりしていきながら、見守ったり援助していくところに『教育的意思決定』が働くのではないかと思う。幼稚園と保育所の互いの保育者が一緒に指導案を作成することで共通理解ができた。また、就学前の幼児を同じ視点で見ることと、保育者が一緒に研修を受けることで互いの保育の質を高めることになり、それが連携の質を高めることにつながると思った。

- ・保育所と幼稚園が関わり合うことで、幼児の姿や遊びなどを保育士や教員がどのように捉えているかで幼児の姿にも変化が見られることが分かり、保育者が親しく挨拶を交わす姿を見ることで互いに幼児も関わり合っていく姿がみられるようになったと感じた。このことから、保育者がモデルとなることで幼児の関わりも深まっていき、自分に関わる人の分だけたくさん刺激をうけ、相手を思うことや自分の考えも柔軟になっていくのだと感じることができた。その場、その時期の遊びの姿を追うだけでなく、その後の互いの園での幼児の言葉や姿をどのように捉え、先を見通していくかがとても大切になると学んだ。

3. 保育者の協働について

1) 研究協力園における協働について

(1) 指導案作成について

- ・指導案の作成にあたっては、同じ意味で同じような表現であったり、逆に同じ思いであっても表現の仕方が異なったりするなど、協働作業の難しさを感じた。一つ一つの言葉やその内容、伝えたいことなどを確認しあい、表現や表記の仕方など細かなことから、互いの思いや考えを話し合ったことで、ねらいのもち方や互いに重なる部分とそうでない部分を再認識することができた。
- ・指導案作成において、発達の姿や経験させたいことにおいては、同じであることがわかったが、教育要領や保育指針を読みあう中で、保育所では『養護的なかわり』を大切にしていることを知った。何度も検討し合う中で、互いの教育を理解し合おうとなったのではないかと思われる。

(2) 保育実践から

- ・互いに十分話し合いを行って指導案を作成し、幼保合同保育をしてきたつもりであったが、実際の保育の場では、子どもたちの素材や用具の使い方から幼保の経験や文化の違いを感じるがあった。当たり前に行っていることであっても、改めて細かく確認しあうことが大切であったと考える。
- ・互いの文化の違いを知ることから始めたことで、子どもの姿や子どもに対する思いを出し合った。姿や行動、子どもを取り巻く環境について、細かい部分まで考え相談した。そのことで子どもの捉え方やねらい、援助等が同じ方向に向き、本音を出し合い共通理解することができた。

2) 研究部員の協働から自園への取組について

(1) 幼稚園研究部員が幼保合同保育研究に参加し、学んだことから自園の取組へ

(研究部員の感想から)

- ・幼稚園教育要領と保育所保育指針を互いに知ること、「養護」と領域「健康」について、個々の生活時間帯が違うことなどの根本的な違いを改めて感じた。交流をもつだけでも、その課題を考慮して歩み寄らなければいけないことに気付いた。
- ・幼保合同保育での打ち合わせや指導案を考える時に互いに理解し合いながら、話し合いによる意見交換を重ね、教育的意思決定をしながら学ぶことができた。そこで、事前の計画と実践を繰り返す中で、よりよい保育が生まれ、保育者同士の資質の向上にもつながると感じた。

- ・今後も今までの幼保交流活動が幼保合同保育になるように、幼保での打ち合わせや指導案などを見直していけるような話し合いの場をもちたいと考える。また、保育所を知るために、夏休みに子ども様子を観察しながら一日体験として、保育所で子どもたちと関わる機会を得ることも、互いを知る第一歩としてひとつの方法だと思われる。

上記の研究部員の感想のように、研究部員が自園でも実践しようと考えてようになってきている。事前の計画作成や事後のカンファレンスの繰り返しを経験したことで、自園での研修に取り入れることもできるのではないかと考えていると思われる。また、保育所を知ることや保育内容を実際に見る機会をもつことから始めようと考えていることがわかり、研究部員の意識の高まりがみられた。

(2) 保育所研究部員が幼保合同保育研究に参加し、学んだことから自園の取組へ

(研究部員の感想から)

- ・公開保育に参加して、指導案のすりあわせや環境の構成、それまでの保育の流れ、援助の仕方等の歩み寄りが、いかに大切なのかと分かった。
- ・子どもが主体的に遊べる環境を、保育者が全て整えてしまうのではなく、年齢や発達に合わせ、子どもと一緒に準備することや、五感を使う遊びの環境も十分整えなければならないことを学んだ。
- ・準備する素材の量や種類について、多すぎると落ち着かない環境になっていくと捉えるのでなく、豊かな環境の中で子どもが自ら選びとっていき力をつけていくことが大切だと学ぶことができた。そこで、子どもが主体的に遊べるように準備物や場所を整えることや、複数担任の為にどんな場面で声かけしていくのかなど、話し合う場をもっていこうと思う。また、幼保合同保育のカンファレンスの内容を園の職員にも伝えて、園内の保育の充実を図るようにしようと思う。

上記の研究部員の感想から、子ども自ら遊ぶ保育の充実を図るために、環境の構成や援助の仕方、保育者の協働についても考え始め、実践するためにカンファレンスを自園で実践しようという姿がみられた。

IV. 協働3年目、保育者間の意思決定の揺れ

「“遊びのイメージ”の違い」への気付き

— 六条幼稚園・京西保育園 —

1. 六条幼京西保合同保育の実践

1) 目的

- ・子どもが主体的に継続して遊びに取り組んでいく環境構成や援助の在り方について研修する。
- ・保育内容の相談、実践、振り返りを協働して取り組む。幼稚園を遊びの場とした経験や課題を生かし、保育園を遊びの場とした環境・多様な場面を捉え、より豊かな保育の創造と保育者の資質向上を目指す。

2) 研究協力園の概要

《六条幼稚園》

昭和48年に開園。奈良市の北西部（平城京を東西に通る六条大路にあたる場）に位置し近くには世界遺産の薬師寺や唐招提寺がある。地域や保護者は、園への関心が高く幼稚園にも協力的である。

4歳児、5歳児とも2クラス編成で大部分の幼児達は、明るく活発で何事にも興味をもってじっくりと取り組む姿が見られる、友達と一緒に取り組む事が楽しいと感じている。本園の教育目標は「心身共に健康で豊かな心をはぐくみ、未来を拓く幼児の育成」を挙げている。

《京西保育園》

昭和55年4月4日定員120名で開園。その後、宅地開発が進むに伴い増設。平成12年4月1日に160名定員の園となる。安心感や信頼感を土台に様々な体験を通し、自分が好きな子、思いやりのある子、意欲的に表現できる子、自分で考えて行動できる子を目指して0歳児からの保育を行っている。

卒園児のほとんどが六条小学校に入学するという他園にはない地域でもある。子どもは比較的落ち着いているが、保護者同士の関係が希薄で子育ての情報交換ができにくいところもあり、過保護な傾向が見られる。

《六条幼稚園と京西保育園の立地状況》

六条幼稚園は小学校と隣接し、京西保育園とは700m程離れたところにある。

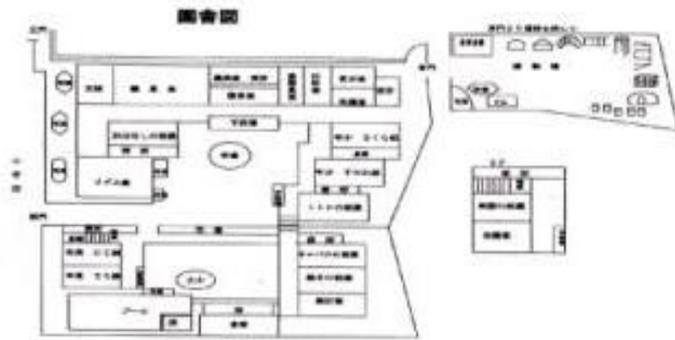


・園児数並びに職員数

《六条幼稚園》 園児90名、職員8名である。

学年	学級数	園児数 (人)	職員 (数)
2年保育4歳児	2	48	園長1人 主任1人 担任4人 特別支援教育支援員1人 業務員1人 合計8人
2年保育5歳児	2	42	
合計	4	90	

六条幼稚園配置図

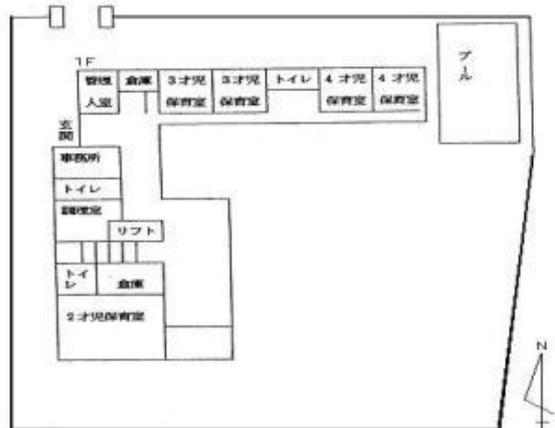
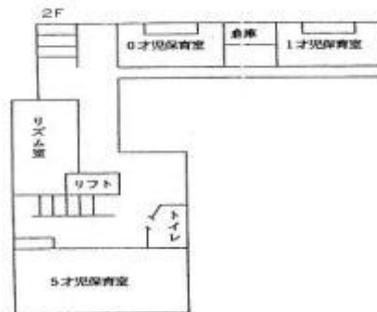


《京西保育園》 園児 167 名、職員 39 名である。

学年	学級数	園児数 (人)	職員 (数)
0 歳児	1	16	園長 1 人 副園長 1 人 担任 29 人 フリー 2 人 調理員 3 人 パート (午前 2 人・午後 1 人) 合計 39 人
1 歳児	2	26	
2 歳児	1	30	
3 歳児	2	31	
4 歳児	2	30	
5 歳児	2	24	
合計	10	167	

京西保育園配置図

奈良市立京西保育園 園舎配置図



3) 方法

- (1) 幼保合同保育 3 年目として協働を積み重ねてきた成果・課題を生かして実践する。
- (2) 0 歳児～5 歳児が生活する保育所を遊びの場とする。
- (3) 事前・事後の準備、指導案の立案、振り返り等、協働して保育する。
- (4) 連続 3 日間の幼保合同保育を含め、7 日間の幼保合同保育をする。
- (5) 幼保合同保育における反省・評価をし、カンファレンスを受け、成果・課題を明らかにする。
- (6) 幼稚園の保育者が、保育園にて 4 歳児・5 歳児の保育を主としてする。

4) 取組の特徴

幼保合同保育実践を 3 年間積み重ねたことで、互いの保育観や子ども観については、共通認識が深まってきている。しかし、「子ども自らつくる遊び」については、遊びの進め方のイメージには違いが見られる。

それは、子どもが楽しく遊ぶために、どうするのかを考えはじめに十分な環境を整えること、あるいは子どもがうまく遊ぶことができないことがあっても、必要な援助だけをして子どもが自ら気付くように援

助することの違いがある。幼保合同保育の実際は、互いの教育的意思決定を互いにわかっていると捉え過ぎたことから始まった。幼保合同保育の実践の中でリレーの遊びを焦点にした。

5) これまでの幼保交流、幼保合同保育の経緯

平成 22 年度までは、年間計画の中で年 3 回程度、行事を中心とした交流活動をした。平成 22 年度は文部科学省指定「幼児教育の改善・充実調査研究事業」において両園で公開保育を実施し、保育参観を通して意見交換をし、互いに保育の見直しを行った。平成 23 年度は、年度当初に計画を立て、「自ら選んで行う経験や活動」を幼稚園の運動場で行った。また、3 日間の連続幼保合同保育を夏に、連続公開幼保合同保育を秋に実施した。

6) 幼保合同保育の経過

(1) 幼保合同保育の概要

①日時 平成 24 年 6 月 15 日 (金) 9:15~10:30

保育内容 (場所: 京西保育園園庭)

平成 24 年度では初めての幼保合同保育になるので、互いに親しみがもてる機会とした。クラスの紹介や担任の紹介をした。環境の構成や援助として、保育園の園庭の遊具を自由に使って遊び興味や関心をもって遊べるようにした。

②日時 平成 24 年 6 月 22 日 (金) 9:15~10:30

公開保育内容 (場所: 京西保育園園庭)

20 日が雨天のため変更して実施した。環境については、土・砂・水・草花を使ってこの時期ならではの遊びが十分楽しめるようにした。援助としては、遊びの様子や子どもの様子を伝え合い、保育者が連携を取り合えるようにした。遊びの後の話し合いは、ペアをつくり保幼の保育者がリードを交代して行った。

③日時 平成 24 年 6 月 29 日 (金) 9:15~10:30

公開保育内容 (場所: 六条幼稚園園庭)

保育園児が幼稚園で遊びたいという思いを受け止め、遊びの場を幼稚園の運動場にした。水を使っ
てのダイナミックな遊びを存分に楽しめる環境とした。幼稚園の保育者が進行した。

④日時 平成 24 年 9 月 25 日 (火) 9:15~10:30

保育内容 (場所: 京西保育園園庭)

運動会ごっこで遊ぶ場を構成し、運動会にむかって意欲が高めていけるように環境構成した。共通に遊びが進められる場としてリレーの場を園庭の真ん中に作った。援助として、3 歳児も加わることを配慮した。いろいろな遊びの中で友達が頑張っている姿を認め合える援助も心がけた。

⑤日時 平成 24 年 10 月 22 日 (月) 9:15~10:30

公開保育内容 (場所: 京西保育園園庭)

予測される遊びの場を事前に共通理解して、当日の子どもの姿に応じて再構成できるようにした。転がし遊びの場が築山(土山)で楽しめるようにした。使ったり試したりできる素材・用具を豊富に準備した。援助として、子どもの姿を具体的に伝え合い、個々の思いを十分聞き主体的に取り組めるようにした。

⑥日時 平成 24 年 10 月 29 日（月）9：15～10：30

公開保育内容 （場所：京西保育園園庭）

自分たちで工夫していけるような素材や自然物を追加した。幼稚園で使っている用具も持っていった。遊びの後の話し合いの援助として、明日の遊びに繋げていけるように言葉かけをした。リレーの話し合いは全体と各クラスで行い、子どもたちの思いを十分出していけるようにした。

⑦日時 平成 24 年 10 月 30 日（火）9：15～10：30

公開保育内容 （場所：京西保育園園庭）

連続しての遊びが楽しめるよう前日の振り返りを生かして環境構成をした。リレーはみんなで共通理解をしたことが実現できるように環境・援助をした。保幼一緒に遊んで楽しかったと感じ合えるよう保育者が共感し合える援助をした。

(2) 実践事例

『リレー』 活動月：平成 24 年 10 月 対象年齢：5 歳児

(概略)

子どもたちは、運動会で使ったハチマキの準備をし、意欲をもってリレー遊びをしようとしたが、なかなか進まず、保育者の仲介でリレーをすることができた。その日の振り返りから少し子どもたちに任せてよいのではないかと保育者間で共通理解があった。次回からは子どもたちが自分たちで進めようとする姿が見られたが、思うように進まず、課題が残った。最終日は、保育者の援助の在り方を考え、共通理解をしてリレーを見守り、援助した。

【ねらい】 ○友達と思いや考えを出し合いながら、リレーを進めたり、競争を楽しんだりする。

活動の様子・子どもの姿	教師の援助・環境構成	教師の意図
<p>10/22</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リレーの用意をしたり、並んだりして集まり、始めようとしていた。先頭は早くしたい様子だったが、後ろでは、チームの人数が足りないことで、進められないでいる。 ・友達を呼びに行くなど、自分たちで進めようとしたが、解決できず困っている。 ・保育者の言葉かけで人数がそろい、リレーを始める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・チームの人数が偏っていることを気付かせるために3人で座ることを提案し、それからどうすればいいかを問いかける。 ・人数の多いチームに、人数が不足、困っているチームがあることを知らせ、一緒に考えられるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちでリレーを進めるために、見てわかるように伝えながら、どうすればいいのかを考えさせるようにする。 ・リレーの楽しさを味わうまでに、やる気を継続させるために解決方法を知らせる。
<p>10/29</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リレーの準備物（フープ、コーン、バトンなど）をトラックに並べて、リレーを楽しみにしている。 ・好きな色のハチマキをつけている。「ハチマキやって。」「後ろ向いて、やってあげるわ。」と言い合うなど気持ちが高まっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもがリレーの準備がしやすいように、目につきやすい場所に用意する。 ・ハチマキは取り出しやすいように、1つずつ容器に入れて用意する。 ・準備する様子を見守ったり、役割を見つけたり、友達と協力したりできるように言葉かけをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちに考えさせながら進めていなかったことを反省し、保育者間で再確認し合い、子どもたちがどこまで進めていけるかを見守る。 ・保育者の指示で遊びを進めるのではなく、子どもたちでできるところまで進めてほしいという思いで、見守りを続ける。

活動の様子・子どもの姿	教師の援助・環境構成	教師の意図
<ul style="list-style-type: none"> ・A 児は、リレーを早くしたい思いから、周りの友達に声をかけ、並ぶように促したり、走る順番を知らせたりしている。呼びかける、声がどんどん大きくなっている。 ・B 児は「アンカーになる。」とアンカーたすきをしたり、友達と「絶対に黄色チームが勝つ。」と言い合ったりして、意欲を表しながら、大きな声で思いを伝えようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・リレーをしたいという思いに共感しながら、A 児が進めていこうとしている姿を認める。 ・B 児の思いにも共感しながら、A 児と一緒に進めていく姿を見守る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・チーム人数が違って、エンドレスに走るようになってもいいのではないかと保育者の思いがあったが、子どもたちは、運動会での仕方ですべてにチームを分け、人数やアンカーを決めてほしいという思いを強くもっていることを知り、見守りを続ける。
<ul style="list-style-type: none"> ・リレーを進めようとする A 児を見ている子どもや、チームに分かれてリレーが始まるのを待っている子どももいる。 ・保育園児は、幼稚園児の姿に圧倒されつつ「早くやりたいな。」「まだー。」と少し不満を言いながら、様子を見ている。 ・C 児は、「早くしようよ。」と友達を誘うが、個々の思いがバラバラで、始めることができない。C 児は、「みんな並んでくれないし、途中でどこかに行ってしまう。」と保育者に不満を話している。 ・人数が合わないまま、リレーが始まる。まだ並んでいない子どもたちは、走れない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・すぐに声をかけず、場の近くや離れたところにいるながら、子ども達の様子や進めていこうとしている姿を見守る。 ・C 児のリレーをしたい思いを受けとめ、なぜ進められないのかを考えるように「どうしてかなあ。どうすればいいかな。」と言葉をかける。 ・C 児は不満を口にしているので、子どもの思いを受けとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちのリレーでの互いに相談することや他の遊びをしている友達に話をするに対して、保育者間で確認する。また子どもたちを信頼し、解決に向けての姿を見極める。 ・気付いた子どもが声を出し合い、思いを伝え、周りの子どももその気付きに対して、自分の思いを言ったり共感したりするようになって、話し合いを進めていけるように、できるだけ介入しないで見守るようにする。
<ul style="list-style-type: none"> ・リレーのコースにころがし遊びのトイが横切り、走るのに邪魔になったことを伝えにきた。 ・自分たちで考えて、トイの場所を変えてもらうように友達に伝え、リレーを始めようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・トイのことを伝えにきたが、思いを受けとめながら、どうしたらいいのか、子どもたちで考えていけるようにし、考えや姿を見守る。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・「走れない。」「先頭やアンカーになりたい。」「並んでくれない。」ことへの苛立ちがあり、「もう一回しよう。」「黄色チーム集まれ」とチームの友達を呼んで順番を決め、進めようとしている。 ・途中で入ったり、抜けたりする友達がいることで、混乱し進められずに不満を言い合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・混乱している状況を一度整理できるように、子どもたちを集め、思いや困ったことなどの思いを、一緒に聞く機会をつくり、その思いや考えをみんなに伝えて、共有できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・リレーができない問題を子どもたちで話し合っていてほしいと考えていたが、不満が高まり、子どもたちだけでは解決できないところまで来たと感じる。そこでまずは子どもたちの思い十分に出し合わせるようにする。保育者はその思いや考えを受けとめ、

<ul style="list-style-type: none"> ・保育者の周りに集まり、それぞれが困ったことや、今の状況を一斉に話し出す。「ちゃんと並んだらいい。」「途中で抜けたらできない。」等、話す子どももいるが静かに見ている子どももいる。 ・もう一度、友達に声をかけ、自分たちで進めようとしている。混乱はいったんおさまったが、チームの人数合わせがうまくできず、又、時間がなく結局リレーはできなかった。 		<p>問題解決の糸口をつかませるようにする。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いでは、残念そうな表情で「できなかった。」「みんなバラバラやったから。」「ちゃんと並ばなかったからぐちゃぐちゃになった。」など、リレーができなかった原因や「明日は、絶対リレーがやりたい。」と、今日の悔しい思いを友達や保育者に伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの思いを受けとめたが、時間的に十分に話し合うことができなかったので、クラスの中で話し合う場を設ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・リレーをしていた子どもだけでなく全体の問題として、困ったことを意識付けし、話し合うことで、解決の方法をみんなで共有する。

幼保合同保育
10/29 終了後

幼稚園

保育所

話し合い

- ・リレーが、自分たちでなぜ進められなかったのかを話し合う。「みんなバラバラだったから。」「ちゃんと走る子と手をつながないと。」など、気付いたことを出し合い「もっと保育園の友達の言うことも気かないといけない。」と明日に向けてみんなで気持ちを高め合った。

話し合い

- ・困ったことやリレーが進められなかったことについて「人数バラバラで走れなかった。」「アンカーできなかった。」と意見が出て、「明日は手をつないで並んだらいい。」「小さい子に優しく言う。」「アンカーや順番は相談して決める。」など、ホワイトボードを使って絵をかきながら話し合った。
- ・明日への気持ちも高まり、もう一度リレーをやってみたいという思いが強くなり、「手をつないで並ぼう。」と自分達で声をかけ合って、リレーをした。

振り返り

- ・話し合いで取り上げることで、子どもたちが、リレーのことを考え合い、原因と課題を見出し、明日につなげられるようにした。
- ・できなかった不満などの思いを知らせ、意識づけられたことで、共通の問題として話し合う機会をもつことができた。

振り返り

- ・子どもたちから思うようにできなかったことを解決したいという気持ちが高まった。子どもの意見を受けとめ、共感し、認めることで話し合っ解決していく意識につなげるようにした。
- ・ホワイトボードを使って話し合いをしたことで、リレーのイメージが共有でき、絵で解決方法やルールのことを表現しながら伝え合えることができた。
- ・子どもたちで声をかけ合う姿を認めたり、リレーが出来た喜びを共感したりする。明日に向けての意欲も高まり、子ども達の進め方を肯定することで、進めていける自信につなげた。

活動の様子・子どもの姿	教師の援助・環境構成	教師の意図
10/30 ・登園するとすぐに「今日は、リレー成功しような。」「がんばるよ。」と友達同士で話をして気持ちが高まっている。	・子どもたちが意欲的に登園する姿を認め、その気持ちを受け止める。	・昨日のことを子どもたちがどれくらい意識しているのかを、確かめながら話を聞き、様子を見る。

幼稚園

10/30 朝

保育所

幼稚園児は、保育所に向かう前に、リレーをしたい子どもたちが集まり、ルールを確認し合い、保育所の友達の話も聞くということを、再度みんなで確かめ合っている。

保育園児は、幼稚園児を迎える前にクラスで集まり、昨日の話や今日の遊びへの思いを出し合いながら、ルールや自分たちで進めていく気持ちを確認し合った。

確認

・子どもたちがリレーの約束事や、位置関係など捉えやすくするために、ボードにトラックをかくて、話し合えるようにしたことで、イメージを共有することができた。

確認

・昨日使ったホワイトボードを見ながら話し合うことで、話し合った時の思いを再度確認し合えるようにした。またリレーへの気持ちを高め、共有することができた。



活動の様子・子どもの姿	教師の援助・環境構成	教師の意図
<p>10/30</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育園に到着してリレーの準備がすぐに始まり、自分たちで進めようとしている。 ・昨日より人数は少ないが、保育園の4歳児が多く入り混じって、並ぼうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ハチマキ、フープ、コーンなど自分たちで準備をしている意欲をもっている姿を認めながら、様子を見守る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・用意がある程度できたところで、子どもたちの思いを共有し合えるように、話し合う時間やタイミングを見極める。
<ul style="list-style-type: none"> ・リレーをして遊びたい子どもたちが一度保育者のもとに集まり、昨日のリレーの後、互いの園でどんな話し合いをしたかを伝え合った。「走ったらここに並びます。」「手をつないで座ってなかったから人数が合わなかった。」 ・チームに分かれて人数合わせをする。「黄色が9人、青が11人。」「赤が10人。誰か黄色に入って。」「じゃあ黄色になるわ。」と、人数調整を自分たちで声をかけ合っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者が子どもたちを一度集めて、互いの園で話し合ってきたことを伝え合う場をつくる。 ・ボードを見せることで、イメージを共有しながらルール確認をし、自分たちで進められるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが気付いたことや、できなかった原因、今日のリレーの課題などを話し合えるように、思い出させる話し合いをもつ。
<ul style="list-style-type: none"> ・手をつないで座ることで人数がそろい、一回目のリレーがスタートする。子どもたちはわくわくした表情で「がんばるぞ。」「〇〇くんがんばって。」と友達に声をかけ、その雰囲気を楽しんでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・互いの子どもたちが、自分たちの話し合ったことについて、発表できるように互いの意見を取り上げながら進めていくようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者が進める話し合いだが、子ども達が自分達の問題として互いの思いを伝えられるようにする。



<ul style="list-style-type: none"> ・スタートの合図、ゴールテープ係など、自分達で声をかけ合ってリレーを始めようとしている。 ・D児が「よーいピーッ。」と保育者の笛の合図を真似た。子どもたちは自分のチームの友達を応援し、走り終わったら、決めたところに並んで応援している。他の遊びをしている子どもたちもリレーの迫力に目を奪われ、手を止めて応援する姿がある。 ・「やっとリレーができた。」「あー楽しかった。もう一回しようよ。」と言いながら、チームで集まって人数を合わせている。 ・「リレーができたから、もう違うところに遊びに行ってくる。」と、満足そうに他の遊びに行く子どももいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・チーム意識がもてるように、チームに分かれて人数調節ができるようにし、一緒に走る幼児の確認を、保育者も一緒にする。 ・保育者は、子どもたちが自分で進めたいという思いを大切にしながら、タイミングをみて言葉をかけ、必要な援助をしていく。 ・チーム意識をもって応援する姿を認めて、子どもたちと共に応援する。 ・リレーが成功したことを互いに認め合い、みんなで満足感が味わえるように喜びを共有するようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・様子を見て、遊びが停滞する直前に言葉をかけ、自分たちで考えられるようにする。 ・子どもたち自身で進めていることを実感しながら、楽しんでいる様子を見て、喜びを共感する。 ・リレーができた喜びが味わえるように保育者も一緒に喜びを共感する。 ・保育者が介入しすぎないようにしながら、子どもたちが進めていく上で、約束を思い出したり、どうすればよいかを考えたりできるようにする。
<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いでは、リレーが成功したことをとても嬉しそうに伝え、「リレーができてよかった。」「幼稚園と保育園と同じチームになって走ったよ。」と、リレーができたことをとても喜んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の思いが伝えられるよう、温かい雰囲気をつくり、自分が思ったことを話し合いの場で進んで伝えられるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・リレーをしていなかった子どもたちにも、一緒に喜びを共感してほしいという気持ちで話し合う。

幼稚園

保育所

・幼稚園児は、園に戻ってから、再度保育園の友達との合同保育を振り返り「リレーができてうれしかった。」と話し、みんなで達成感や満足感を味わうことができた。

・保育園児は、幼稚園児が帰った後、合同保育を振り返り「リレー、楽しかったな。」「チームで話し合ったから、リレーができたと思う。」と、みんなで満足感を味わうことができた。

振り返り
 ・昨日、リレーができなかった経験から、今日こそは実現させたいという思いが子どもたちにあふれていて、自分たちで遊びを進めたことを共に喜び、達成感が十分に味わえた。

振り返り
 ・子どもたちが意見を出し、話しながら進めようとしたことや、子どもたちが気付き、考えていけるような援助を行ったことが、自分たちでリレーができたという達成感につながることになり、その思いをみんなで共感し合うことができた。



《事例の特徴》

互いの園のリレーのチーム数や、やり方が少しずつ違うということがあり、子どもの戸惑いとなった。それぞれの園では、年長児として、友達同士で思いを伝え合いながら、進めることができているのに、思いが伝えきれず、自分たちだけで進めることができなかった。

互いの園での“リレー”は、何度も話し合わなくても子どもたちだけで進めることができたが、幼保合同保育だからこそ、互いの思いが違うままではできないということを実感する経験となった。また、幼保合同保育3年目で、子どもたちは、互いの園児と関わりあうことに慣れている。また、顔見知りの友達や保育者もいるため、順番争いや言い争いもできる関係性があったと思う。

今回の「リレーを成功させる」という共通の目的に向かって、最後までがんばろうとする姿が継続したと捉える。“リレーを成立させていく上で、共有の思いをもって進めることを体験しながら、互いに感じ合い学ぶことができた”ということが特徴であると考えます。

《カンファレンス》

22日のリレーでは、『自ら遊びをつくりだす』という視点から見ると保育者が介入しすぎているのではないかという研究部員の指摘を受けて反省し、次は子どもたちに任せてどこまでできるか見守ることを、共通理解する。

29日は、22日の共通理解のもと保育者が入らないようにした。子どもは自分たちで進めようとする姿が多く見られたが、予想以上に途中でいろいろな事が起こり、進まなくなっていく。その様子を保育者は遠くから見守りながらも、どのタイミングで声をかけるかを見計らっていた。一度子どもたちを集めて話を聞くが、一人一人が思いを伝えることが精いっぱい、この日はリレーができないと感じた。

保育者は思いを受け止めることに徹して、リレーを成立させずに終えた。子どもたちにとって、悔しい思いや不満を感じたままであった。幼保合同保育後各園で、できなかった原因を話し合ったり、明日につながる課題を見つけたりして、明日に期待をふくらませるようにした。

30日、朝にリレーについての話し合いをしてから準備をした。子どもの表情が昨日とは違い、意欲満々で、「今日こそは…」という思いをそれぞれがもっているのが見てとれた。準備後、話し合いの場と時間をつくり、互いにリレーに向けて考えてきたことを確認し合った。

保育者は、介入しすぎないようにしながら、子どもたちの思いをその都度拾い上げて考えさせ、話し合うことで、リレーが成立した。みんなで喜び、満足感や達成感を味わうことができた。

29日に成功しなかったことで、自分たちで進めていくことの難しさを感じたり、自分の思いばかりでは

なく、相手の思いも聞くことの大切さを改めて感じたりする経験となった。

《考察》

- ・互いの園の子どもたちにとって、リレーが成立するまでの思いや、悔しさ、話し合いなどの過程と、やり遂げた達成感を味わった経験は、今後の園生活を送る中で、自信を高める良い経験となった。
- ・自分の思いを伝えるだけではなく、その伝え方や折り合いのつけ方、相手の立場に立って考えることを経験から学んだといえる。相手の思いを考えたり、気持ちを感じたりすることの大切さに気付いたことで、クラスでの話し合いの場面でも、相手の思いを受け入れようとする姿につながっている。
- ・幼稚園児が主体となった状況の中で、自分たちの思いが伝えきれなかったという経験は、どのような場面でも、自分の思いを伝えることの大切さを、実感することとなった。その後の園生活で、自分の思いを伝えたいという気持ちが高まっている。
- ・子ども自身で考えて意見や思いを伝え合い、友達と話し合う場での援助の仕方や、自分たちが進めている姿を見守り、必要な場面（タイミング）で援助をするなど、子どもが気づき、考えられるような意図をもった言葉をかけることが、子どもの育ちにつながっていくことを意識できた。
- ・課題を意識しながら子どもの姿を見取り、問題を回避するための援助ではなく、問題を解決していくために必要な援助を心がけることや、遊びを通して何を経験させ、どのようなことを育てたいのかを保育者間で話し合いを深め、環境や援助を共通理解していくことが子どもの主体性につながることを幼保合同保育であらためて考える機会になった。

(3) 幼保合同保育の結果

①子ども自らつくる遊びについて

幼保合同保育をすることで、子どもたちが自分のしたい遊びを見つけられるような環境や、じっくりと取り組めるような時間を計画することが大切であることに気付いた。また、人数が増えることを考慮し、普段子どもたちが使っている遊び道具や素材を持って行くことで、子どもたちの遊びの意欲が高まったように感じた。一方両園でのリレーの遊び方が違ったことで子どもだけで遊びを進めることが難しかった。そのことは1日だけの幼保合同保育では解決できず、充実感をもたせることはできなかったかもしれないが、数日間の幼保合同保育の取組を行ったことで、子ども自ら遊びをつくり出す姿につながった。子どもたちが自分たちで進めたい思いを生かしながら取り組むことで、相手の話を聞くことの大切さや難しさを知り、遊びを進めていく中で友達の話をも今以上に聞く姿が多く見られた。

②環境について

子どもたちが「使ってみよう」「これを使ってみたらおもしろそう」と思える素材を、保育者が多く用意したことで、主体的に遊びに取り組むようになった。また保育所で行う幼保合同保育では、保育所の乳児クラスとの遊びの場や、時間をどのようにするか話し合わなければいけないことが分かった。

幼稚園児にとっては、遊び慣れた道具を持って行くと、すぐに遊びの場をつくることもできた。保育者が、遊びの場を考える際に子どもの視線で構成することで、遊び始めやすくなることを再確認した。けれども、後日、講演会で講師の方との、子どもの自主性を考えた時に、幼稚園児がどのように保育所の環境を捉えて、自ら環境を変えていこうとするのかの実践もあってもよかったのではないかと話し合いになり、検討する余地があると捉えた。

③保育者の援助について

保育者は子どもが意見や思いを伝え合う時に、自ら考え、気付くことができるようにする意図のある言葉かけをすること、また自ら遊びを進めている姿を見守り、必要なタイミングで援助をしたりするこ

とが大切であり、そのことは子どもの育ちにもつながっていくことが分かった。また、ねらいを意識しながら子どもの姿を見取り、遊びで困っていることを助けるための援助ではなく、それを解決していくための意図的な援助が必要であると学んだ。

幼保合同保育を通して何を経験させ、どのようなことを育てたいのかを保育者間で話し合いを深め、環境や援助を共通理解していくことが子どもの主体性につながることを改めて考える機会になった。また遊びの後の話し合いでは、子どもの思いを引き出しやすいように話を進める保育者と話し合いを補助する保育者に分かれて進めるようにする。また、作ったものや見せたいものを見せながら話を進めることで、周りの友達に思いやイメージが伝わりやすくなることに気付いた。

2. 教育的意思決定について

1) 教育的意思決定における迷いと変容

- ・幼稚園、保育所ともに、各園では子どもが自ら楽しんでいる「リレー」の遊びがあったと捉えていた。互いの園でのリレーを進める子どもたちの姿には、自分たちで進めているような生き生きとした姿が見られていたため、幼保合同保育の場でも生まれてくるだろうと考え、環境を準備した。ところが、10月22日の幼保合同保育初日、保育所の場でのリレーは、互いの思いを聞き合うことができずにいた。そこで、『早くリレーをしたい』という思いを受け止めた保育者が、まとめようとするあまりスムーズに進む方法を助言したり、援助をしたりした。その日のカンファレンスでは、保育者の援助が出過ぎでなかったかとの話題になり、次回は子どもの姿を見守ることになった。

その後の幼保合同保育（10月29日）で、今度は遊びを見守ったが、子どもたちだけ、リレーをできずに不満を残す結果となった。この日は、子どもたちに言葉をかけようか、まだ待った方がいいのかと保育者には迷いがあった。しかし、保育者はリレーを子どもに楽しませたいという思いが共通したことで、幼保合同保育後の各園での実践で同じような対応を行っていた。この日の保育では、子どもたちに言葉をかけようか。まだ待った方がいいのか、他の保育者はどう考えているだろうかと保育者同士で迷いがあったようだ。しかし、子どもの姿を適切に見取り、一緒に幼保合同保育の経験を積み重ねてきた保育者同士であったからこそ、その後の対応が相談せずとも同じように揃ったのだろう。

また、幼稚園教員にとっては、通常一人で保育を行っているので、教育的意思決定が簡単にできる場面であっても、幼保合同保育での他の保育者と共に保育することで、他の保育者の思いが十分に理解できていないことから、教育的意思決定の判断に難しさを感じていたといえる。

2) 保育者の学びと変化

- ・遊びの環境や援助を考える際、全ての保育者の思いが一致することばかりではなかった。互いの考えに耳を傾け、より良い環境や援助を共に考えたり一度やってみて再度考えたりすることで、適切な援助や環境構成について考えを深めることができた。また、その場だけのことではなく、その遊びで何を感じてほしいのか、どのようなことを育てたいのかなどを共に考えることが大切であると改めて感じた。
- ・保育所では、0歳児から同じ場を使って遊んでいるため、4、5歳だけのダイナミックな遊びが展開されにくいことや主体的な遊びに対する考え方の違いがあった。子ども自ら判断し、遊んでほしいという願いのもとで、保育計画と一緒に考えたり子どもの遊びを見取り話し合ったりする中で、保育者の柔軟な考え方が大切であり、そのことが子どもの主体性につながるということがわかった。

【幼稚園教員の学び】（研究協力園幼稚園教員からの感想より）

- ・ 幼保合同保育が3年目であることと、保育者が顔見知りであり、一緒に保育を考えていく経験をしてきたことで、意思の疎通も図りやすく、事前の話し合いなどはスムーズに進めることができた。また、指導案を作成していく上で、お互いにどういうことを大切にしていけるか（援助、環境構成など）、意見交流をする中で思いが同じであることや、様々なことについての再認識をし、自分ひとりの思いではなく、互いの教師の思いを共有し合えることができた。
- ・ 遊びの流れや保育の振り返りにおいて、子どもたちをどう見取ったかなどを遠慮せずに言い合い、踏み込んだ話し合いができたことで、お互い学び合うことにつながっていた。
- ・ 子どもたちは、遊びの中でいろいろな困難なことに直面し、うまくいかなかったこともあったが、そのことをその場で話をしなくても、園に帰ってからそれぞれのクラスで話し合いをもてた。子どもたちをどう育てていきたいかという思いが同じであったから子どもたちの話し合いにつなげていくことができた。
- ・ 昨年の幼保合同保育では、その日の保育を振り返り、一緒に考えたり環境を準備したりしていくことが、次の日の保育の質を高めるということを学んだ。今回の幼保合同保育では、初めて保育所に行って遊ぶということで、昨年とはまた違った学びができた。遊びの場を考え、話し合う際に、保育所の子どもたちは、乳児から年長児まで一緒に生活していることで、年齢が低いことに対応した配慮をする必要があることに気付いた。しかし、実際に幼稚園児をつれて遊びに行くと、ダイナミックに遊びたい思いがあり、保育所で今までつくってきても約束に沿わない遊びに発展することもあった。しかし、そのため保育者間で、「子どもたちが遊びの中で何を学んでいるのか。」「私たちは、何を大切にしたいのか。」をより深く考え合うことができた。これは、子どもにとっても普段遊び慣れている幼稚園の園庭では、経験することのないことで、幼保合同保育によって学ぶことができた。
- ・ 共に連続した保育を行うための話し合いでは、互いの園での仕方や考え方などの違いもあったが、相手に理解してもらうために目の前の子どもたちの姿を提示し、自分の思いを伝えたり、相手の思いを聞いたりすることで、より深い幼児理解ができた。また話し合いの中で、子どもの成長を望み、そのために日々の保育をどうしていくか創意工夫して取り組んでいることが、同じことを改めて感じた。
- ・ カンファレンスでは、自分の保育について話す機会を得た。様々な先生に自分の保育の思いを理解してもらうために、話の内容を焦点化することの大切さやどのようなことに焦点を置くのかなどを考え、話すことの大切さに気付いた。
- ・ 遊びの場のスペースを保育士と何度も打ち合わせを重ね、時には園庭の隅々をお互いに見て確認し環境構成を考え意見し合ったことは、幼保合同保育に向けて思いが共有できて良かった。そこで、保育士は乳児の生活も大事にされているのを感じ、細かな配慮と遊びの兼ね合いが必要だと感じた。

【保育所保育士の学び】（研究協力園保育所保育士からの感想より）

- ・ 何度も話し合いをして互いの子どもの様子や遊びの姿を出し合いながら保育を考え、環境や援助などを話すことで、互いの保育や保育に対する思いを知ることができた。保育の振り返りやカンファレンスを通し、明日の保育につながる話し合いになり、子どもや保育に対しての思いを共通理解することにつながった。遊びを通して、子どもにどのような力をつけるのか、課題や育ちを保育者が共通認識し、どの場面でどのような援助が必要かを子どもの姿を見守り、見取っていく中で、援助の意図を自覚しながら保育していくことの大事さを学んだ。子どもの育ちのための援助を考えて、これからも保育を取り組んでいきたいと感じた。
- ・ 改めて援助の難しさと保育の振り返りの大切さを学んだ。遊びの中でトラブルになった時、子どもたち

に任せて、考えて進めている姿をどこまで見守り、いつどのように援助をしていくかなど、いろいろ学ぶことが多かった。子どもたちの振り返りを大切にすることや、保育者の振り返りが、遊びの発展に広がっていくことを学んだ。

- ・遊びを見守ることと言葉かけのタイミングなど、援助の在り方を学んだ。幼保合同保育をすることにより、保育者の遊びに対する視野が広がり、道具や素材などの環境についても学んだ。また保育者が一緒に話し合い、子どもの姿を見取ることにより、互いを知る良い機会となった。互いを知り、学び合うことにより、今後より充実した幼児教育を行うことができるのではないかと感じた。
- ・保育者間で子どもの見取りをし、環境構成や明日の保育に向け、次はどうしていきべきなのか共通意識をもって進めていくことができた。遊びの充実・発展が見られたことで自分自身の学びも多くあった。
- ・今回保育所での幼保合同保育で、0歳児から同じ場所を使っている園庭で、どのように遊びを進めていくか保育者間で話し合い、一緒に環境を準備したり工夫したりし、子どもの遊びを見て援助の仕方の共通理解をすることで次の日の遊びにつなげることができた。子どもたちが交流し遊ぶ姿を見て、その事の大事さを感じた。

3. 保育者の協働について

1) 研究協力園における協働について

- ・合同で保育を行うため互いの保育者の保育観の違いや園生活の違いなどから話し合いがスムーズにいかないこともあった。例えば4歳児6月では、保育園での遊びの中に木工遊びがあるのに対し、幼稚園児では入園して間もない時期に木工遊びをすることよりも他の経験をさせたいという思いの違いがあった。互いの幼児の実態や経験を話し合うことで、互いの保育理解につながり、それを考慮した上で話し合うことができた。
- ・年長児のリレーでは、子どもたちだけで上手く進まなかったことを課題と捉え各クラスで子どもたちと話し合い、それをもちより同じ目的をもって保育者間で話し合ったことは協動的な学びに繋がった。
- ・援助、ねらいを一緒に考え、共通理解をして進めたことで、幼保が同じ視点でその場に必要援助や子どもに考えさせるような声かけ、声かけのタイミングなどの大切さを学んだ。

2) 研究部員の協働から自園への取組について

(1) 幼稚園研究部員が幼保合同保育研究に参加し、学んだことから自園の取組へ

(研究部員の感想から)

- ・幼保合同保育を進める上で、まず年間カリキュラムの作成の重要性を感じた。またカンファレンスで出た課題を全保育者で共通に意識し、それに対する環境の見直しや、援助のタイミングなどの意思決定が保育を左右する。保育者の様々なものを見抜く感性や瞬時に意思決定できる判断力が必要であると思った。
- ・今まで交流がなかった近隣園3園に呼びかけ、「三園交流会」を行事的であるが3回計画した。好きな遊びやゲーム遊びリズム遊びを行う日、幼稚園の作品展の日で3園合同のリレーをする。また興福寺までの園外保育を一緒に楽しむことを企画した。それは、幼保合同保育のまず第一歩であったが、子どもたちの姿から今後も進めることになった。【資料1：参照】

以上のことから、研究部員の中では、幼保合同保育の必要性を認識し、年間カリキュラムの重要性に気付き、研究実践後のカンファレンスも実践しようと考えたり、幼保合同保育が何も進められてい

なかった園でも、まず交流から始めようと第一歩を踏みだしたりした実践が見られた。

(2) 保育所研究部員が幼保合同保育研究に参加し、学んだことから自園の取組へ

(研究部員の感想から)

- ・子どもたちが考えて遊びを創りだしていくことの大切さと保育者がその場にどう寄り添い見守り、子どもたちの思いを遊びにつなげていくための援助をどう進めていくかを考えさせられた。また、環境を整えることで、子どもたちはこんなに遊びこめるのだということを実感した。
- ・幼保合同保育をしていくなかで、保育者同士がたくさん話をしていくということ。そして、振り返り歩み寄り、次へとつなげていき、それを保育者間で共有していく大切さに気付くことができた。また、保育者同士一緒に両園の子どもを保育するからこそ、いろいろな方向からの深い話ができるのであり、それが日々の豊かな保育へとつながっていくということも学ぶことができた。
- ・園内公開保育をしたり、園全体で子どもの様子を出し合い、保育内容や子どもへの対応や援助の仕方などを見直したりする話し合いの場をもつようにした。【資料2：参照】

上記のことから、この幼保合同保育2年目の実践研究に参加した研究部員にとっては、子ども自ら遊びをつくる保育への実践を、自園でも行いたいと考えることが多く見られた。研究部員の園では、幼保合同保育にまで進めることができていなかったが、実践研究に関わったことで研究の仕方を理解して、カンファレンスなども行なえるようになったといえる。

V. 成果と課題

(成果)

本研究の成果については、下記の重点課題、

- ① 子どもが自ら遊びをつくる幼児教育の実践開発：幼保合同保育を通して先進的実践を開発する。
- ② 幼保合同保育の保育研究会やカンファレンスの公開常態化とそのための環境整備：保育者の協働のあり方について実施園のほか、市内の保育者が共同で検討、共有する場をもつ。
- ③ 幼児教育の実践デザインや自主研修の企画・運営に対する研修の実施：保育者の学び合いを促す。を中心に考察し、最後に「教育的意思決定」に焦点を当てて取り組んできた成果をまとめたい。

1. 「子ども自ら遊びをつくる」幼保合同保育の実践開発

異なる特色をもつ3組の研究協力園による取組において、多様な実践を提示することができた。また、実態は違っても、幼保合同保育を行う際の、保育者同士で協働することの必要性や、保育者がどのような教育的意思決定を行っているのかを自覚することの重要性など、共通する内容も見出された。

①小学校との接続を意識し、学びにつながる保育内容を充実した実践事例（第Ⅱ章参照）

神功幼稚園・神功保育園では、「子どもの学びのめばえ」に視点を絞り、保育者の協働も小学校との接続を見据えて研究を進めていった。この取組からは、保育内容の充実には、まず環境の構成をしつかりと行い、遊びの中で子どもの気付きを大切にしていくことが重要であることが分かった。また、困りや失敗の中に大切な学びがあり、子ども自身の力でどう乗り越えていくのかという視点で見守り援助することが教育的意思決定につながることも見えてきた。

②指導案一本化がこれまでの保育からの脱却につながった実践事例（第Ⅲ章参照）

帯解幼稚園・帯解保育園では、「指導案の一本化」の試みを通して実践を行った。互いの保育を見直し、話し合い、具体的に指導案を作り上げていくという協働作業を通じて、これまでの保育からの脱却をねらった。指導案を一本化していく中で、幼稚園教育要領と保育所保育指針を読み解き、さらに指導案の作成時や幼保合同保育後に、子どもの姿や環境構成、援助について話し合うなかで、ともに教育的意思決定を意識して考えるようになり、保育者の資質向上が図られていった。

③保育者間の意思決定の揺れがより質の高い教育的意思決定につながった実践事例（第Ⅳ章参照）

六条幼稚園・京西保育園では、「保育者間の意思決定の揺れ」が焦点化された。保育者の協働による幼保合同保育に取り組み始めて3年目。保育者同士が自信をもって保育に臨んだが、幼保のリレー遊びのイメージのズレという課題に気付いて、子どもとともに揺らぎながらも、より望ましい教育的意思決定について考え、同じねらいで実践できたことは、これまでの積み重ねの成果といえるだろう。夢中になって「子どもが自ら遊びをつくりだす」ためには、保育者の援助のタイミングや声かけ、環境構成での適切な教育的意思決定こそが大切であることに気付いた実践である。

3組3様の実践研究であったが、幼保合同保育を通して、幼児の学びがどのように促されたのかについては、共通した成果が見られた。

①子どもが、葛藤を乗り越えるために考え、自ら遊びをつくりだす連続した幼保合同保育

幼保合同保育は、幼稚園、保育所それぞれの子どもにとって普段と異なる保育の時間である。勝手が違う環境、集団、遊び方の中で遊ぶため、子どもたちは戸惑いや困り、衝突などの葛藤を体験する。しかし、継続的に幼保合同保育を行い、同じ場で遊ぶことを積み重ねることで、その葛藤を乗り越えていった。2～3日連続して遊ぶことで、子ども同士が協力して工夫したり、新たに挑戦したりする等の展開・発展する過程に学びが見られ、夢中になって自ら遊びを作り出すことにつながっていた。また、戸惑いを経て互いに親しみを感じる仲間となっていく過程も見られ、同じ地域の幼稚園と保育所であるため、入学に向けて互いに会うことへ期待をもつ良い機会にもなっていた。

②幼保合同保育による日々の遊びの広がりや深まり

幼保合同保育での豊かな遊びや遊び方等、新たな刺激を受けた経験が生きており、子どもたちは自園に帰ってからの遊びでも、さらに広げて展開する様子が見られた。また、保育者にとっては、幼保合同保育を年間カリキュラムの中に位置付け、実践に向かって準備する過程や保育カンファレンスを繰り返すことによって、普段の保育の援助の仕方や環境構成について深く考えるようになり、その結果、子どもの気付きや学びを深めることにつながったと考えられる。

2. 幼保合同保育における保育者の協働の在り方

本年度の調査研究では、今回初めて保育者が協働して幼保合同保育に取り組む研究協力園がある一方、3年目の取組となる研究協力園もあった。しかし、どの園においても、保育者が協働する際、

①子ども自らの遊びを大切に、子どもの姿から思いや学びを見取り、理解する

②子どもの遊びを教育的意思決定のもとに見守り、援助する

の2点を重視して、共有していく過程が示された。

①子ども自らの遊びを大切に、子どもの姿から思いや学びを見取り、理解する

まず保育者同士が協働する際、

- ・子どもの姿を見守り、保育者の援助や言葉がけを控えて、子どもの思いや学びを見取る。
- ・子どもが困ったり失敗したりしながら友達同士で学び合う姿を大切にする。

などの保育者の見取りや援助の姿勢について、共有されていた。第Ⅱ章で報告された神功幼稚園・神功保育園の「教え込もうとせずに子どもの気付きを大切にする」という姿勢や、第Ⅲ章で報告された帯解幼稚園・帯解保育園の「『あまり～しすぎないように』という共通認識」等が当てはまる。つまり、「子どもの姿を見取る」ことでの共通理解が行われていた。

②子どもの遊びを教育的意思決定のもとに見守り、援助する

保育者同士の協働が進むにつれて、子どもの思いや学びを見取ったうえで、

- ・どのタイミングでどのような援助を行うことがより適切なのか。
- ・困っていることを助ける援助ではなく、子どもが工夫したり解決したりするよう促すためにはどのような援助をすればよいか。

などの観点から、幼保の保育者がともに子どもの遊びを捉えるように変化してきた。このことは、保育者が互いに自分の見取りを伝え合い、自らの教育的意思決定を意識し、保育者間で共有しながら保

育に臨むようになったためと考えられる。

また、協働の基本として、何を経験させ、どのようなことを育てていきたいかというねらいを、事前に保育者間で話し合い、保育後に振り返り、共通理解を図ることの積み重ねが大切であった。

3. 実践デザインや研修の企画・運営に関する保育者の資質の向上

幼稚園や保育園が自ら幼保合同保育や研修を企画・運営していく力量を育んでいくことは、昨年度からの課題であった。本年度は、重点課題の一つに掲げて取り組み、次の点で成果がみられた。

①教育的意思決定を意識し、考え続けることによる保育実践の変容

②幼保合同保育をつくりだすためのプロセスの理解とその試み

③主体的な研修会の企画・運営の実施

①教育的意思決定を意識し、考え続けることによる保育実践の変容

教育的意思決定は、保育の場面だけでなく、指導案作成の時点から始まる。子どもをどのように捉え、子ども自ら遊びをつくるために必要な環境構成や援助、言葉がけはどうあるべきかなど、子どもの遊びが始まる前から必要であることが確認できた。また、カンファレンスにおいても、具体的な場面の中でどのような教育的意思決定がされたのか振り返ることで、次の保育へつながる話し合いを行うことができた。つまり、全ての場面（指導案作成－保育実践－カンファレンス）において教育的意思決定は必要であり、このことを意識することで研究部員の保育力の向上が図られた。

また、研究部員や参加者が参加したことで、研究協力園の保育を見直す視点が提供され、話し合いが活発化し、新たな学びが共有されるなど、公開保育やカンファレンスを行うことの利点が示された。特に研究部員は継続的にそれぞれの研究に携わり、カンファレンスで意見を述べる機会も多いため、自分の保育の見方を確認したり、保育実践者へどのようにアドバイスすればよいかを考えたりするなど、公開保育で役割を担うことを通して、保育指導者としての資質向上に寄与したと考えられる。

②幼保合同保育をつくりだすためのプロセスの理解とその試み

幼保合同保育を幼稚園・保育園自らが主体となって計画することが難しかった大きな要因は、そのつくり上げていく過程や方法が分からなかったことにある。本研究では、研究協力園の実践に研究協力園以外の園の研究部員が計画段階から参画することで、その課題の克服が行われた。近隣園に勤務する研究部員3名（大宮幼稚園・大宮保育園・三笠保育園）は、自らが学んだことを生かし、三園交流会を実施し、幼保合同保育への第一歩が始まった。（資料：1参照）

③主体的な研修会の企画・運営の実施

各園で主体的な研修を企画・運営していくためには、そのプロセスを理解する必要がある。研究部員が公開保育の全体にかかわったことで、その力量が向上したことは言うまでもない。加えて、今回教育的意思決定に焦点をあてた取組を行ってきたことで、研究部員が自らの園の公開保育や研修会でも、同様な視点で保育を振り返り、研修を深めることができるようになった。このことは、研究部員をキーパーソンにすることで、本市の幼児教育の改善・充実を図ることにつながるだろう（資料：2参照）。また、カンファレンスの進め方・焦点化を研究部員もともに行ってきたことで、教育的意思決定を行うよりよいタイミングにも気付くことになった。

4. 教育的意思決定に焦点をあてて

教育的意思決定に焦点をあてて研究を進めてきたことにより、保育者の協働の質がより深まり、幼児教育の改善・充実が図られたと考えている。

「教育的意思決定」については、

- ・子どもの遊びに自律性があるか
- ・子どもなりに遊びを通してどのような問題解決に臨んでいるか
- ・遊びの中にどのような「学び」の要素があるか

という3観点に基づいて行うよう努めてきた。しかし、実際の保育の場面では、保育者が教育的意思決定に悩む場面や、保育者間の教育的意思決定のズレに気付く場面も見られた。しかし、保育者の資質が向上したからこそ、教育的意思決定の違いに気付いて揺らぎながらも、子どもの学びを保障するために、より望ましい教育的意思決定について考え、幼保の保育者がともに対応していった事例も見られた。それは、保育者が子どもへの援助を、常に「教育的」な視点で考え、保育者間で共有できるようになった証ともいえるだろう。

また、保育者の教育的意思決定に焦点化したことにより、

①なぜこの環境を用意するのか。

②この遊びの場面ではどのような援助や環境の構成が必要なのか。

③どのような援助を、どのタイミングで行うことが望ましいのか。

等の視点が鮮明になった。そのため、幼保の保育者がともに、幼保合同保育だけでなく普段の保育も振り返るようになり、教育的意思決定について普段から意識づけることにつながった。

(幼稚園教員にとっての学び)

幼稚園教員にとっては、幼保合同保育を通して、保育所保育士と環境構成や援助の仕方などについて話し合うことで、保育士が「養護」の観点から、これまでの子どもの育ちや生活全体を支え、一人一人を丁寧に見取っていることに気付いた。また、保育所で幼保合同保育を行う際、0歳～2歳までの子どもたちの遊ぶ場でもあることを考慮したうえでの環境構成が必要であることを知った。一人一人の子どもの育ちや生活を踏まえ、丁寧に保育することについて、改めて考えさせられた。

また、小規模園においては教員同士の学び合いの機会がなかなか取れなかったが、幼保合同保育を保育所保育士とともに計画し、カンファレンスを行うことで、多様な視点や意見を出し合うことができ、幼児期の教育についての学びを深めることができた。

(保育所保育士にとっての学び)

子ども自ら遊びをつくりだす保育について悩んできた保育所保育士にとって、幼稚園教員とともに行う幼保合同保育は、「遊び」に対する考え方の転機になったといえるだろう。子どもは環境の中で遊び、さらに自ら環境や遊びを作り出す力もある。子どもが作り出した環境や遊びをどのようにカリキュラムに取り入れて発展させるのか、そのために保育者はどのような援助や言葉がけを、どのタイミングで行うことが望ましいのか、ということを学んだ。また、いつもより見守る姿勢をとることで、子どもが遊びの中で何を学んでいるのかに気付き、「子ども自ら遊びをつくる」保育の在り方について学ぶことができた。

(今後の課題)

本市では、平成 22 年度に「保育実践力を高め、就学前教育の充実をめざした研修の在り方」を研究主題とし、翌 23 年度は「子どもの遊び・行動の見取りと評価」、本年度は「子ども自ら遊びをつくる幼保合同保育の実践開発 ―保育者の協働と教育的意思決定に焦点をあてて―」と調査研究を行ってきた。この 3 年間で積み重ねてきた幼保連携の取組の成果を、今度は小学校につなげていくことが大きな課題である。幼保合同保育を通して深まってきた子どもに対する見取りや評価の在り方、保育における教育的意思決定の大切さがどのように小学校教育へつながっていくのか。また、子どもの育ちが小学校の授業の中でどのように生かされているのか。幼児教育の充実を、子どもの発達に沿って連続し発展させていくためにも、幼児教育と小学校教育が途切れることなく結び付かなければならない。

今後の課題として、3 点があげられる。

①幼稚園教員、保育所保育士、小学校教員の研修の在り方の改善

②幼小の違いを克服できる幼保小接続の在り方の研究

③接続期のカリキュラムの開発

①幼稚園教員、保育所保育士、小学校教員の研修の在り方の改善

小学校教員が保育参観を行う、という形の研修は従来から行われている。しかし、保育案を作成する段階から保育カンファレンスまで、保育者とともに経験し、研修を行うことはされなかった。本市の過去の調査研究で培ってきた研修方法を小学校教員にまで広げ、小学校教員と保育者が協働して研修を行っていくことは新しい試みであり、より強い幼保小連携の取組を行っていく上で有効であると考えている。このことは、逆に小学校の授業についても同様である。授業計画段階から授業後の考察まで保育者が参加することで研修が深まり、保育者と小学校教員互いの資質の向上につながると考える。

②幼小の違いを克服できる幼保小接続の在り方の研究

幼小の合同保育・授業（連携・交流）は幼稚園や保育所を舞台にして、或いは小学校を舞台にして行われている。しかし、その保育・授業については、協働で練り上げていったものではない。平成 22 年度・23 年度と年間カリキュラムの作成段階から幼稚園教員と保育士が協働して幼保合同保育に向けた取組を行ってきたことで、保育観を共有し、より質の高い保育を行うことができた。この取組を小学校にも波及させ、幼小の違いを克服できる幼保小接続の在り方の研究を行うことで、接続期の保育・授業のより良いモデルを開発していくことができるだろう。

③接続期のカリキュラムの開発

本市では、平成 19 年度に奈良教育大学が幼保 GP として採択された「幼保統合の『保育実践知』教育プログラム」と連携し、「奈良市立幼稚園・保育園・認定こども園 教育・保育カリキュラム（参考資料）」を作成した。本カリキュラムは、0 歳児から 5 歳児までの教育課程・保育課程の基盤として作成された。本カリキュラムを見直し、特に接続期におけるカリキュラムを幼保小の保育者と教員が協働して作成することで、本市の幼児教育と小学校教育をつなぐ指標として提示したい。

今後も幼児教育の改善と充実を図るとともに、幼保の違いを克服して幼児期の教育として捉え、公開合同保育やカンファレンスを通してつないで双方の資質を高めてきた成果を生かして、就学前教育と小学校教育とをつなげていくことができるよう、努めていきたい。

おわりに

国の動向としての「子ども子育て支援新制度」のねらいは、すべての子どもの育ちが等しく確実に保障されることです。親の経済状況や就業状況の多様さ、幼少期の生育環境の多様さが際立つ今日の現状は、幼少期の教育・保育のさらなる充実・向上を図ることが急務です。

奈良市では、そのようなねらいをもって、平成21年度から平成23年度にかけて、幼保の共通カリキュラムの作成をはじめとして、保育者の研修の在り方の検討や子どもの見取りと評価に焦点を当てた保育者の資質向上に取り組んできました。今年度は、幼稚園教員と保育所保育士の教育的な判断の共有に少なからず課題があることを踏まえて、幼稚園教員と保育所保育士の「協働」と「教育的意思決定」に焦点をあて、子ども自ら遊びをつくる幼保合同保育の実践開発に取り組みました。

ここにその成果報告をすることができた一連のプロセスは、まさに「協働」のプロセスであったように思います。「協働」は相手の考えを受け止め、共に考える、そして行動し、振り返るというプロセスです。3組の研究協力園での実践では、幼稚園教員と保育士が互いの時間をやり繰りしながら、どうにかして相互理解しようということからスタートしていました。その中では、養護と教育という保育のねらいに対する考え方や実際の保育内容の相違点を見つけるだけにとどまらず、子どもが自ら環境にかかわる前提として「情緒が安定していること」が挙げられるのだという養護と教育の一体化への気づきも共通理解できていったのではないのでしょうか。

また、「教育的意思決定」という課題は、すでに保育の中で無意識的に実践してきていることではあっても、幼稚園と保育所では意思決定の場面の「教育的」要素の相違点があるはずですから、共に考え進めていくにはそれを意識化する努力を積み重ねなければなりません。保育者の教育的意思決定の揺れがあったことを次の保育に向けての糧としていった保育は、保育者と同じように、子ども達の揺れ・悩み・考え、そして自己決定を引き出す実践となりました。教育的意思決定を意識化することは、保育者の協働がなければできないことであり、それが子どもの自律的な協働のモデルにもなったのです。遊びたいと思いながら遊べない子どもや、遊んでいるのに楽しそうでない子どもの心を理解したりしながら、寄り添う・うなずく・一緒にあそぶ・言葉をかける等の援助のタイミングに迷いつつも保育者の教育的意思決定がなされていきました。本来子ども自ら遊ぶモチベーションは内発的なものですが、幼児期では、場面に適応した保育者の援助内容が外発的なものであっても、どうしたらもっと面白くなるかに関して子どもの考えや思いを引き出すことになればいいのではないのでしょうか。

また、平成21年度からの継続的な保育者の取り組みがあったからこそ、保育研究会やカンファレンスの公開が常態化する環境整備ができ、奈良市全体に保育力の向上への意識が拡がりました。公開保育で出会った、あきらめないでがんばる子どもの姿とだぶります。幼稚園と保育所の保育者間の協働は、園所内の協働がなければ成り立ちません。これが保護者との協働、保護者同士の協働に結びついていけたらいいのにと欲張らざるを得ません。

今後は、これまでの成果を生かし、より多くの保育者が、小学校・保護者・行政・地域の社会的資源と協働して、幼少期の教育・保育のさらなる充実・向上を図り、すべての子どもの育ちが等しく確実に保障されるよう願ってやみません。微力ながらこの研究に関わらせていただきましたことに感謝申し上げておわりの言葉といたします。ありがとうございました。

平成25年3月

奈良市幼児教育推進委員会

副委員長 岡澤哲子(帝塚山大学)

資料編

資料1：合同保育をつくりだすためのプロセスの理解とその試み

研究部員による自園での幼保合同保育実践

○ 三園交流会（大宮保育園・三笠保育園・大宮幼稚園）6月18日（月） 場所：大宮幼稚園

- （ねらい）
- ・ 自分の好きな遊びを見つけ、他園の子どもと一緒に遊ぶ。
 - ・ リズム遊びやゲーム遊びを通してふれあいを楽しむ。

（活動内容）

- ・ **好きな遊びをする。**
（固定遊具や砂場遊び、色水遊び、飼育動物の世話、音楽に合わせて踊ったり楽器をならしたりする。）
- ・ 自己紹介（3名ずつ）をする。
- ・ 「貨物列車」「たんじょう月なかま」をして遊ぶ。



☆ 6月18日（月）指導案 場所：大宮幼稚園

ね ら い	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分のしたい遊びを見つけ、他園の子どもと一緒に遊ぼうとする。 ○ たくさんの子どもとふれ合っ て遊ぶことを楽しむ。 	内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分のしたい遊びをする。 ・ いろいろな遊具や用具を使って遊ぶ。 ・ 同じ遊びをする子どもと話をしたり、共に楽しさを感じたりする。 ・ 相手のことを知ろうとする。 ・ 大勢の子どもとリズム遊びやゲーム遊びをしてふれ合う。
時間	○ 予想される子どもの活動		☆ 環境構成 ◎ 教師の援助
9:30	<ul style="list-style-type: none"> ○ 園庭でしたい遊びを見つけて遊ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> 固定遊具、アスレチックごっこ、砂場遊び、色水遊び、シャボン玉、音楽に合わせて動く 	<ul style="list-style-type: none"> ☆ したい遊びに進んで取組めるように遊びの場を広く取り、十分に用具や材料を準備し必要に応じて増やす。 ◎ 幼稚園児には遊び方や用具の使い方などを保育園児に伝えられるように声がけておく。 ◎ 遊びを見つけられない子や戸惑っている子には進んで遊びに誘ったり、一緒に遊んで楽しさを共有したりする。3園1人ずつで3人のグループになれるように手助けする。 ☆ 一人一人が伸び伸びと動ける場を確保し、和やかな雰囲気の中で進める。 ◎ 保育者も遊びながら遊びが進むように声がけをしたり、楽しさを言葉や表情で伝えたりする。
10:15	<ul style="list-style-type: none"> ○ 挨拶や自己紹介をする。 ○ 体操やリズム遊びする。 ・ 元気体操 ・ 貨物列車 ・ 誕生月なかま 		◎ 保育者も遊びながら遊びが進むように声がけをしたり、楽しさを言葉や表情で伝えたりする。
10:45	○ 保育園児を見送る。		◎ 次回に期待をもたせて見送る。

（子どもの姿と評価）

今年初めての交流で、幼稚園の遊びに保育園児が参加する。保育園児は自ら進んでしたい遊びを見つけ、遊びに必要な用具を使って遊び出す。幼稚園児とは同じ場で遊ぶ平行遊び的であったが、ダンスでは振りをまねながら遊んでいた。幼稚園児数30名、保育園児60名で幼稚園児が最初圧倒された雰囲気であった。「貨物列車」と「たんじょう月なかま」は事前に保育者同士で方法を共有していたので、全員で楽しむことができた。

○ 三園交流会（大宮保育園・三笠保育園・大宮幼稚園）11月8日（木） 場所：大宮幼稚園

- （ねらい） ・ 関心をもちながら幼稚園の作品展をみる。
 ・ 三園合同でリレーを楽しむ。

（活動内容）

- ・ 保育園児が作品展をみる。
- ・ 3園合同リレーをする。



三園がそれぞれ3チーム（青、赤、黄）に分かれる。

前半と後半に分かれ、リレーをしたり、応援をしたりする。青、赤、黄の順番に応援合戦をする。

☆ 11月8日（木）指導案 場所：大宮幼稚園

ねらい	○ 関心をもちながら幼稚園の作品展をみる。 ○ たくさんの人数でリレーを楽しむ。	内容	・ 作品に関心を持ち、自分の感じたことや考えたことをまわりの人に伝える。 ・ リレーのチームが分かり自分の力を出そうとしたり、応援したりする。
時間	○ 予想される子どもの活動	☆ 環境構成	◎ 教師の援助
9:30	○三笠・大宮保育園児が大宮幼稚園の作品展をみる。	◎	◎作品展をみて子どもの感じたことや思いを受け止め、共感する。
10:15	○三園でリレーをする。 ・ 三園の子どもが赤（カラー帽子）、黄（白帽子）、青（帽子をかぶらない）3チームに分かれる。 ・ 「フリーフレ○○チーム、フレフレ…」のかけ声に合わせて応援の動きを考える。 ・ 応援合戦の後、リレーをする。	☆	☆リレーに必要なものを準備しておく。(カラーコーン、ライン引き、ゴールテープ、リング) ◎3チームがそれぞれ前半後半に分かれ、リレーをしたり、応援したりする。 ◎子どもからの発想や工夫している姿を受止め、応援の型を決める。 ◎各チームに保育者が付いて、子どもと一緒に応援する。

（子どもの姿と評価）

人数確認、並ぶなどの援助を保育者がする。スタートの合図を出し走り始めたが、うまくバトンがつかず、後半で走るメンバーの関心も薄かったため、チーム意識をもたせるために、打ち合せになかった応援合戦をした。「フレ～フレ～○○チーム、フレフレ○○」という保育者のかけ声に合わせて体を動かすことに興味をもち、応援が盛り上がる。幼稚園保育者の援助をみて、保育園保育者が各チームで同じ援助をする。走っている自分のチームを応援したり、勝ったときは走った子も応援している子も共に喜びを声や動きで表現したりしていた。子ども達の姿を見とり、瞬時に方法や援助を共有することができた。

○ 三園交流会（大宮保育園・三笠保育園・大宮幼稚園）1月17日（木） 園外保育（興福寺）

- （ねらい） ・ 世界遺産を身近に感じる。 ・ 三園の友達と一緒に歩いたり、遊んだりして親しみを感じる。

（活動内容）

- ・ 三笠保育園に集合し、子どもたちが手をつないで歩く。五重の塔を見たり、写真を撮ったりする。

（子どもの姿と評価）

保育園児は何度も訪れているので、鹿にも慣れているが、幼稚園児は鹿に囲まれて怯える姿が多く見られた。計画していたマツボックリは落ちていなく一緒に歩いて終わっただけであった。

3園（大宮幼・大宮保・三笠保）の研究部員が、合同保育実践研究に参加したことで、自園でも交流ができないかと話し合われて実施できた。幼稚園、保育所での指導計画を途中で変更することになったが、合同保育の実践研究に参加されたことがきっかけとなり、「やってみよう」「子どもの姿が変わるかも」「同じ小学校へ行く子どもたちをつなげよう」という思いが重なり、保育内容の質を高める実践ができた。

まだ交流活動であるが、この活動を進めるために、保育者間での話し合いをもつことから始まったので、先進的な合同保育の実践報告を参考に進めていこうという保育者の意欲が見られるようになった。

資料2：主体的な研修会の企画・運営の実施

研究部員による自園での園内公開保育カンファレンス実施

※園内公開保育 6月25日（月） 場所：伏見保稚園 対象児：3歳児

（ねらい）○自分の感じたザリガニをのびのび描くことを楽しむ。

（活動内容） ・サークルタイムに参加する。 ・ザリガニの絵本を見る。 ・ザリガニを描く。

☆ 6月25日（月）日案 うさぎ組3歳

ねらい	自分の感じたザリガニをのびのび描くことを楽しむ。		
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・タンポ、絵具を使ってザリガニを描く。 ・友だちと一緒に1つのものを作る。 		
時間	予想される幼児の活動	環境構成	保育者の援助と留意点
9:50 10:10	<ul style="list-style-type: none"> ○サークルタイムをする。 <ul style="list-style-type: none"> ・朝のうた ・季節のうた等 ・今日の活動について確認する。 自分の椅子を机になおす。 ○ザリガニの絵本をみる。 <ul style="list-style-type: none"> ・見やすい位置に座る。 ・探検隊で行った、ザリガニとりのことを思い出す。 ・石に隠れた様子、逃げる姿を言ったりする。 ○探検隊になりうさぎ組の小川までやってくる。 ○ザリガニを小川の上に描く。 <ul style="list-style-type: none"> ・タンポに絵具をつけ、ザリガニを思い出しながら描く。 ・ザリガニの動きを言いながら描く ・描いたものを嬉しそうに見せる。 ・どのように描いていいかわからない子もいるが友達のを見て同じように描こうとする。 ○みんなで描いた小川のザリガニをみんなで見てみる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・部屋を広くする。 ・絵本「ぼくはざりがに」 ・ザリガニがいた溝の写真を用意する。 ・広げた新聞紙の上に、みんなで作った小川に見立てた大きな紙を広げる。 ・絵具とタンポを用意し子どもたちの間に置く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しい雰囲気の中で歌をうたったり、友だちを意識できるような声がけをする。 ・椅子の持ち方など安全に気をつけるよう見守ったり、声がけしたりする。 ・子どもたちから出るザリガニとりの時の様子を取りあげながら、イメージが膨らむように声がけする。 ・ザリガニとりに行った事を身体でイメージできるように歩いたり、見たことを思い出せたりするように声がけする。 ・形にとらわれず一人一人の描いたものを認め、描く喜びがもてるようにする。 ・友だちの描く様子を一緒に見たり、一緒に描いたりするようにし、楽しんで描ける雰囲気を作る。 ・みんなで作った小川を見て、喜びと満足感がもてるようにし、次回の探検ごっこを期待できるように声がけする。

11:10	○手洗いする。		<ul style="list-style-type: none"> ・汚れた手足を洗ったり拭いたりする事を援助する。
11:25	○給食の準備をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・絵具・タンポをバケツに片付ける。 ・作品のまわりに立ってみる。 ・水道で手を洗う。 ・足拭き雑巾を用意する。 	

園内公開保育カンファレンスについて

【実施内容】

- * 事前に園内公開保育にするにあたって、
ポイント ①複数担任のためのリーダー・サブリーダー・その他の保育士のあり方について
 ②指導案を見ながら年齢の発達にふさわしいねらい・目的であったかについて
 ③主体性を育てるためにも語り合い、関わり合いをしていたかについて
 を見るように確認の上、各年齢から参加する。

- * 公開保育後、午後から（園児が午睡時に）カンファレンスを行う。
 ①公開保育をした年齢の“発達の主な特徴や大切にしたいこと”の参考文章をみんなで読む。
 ②意見交流。
 各年齢の担任から、自分のクラスを振り返りながら意見交流をする。
 お互いの悩みも出し合い考えていけるよう意見交流を見守るような態勢をとる。

- ※ ねらいにどこまで達成できているのかを確認し（認めていき）次への課題は何になるのかを一緒に考えていけるようにしている。
- ※ 複数担任なので、リーダー・サブとの連携が十分できていたか。主体性を育てるために子どもの言葉や行動に対して、どのタイミングでどんな言葉かけが大切だったのかを考えていけるように話し合いを深める。
- ※ 話し合いに職員全員参加できないので、その時の意見交流を職員全体に報告・伝達をしていけるように話をする。

- * 課題として、職員間の意見交流ができる時間的な問題もあり、共通理解することが難しい時もある。

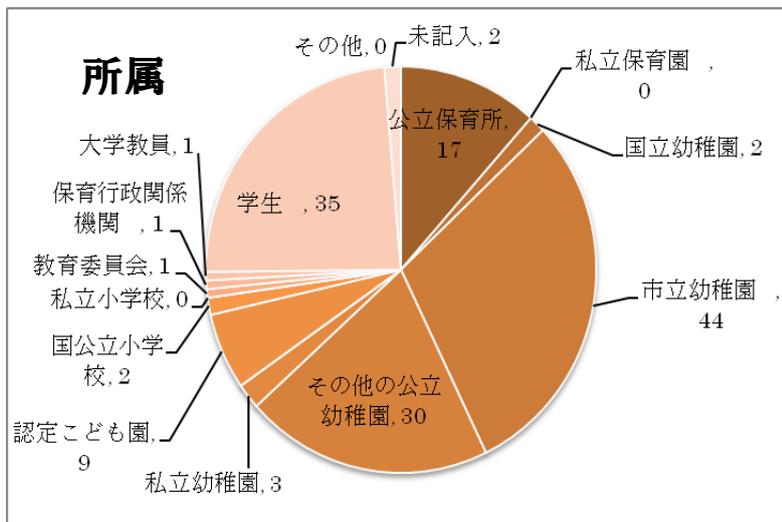
研究部員である副園長が園内公開保育の研修実践を組み立てて、職員全体での意見交流をしながら、保育の質を高めるようなきっかけをつくることができている。保育所では、子どもの午睡時間を利用しての研修をとることがあるが、職員全員参加はできないため、共通理解できるようにそのようにすればいいのか検討されている。たとえば、「全体学習会（夜）やカリキュラム会議（昼）などの場で、保育の中で気付いたこと、困ったことなど出し合いみんなで考える場をもてるようにし、ひとつの事案についてより深く考える場になるようにする。」という他の研究部員からのコメントをヒントに実践する姿勢が見られるようになってきた。

演題「幼児期から児童期への主体的な学びにつながる保育・教育とは」

講演会参加者アンケートより（参加者239名 内 アンケート提出 147名）

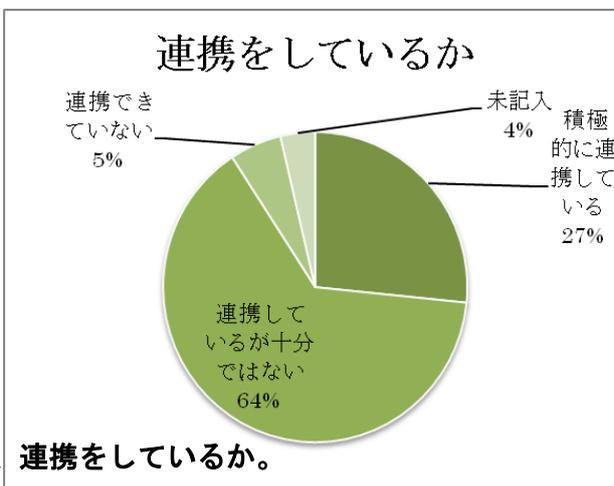
1. 所属について

1) 公立保育所	17
2) 私立保育園	0
3) 国立幼稚園	2
4) 奈良市立幼稚園	44
5) その他の公立幼稚園	30
6) 私立幼稚園	3
7) 認定こども園	9
8) 国公立小学校	2
9) 私立小学校	0
10) 教育委員会	1
11) 保育行政関係機関	1
12) 大学教員	1
13) 学生	35
14) その他 未記入	2



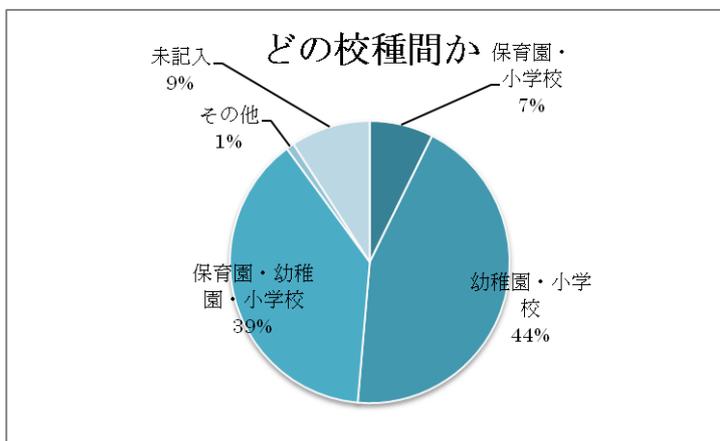
2. 幼稚園・保育園と小学校や中学校等との間では、連携をしているか。

1) 積極的に連携している	29
2) 連携しているが十分ではない	70
3) 連携できていない	6
4) 未記入	4



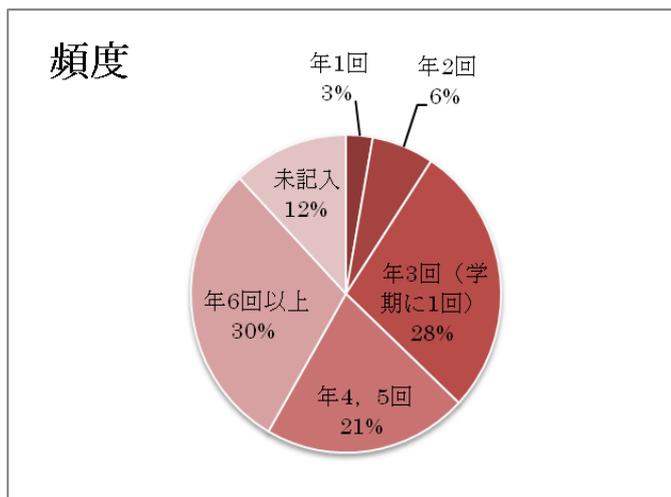
どの校種間の連携を行っているか。

1) 保育園・小学校	8
2) 幼稚園・小学校	48
3) 保育園・幼稚園・小学校	42
4) その他	1
5) 未記入	10



3. 保育園・幼稚園と小学校との交流活動(行事・日常)をどのくらいの頻度の実施か。

1) 年1回	3
2) 年2回	7
3) 年3回(学期に1回)	30
4) 年4、5回	23
5) 年6回以上	32
6) 未記入	13



4. 研究報告の感想

【公立保育所】

- ・子どものために、幼・保から小へ楽しく学習に向かえるようにどうしていくか。ヒントをたくさんいただいて、保育に対してより前向きに考えていこうと思った。
- ・幼保合同保育では、何度も話し合いを繰り返し、3日間することの意味がよくわかり、より一層合同保育の大切さを知った。
- ・幼児教育保育の目指すねらいは、同じ視点で捉え、遊びの姿から一人一人の援助と関わりの具体的な報告を通して、保育を見直し、次につなげる捉え方を気付けるきっかけになった。
- ・率直な感想、アドバイスで、自分の自園の保育と照らし合わせながら、学ばせてもらった。
- ・実際に交流するとなると、どうしたらいいのか、内容を充実させる難しさがあると思う。

【国立幼稚園】

- ・発表・提案・対談と、それぞれに多くの学びを得ることができ、最後にはどれもがつながり、自分の中で関連付けながら学びを深めることができた。

【市立幼稚園】

- ・連携する園との話し合いで必要な内容がわかりやすかった。各地域ならではの交流の方法を考え、より広く理解し、子どもの姿を見取れる機会を考えていきたい。
- ・子どもを通して学ぶこと。違うから学び合えるのだと学んだ。
- ・就学前教育を担うことを意識して、協働して力を培っていくことが大事だということを感じた。
- ・幼保合同保育では、先生方が互いの子どもの姿や思いをととてもよく話し合われて、取り組まれたことが良く伝わった。まず話をすることが大切であると気付いた。
- ・幼一保一小の違いを知り、保育を進めていく難しさや大切さを感じた。
- ・普段、目や口にしている「環境」や「主体性」という言葉を改めて、考えさせられた。
- ・3日間を通しての交流することで、より一層深め、広めるなど、園児だけでなく教師、保育士との関係も深まっていくことを学んだ。
- ・「準備するものがない中で、子どもたちがどのように遊び込んでいくか」という言葉を聞いて、そのような機会をとりたと思った。準備する時間や話し合う時間の確保が難しいという課題をうまく確保して参考になった。
- ・小学校との連携や小学校教育の接続のためにも、横のつながり(保・幼)の大切さを改めて実感した。互い

の違いを理解したうえでいかしていくことが、子どもを育てていくうえで、保幼の連携の上で重要になるのだと思った。

- ・私自身も実践を通して幼保と意思疎通する難しさを実感した。しかし、互いが歩み寄ることにより、どのように環境をつくっていくか、援助していくかなど、話し合いをもつ大切さを知った。子どもたちが遊びを充実し、自ら考えて動けるよう援助していきたいと思う。
- ・幼保が子どもの姿を通して、互いに理解を深める取組であったと思う。

【その他の公立幼稚園】

- ・とても参考になった。「違うから学び合える」という言葉、印象的だった。
- ・保幼の先生方が、同じ思いで共に考え計画を立てて指導案をつくり、主体的に子どもたちが遊びにのめり込むようにするための取組が大変参考になった。一日だけでなく3日連続した保育が子ども同士、保育者同士のつながりになり、こういった研究は大事だと思った。
- ・幼保合同保育実践から、保育の質の向上や教師保育士の資質の向上が望まれていること、また就学前教育の一貫性？違いを知ることから始めるということを学んだ。
- ・自園でも三保幼交流で年3回打ち合わせをし、ねらいをもって交流している。3日間の連続の交流を聞き、自園でも取り組んでみたいと思った。カリキュラムの打ち合わせの時間は課題である。
- ・計画し関わる中で子どもの育ちを育む環境や援助の在り方を学ばれていたのがよかった。
- ・幼保小の連携の必要性、そして連携を進めるにあたっての工夫や課題などがわかりやすかった。

【私立幼稚園】

- ・こうしたいと思うだけでなく、一步を踏む勇気がでた。

【認定こども園】

- ・幼保小の連携をすることで、子どものよりよい育ちを援助できるのだと思った。
- ・子どもがどのように育ってきたのか。どのように育っていくのか。遊びから学びへのつながりをよく理解することが大事であり、保育の質、連携の質を高めることが、重要であることがわかった。
- ・保育の質を高める「違うから学び合える」「ありのままでいい」という言葉が印象に残った。夢中に子どもたちが遊べる環境をもう一度見直しながら取り組みたいと思う。

【学生】

- ・幼保の横のつながりも、幼小や保小の縦のつながり両方が大切だと感じた。
- ・幼保合同保育でも、保幼小連携でも、子ども、幼稚園教員、保育士、小学校教員それぞれにそれぞれのメリットがあることがわかった。「子どもを通しての学び」がとても大切であると思う。
- ・幼保合同保育の内容に興味をもてた。
- ・幼保の連携の難しさを知るきっかけになりました。子ども同士の関わり方、遊んでいる姿を通して、保育者の動きを変えていっているのが印象的でした。
- ・遊びの姿や、子ども同士の関わりがよく伝わってくる内容だったので、子どもが夢中になって遊び込むことが学び込むにつながるということを意識して保育したい。
- ・幼保合同保育について、実際の内容を聞くことで、具体的に内容を知ることができた。
- ・来年幼稚園教諭として保育をするため、子どもが生き生きと過ごすことができ、保育の質の向上を目指して働いていきたいと改めて考えさせられた。
- ・様々な実践例や体験を交えながらの話で、興味深く聞いた。子どもの興味を引き出す取組をできるようにしたい。

- ・保育者間の連携が一番大切なこと、遊び込めるような環境づくりをすることが必要だと思った。

【国公立小学校】

- ・他の学校園の実践を知ることで、自分の学校と比較することができ、振り返ることができた。よいところ、足りないところが具体的に見つけられたと思う。
- ・省察しながら、いい実践を積まれていると思った。

【他市教育委員会事務局指導主事】

- ・幼小連携接続するにあたり、保育の質を向上すること、そのために子どもの内面理解をしていくこと。子どもの活動から、心のありようをつかみながら、どんな遊びをしているのかをしっかりと見取っていくことが大事であることを改めて確認した。

【大学教員】

- ・先進的な熱心な取り組みだと感じた。なにがつながる保育の姿であるのか。もう少し具体的に知ることができればより多くの学びにつながったのではないかと思う。

【その他】

- ・年数を重ねて実施していく中で、また何回も研究会やカンファレンスを重ねること、このプロセスがとても大切であると思う。

5. 対談の感想や今後聞いてみたい講演内容について

【公立保育所】

- ・幼児期の学びを具体的な記録に残して、小学校へ伝えることの大切さ、学び込む子どもを育てる大切さを確認できた。
- ・子どもが学びたくなるように遊び込む楽しさを伝えることが大切だと考えることができた。
- ・子どもの遊びとそこから広がる学びの発信のポイントをいろいろな事例や具体的な話を通して、興味をもって聞くことができた。また幼保小の連携をもっと見直し、次に進めたい思いが強くなった。
- ・「対談」という形であったことで、いろいろな視点から理解を深めていくことができた。幼児教育について、しっかりと“アピール”することが大事だと伺ったので、そのための研修を期待する。
- ・楽しく学べた。保育の質を高めるために頑張りたい。
- ・子どもを通して信頼し合いされている保育、授業が良くわかり、大変な中でも未来の子どもの姿を感じることができた。

【国立幼稚園】

- ・具体的、理論的でとてもわかりやすく、明日からも何か小さなことでも、身近なことから実践しよう、頑張っていこうと思える対談の内容だった。

【市立幼稚園】

- ・遊び込める子ども育てておくことが、学び込めるにつながるという話を聞いて、幼児期にしっかりと遊びこむことの大切さを感じた。
- ・つながる視点が実際の保育の姿から学ぶことができた。互いにすり合わせるとこの大変さ、ありのままを大事にするということ、すべての子どもの姿を通してということを確認した。
- ・楽しい保育を展開していくことが大事だということを実感した。連携するためにも、まずは、自園の保育内容・遊びを充実させ、そして、記録を取って、小学校や周りへ伝えていくこと、発信していくことの大切さを感じた。

- ・幼小接続の大切さの中で、遊びこみが学びにつながる。科学的思考などについてとてもわかりやすく具体的な保育現場でのことを照らし合わせて学ぶことができた。
- ・生き生きと活動できる保育が大切なことを感じた。自分の保育を見直し、生き生きと遊び込める保育をめざしていきたい。
- ・幼小連携について、今後小学校の先生と協力し、子どもの健やかな発達、円滑な就学のため手を取り合っていかなければと強く思った。
- ・「遊ぶ」と『遊び込む』の違いがよくわかり、保育を進めていくうえで、常に意識して環境構成などしていきたい。難しく考えずに生き生きとした活動をつくるのが大切という言葉が印象に残った。
- ・小学校の先生に具体的に伝えることで理解してもらうことが重要だということがわかったが、そのためにもっと小学校の先生と交流する時間が必要だと思った。幼稚園に来てもらえるような魅力ある環境をつくっていききたいと思う。
- ・普段している保育を振り返ることができ、遊び込むことの大切さを再確認することができました。
- ・幼児教育の魅力伝える力が必要であること、夢中で遊び込める子どもを育てることが、幼小接続の要であることがわかりました。

【その他の公立幼稚園】

- ・遊び込むことが学びにつながっていくのだと改めて感じることができた。
- ・記録の重要性を感じ、小学校の接続のために園から発信していくのが第一歩であると痛感した。
- ・子ども中心、興味行動（表現）の手順を踏むこと、主体的に学び遊び込むというポイントを学んだ。
- ・改めて幼小の滑らかな接続の大切さや理解の仕方を学ぶことができた。
- ・「自分たちで気付いている姿を大切に、共感する」ことを今後も大切にしていきたいと改めて感じることができた。
- ・子どもたちの学びの質、中身、内容のある保育を人的環境である保育者がしっかりと反省評価しながら、子どもたちと関わっていききたいと思った。
- ・幼小の連携がなかなか進まないのが現状であるが、共に夢中になれる活動から連携が進んでいくことを学んだ。育てたいことを共に明確にしながら連携を考えたい。

【私立幼稚園】

- ・とてもわかりやすく、先生方が心から子どもたちの育ちについて語られる言葉・姿にたくさんのことを気付けた。
- ・連携は、日々子どもたちの遊びを通して、今後につながるがあると思えた。子どもたちを通して学んでいきたい。そして、何かの形でつながっていければと思う。

【認定こども園】

- ・子どもが不思議さを感じたり、考えたり実感したりする大切さを感じた。小学校との連携をもっと積極的にすることで、子どもは楽しみをもって就学できると思った。
- ・幼児がいきいきと遊び込める保育の質、環境の構成を自分自身よく考え、子どもの姿から幼児の思いをしっかりと読み取れるように頑張りたいと思う。
- ・「環境を通して学ぶ」や「主体的な子どもを育てる」とよく聞かすが、どうしたらいいのかよくわからないところもあったが、「遊び込める子どもを育てる」、「子どもの姿を見取っていく」ことから、実践を通してこれからも学んでいきたいと思った。

【学生】

- ・遊びが学びにつながる。遊ぶことが学ぶことへの第一歩なのだとわかりました。子どもたちの遊ぼうとする（学ぼうとする）パワーはすごいと思うし、そのパワーを存分に発揮できるような環境づくりが保育者のすべきことだと思った。
- ・「遊び込む子」と「学び込む子」にするために、幼児期に遊び込める子を育てるとというのがよかった。
- ・夢中になれる活動を考え、魅力やありのままの姿を伝えていくことが大切なのだとわかった。そのため子どもの姿をどう捉え、記録することが必要だとわかった。
- ・遊びと学びは決して切り離されたものではなく、遊びの充実が学びの充実につながるということがよくわかった。遊びが充実している子どもたちは、勉強することを強要しなくても事前に学びを充実させられている事例が印象的だった。
- ・小学校幼稚園それぞれの先生からみた同じ子どもへの感想が全く違うということがとても印象的だった。だからこそ、「両者で」ということの大切さを学べた。
- ・幼小連携を進めるには、小学校の先生に幼稚園の子どもの様子を具体的に知ってもらい、幼稚園の良さを知っていくことが必要だと思った。子どもに遊び込む力がつくことで、学び込む力がつき、幼小の接続がスムーズにいくと思った。

【国公立小学校】

- ・子どもを見る視点、連携と接続を考える上で大事になるものが、具体的な子どもの姿を伴ってわかり始めた。また、交流を行うだけでなくその内容を振り返って、教育課程の中に位置づけ、質を高めるところまでしていけるとよいのだと、先が見えた。
- ・小学校教育の見直しをしなければいけないと痛感した。形式的になっているところを改善していきたいと思った。

【他市教育委員会事務局指導主事】

- ・具体的な子どもの活動を聞き、幼児教育の素晴らしさ、面白さを再確認した。幼稚園で大切にしている視点・育ちを小学校へ伝えていくことと小学校と関係をつくっていく重要性を感じた。また、小学校までに育てておくべきことを整理し、質をあげていくことを意識していきたいと思った。

【大学教員】

- ・楽しく重要なエッセンスのギッと詰まった時間でした。また、鳴門教育大学附属幼稚園の話聞く機会が嬉しい。

【その他】

- ・子ども丸ごと包み込む先生方の言葉一つ一つが宝石のようなあたたかい光を放つもので大変感動した。幼保一元化でこども園化をめざして、幼保の政策を進めようとしていきますが、システムの中で質の担保が最も大切だと考えている。

資料4：「研究集会」

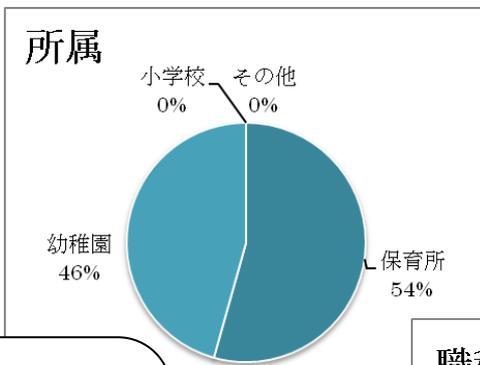
平成25年2月3日（日）13時30分より 於：春日野荘 吉野の間

研究集会 アンケート結果

1. 研究集会参加者の所属、現在の職、経験年数について

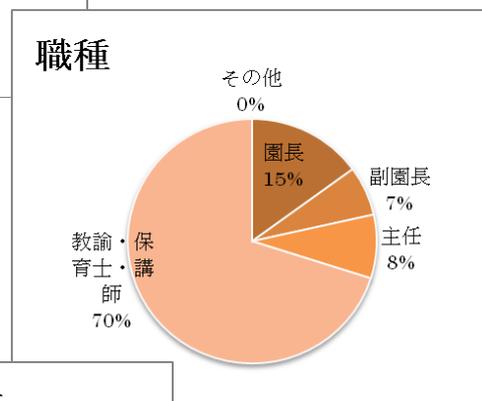
【所属】

①保育所	56
②幼稚園	47
③小学校	0
④その他	0



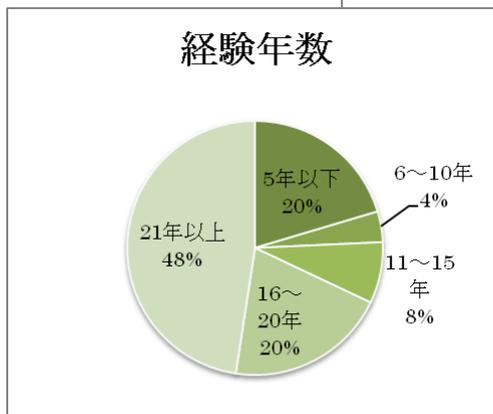
【現在の職】

①園長	16	(11・5)
②副園長	7	(7・0)
③主任	9	(1・8)
④教諭・保育士・講師	75	(37・34)
⑤その他	0	(0・0)



【経験年数】

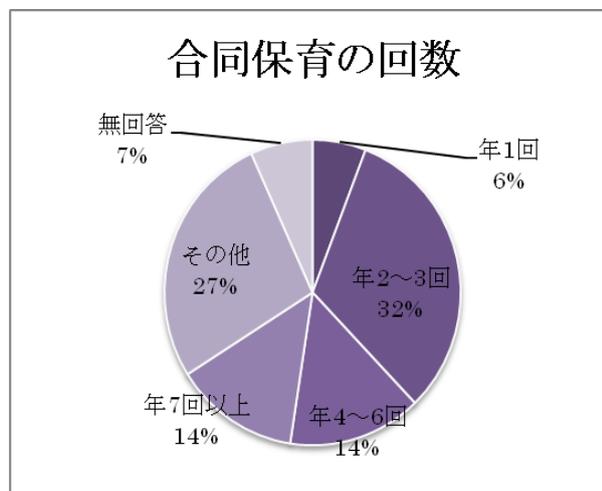
①5年以下	21	(4・17)
②6～10年	4	(2・2)
③11～15年	8	(3・5)
④16～20年	21	(14・7)
⑤21年以上	49	(33・16)



2. 幼保合同保育について

【現在の幼保合同保育の回数（年間）】

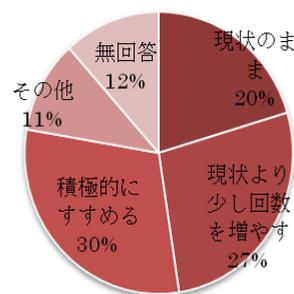
①年1回	6	(1・5)
②年2～3回	33	(21・12)
③年4～6回	15	(12・3)
④年7回以上	14	(10・4)
⑤その他	28	(7・21)
⑥無回答	7	(5・2)



【幼保合同保育を今後どのようにすすめていくか】

①現状のまま	21	(13・8)
②現状より少し回数を増やす	28	(12・16)
③積極的にすすめる	31	(20・11)
④その他	11	(4・7)
⑤無回答	12	(7・5)

今後どのように進めるか



3. 幼保合同保育の取組について気付いたこと

【保育所】

- ・互いの子どもの姿を認め、保育することの難しさ、援助の大切さ（見守る）ことを勉強した。
- ・合同保育に取り組みながら、保育の再確認ができ勉強になった。また子どもの主体性が育った。
- ・幼稚園と保育所の話し合いの時間をつくっていくことの大事さに気付いた。
- ・幼保の子どもの姿を出し合うことで子どものことを知り、一緒に保育していく姿勢や子どもの見取りの知らせ合い、子ども自身が主体的に遊ぶことができるようにしていくことの大切さに気付いた。
- ・子どもと共につくっていく環境構成も必要と気付いた。
- ・同じねらいをもって、指導案をつくるのが大切。今後も公開保育が必要だと思う。
- ・自園でも複数担任で援助や保育内容についての意思統一や連携は大切であること、またさらに合同保育の中では細かい部分まで話し合っていないといけないと感じた。子どもが主体的に考え動ける保育を考えていきたい。
- ・小規模園の保幼連携の仕方と他の規模園の仕方の違いや課題の違いを感じた。イベント的な交流にとどまらず、日々の子どもたちの姿を捉えた保育をすり合わせて繋げていくのが大切だと感じた。
- ・幼稚園と保育所の生活時間の違いを理解してこそ実践できる。
- ・連続しての合同保育が子どもの学びにつながっていくことに気付いた。
- ・幼保互いの保育者の歩み寄りが幼保の壁をなくし、遊びが充実するのではないかと感じた。行事的よりも継続することでの成果は大きくなるのではないかと感じた。

【幼稚園】

- ・保育者が共に子どもたち同士のつながりや生きる力の育成、子どもに身に付けさせたい力を考え、取り組むことが大切ではないかと感じた。
- ・幼児自ら必要性を感じ、見つけ出せる環境・選べる環境の大切さに気付いた。
- ・子どもたちの様子や興味、積み上げてきた経験など、事前に伝え合うことの大切さを感じた。
- ・継続的な取組の大切さやカンファレンスを行う大切さの再確認をした。
- ・保育者間の指導案の作成や環境の構成、援助、反省、見取り等に共通理解を図ることが重要。
- ・視点や焦点を絞り、明確に記録をとることが大切であること。
- ・幼保共に、子どもの姿の見取りから共通理解すること大切さを感じた。
- ・子どもの発達過程が明らかになり、保育者の資質の向上につながった。
- ・指導案作成の段階から、保育者間の教育的意思をもつ必要性。また、子どもの姿に応じて変化できる保育者の力量が関わることに気付いた。

- ・合同保育の回数も必要だと思うが、内容を充実させないといけないのではないかとおもわれるので、無理のない計画で取り組むことができると感じた。
- ・3組の合同保育の取組が様々であることから、自園でどのように取り組んでいこうかと考える上で、参考になった。

4. 幼稚園教員と保育所保育士との協働について、気付いたこと

【保育所】

- ・膨大な時間を費やして行われたカンファレンスには、大変なものだと感じた。
- ・互いの子どもの様子がわかりよかった。小学校への連携にもつながったと思う。
- ・時間帯が違うけれど、話し合いができる関係づくりや時間づくり
- ・一緒に話す時間をもつこと。互いを認め、受け止めることの大切さに気付いた。
- ・互いの考え方、捉え方を理解する。また、歩み寄りながら話し合うことが大切であること。
- ・子どもが何に興味をもっているのか、何を伸ばしていきたいのか、共通に理解して決めることが大切だと気付いた。また保育の振り返りも大事と気付いた。
- ・子ども同士、保育者同士がよく知りあえることの大切さに気付いた。
- ・カンファレンスのもち方と継続の大切さに気付いた。
- ・子どもの姿を通しての語り合うことが協働のすべてだと思った。
- ・同じ視点にたつて子どもを見取り、振り返りを通して積み重ねていくことの大切さに気付いた。
- ・保育者同士は、共通の願いをもって話し合うことが大事気付いた。
- ・保育者間での話し合いを重ねることでの気付きがあり、援助につながることに気付いた。
- ・人をつなぐのではなく、遊びやものを通して、一つの大きな目的に向かっていくことが協働なのかと思った。
- ・交流の回数を増やすことが協働を深めることになると思う。

【幼稚園】

- ・その時期の子どもの発達や、事前事後の話し合いが大切だと気付いた。
- ・相互の指導計画を基本に、新たな指導計画を共通理解し、保育する大切さに気付いた。
- ・共通点、相違点について理解し合えることが必要である。
- ・保育者が互いの子どもや保育者自身を知り合うこと、そして自分を知ることが保育観を見直す機会になることに気付いた。
- ・保育者間で目標や子どもの見方、捉え方などに、同じ教育的意思決定していけるように、合同保育の事前事後の綿密な打ち合わせや話し合いが必要だと気付いた。
- ・本音で話し合う、保育者のつながりが第一歩。
- ・繰り返し意見の交換を行う、伝え合い共に考えることの重要性を感じた。
- ・遊びへの教育的意思決定に指導案作成や保育者間での話し合い、取組を進めることが協働であると再確認した。
- ・保育者が共に研修する場の設定が必要だと思った。
- ・協働することでの、互いの見方の違いや、視点の違いによる保育の課題が見えてきた。
- ・互いの違いを理解し合うこと。打ち合わせの時間をとることの大切さに気付いた。
- ・互いに歩み寄り知り合うことや本音を出し合えるような話し合いを行うことと、子どもの発達を見取り、学び合うことが大切ではないかと気付いた。

- ・子どもの姿を見取ってからの環境の再構成に協働していくことが必要である。また、物がなくても関わって遊べるように、日頃から集団遊びを提示していくことも必要と感じた。
- ・保育者間の話し合う時間の確保が必要。また、保育者の意識を高め、協働していくための体制づくりも必要ではないかと感じた。
- ・保育を一人で行う時より、保育者間で話し合うことで援助や環境の構成について具体的に話し合うことができる。
- ・互いの保育の形態や環境の違い、捉え方についての話し合いの積み重ねを土台に、「子どもにどんな力をつけたいのか」を共通理解することで、遊びの準備や場の構成ができるのだと気付いた。
- ・保育者が互いを理解して親しくなって、子どもを育てていくねらいを共通し、保育の質をあげていくことが大切であると感じた。
- ・互いの保育を理解し、課題を見つけることが必要だと思う。同じ視点での援助も必要。

5. 子ども自ら遊びをつくる保育に向けて保育者がすべきことについて

【保育所】

- ・手を出し過ぎてしまうことが多いので、子どもの主体性を育てる保育の在り方を考えていきたい。
- ・明日の保育に生かしたい。
- ・子どもを見守っていく中での教育的意思決定を大切にすること。
- ・子どもの身守りを工夫し、子どもが困ることも大事だということ。
- ・子どもの様子を十分に把握して、何をねらいとするのか、等の保育を考えていくこと。
- ・制作の際には、遊びたいと思えるような素材を十分に用意することと、その後遊ぶ時には、環境の再構成の必要性に気付いた。
- ・子どもの主体性や自ら遊びをつくっていける子をめざして、教育的意思決定をすること。
- ・保育も悩みながらも、子どもと共に育っていきたくないので、悩みながら楽しむこと。
- ・一日だけの活動にせず、子どもの姿から環境の再構成を行うこと。
- ・何のために教育的意思決定をするのかしっかりと意識すること。
- ・子どもの遊びをしっかりと見つめ、環境を整え過ぎても子どもの育ちを奪っている時もあり、言葉かけのタイミングの難しさを感じたが、子ども自ら遊びをつくりだす力を育てていきたい。
- ・子どもの心が動いている時に、タイミングよく、子どもが何を学べるのかを見極めながら保育をすること。
- ・日々の保育のなかで、教育的意思決定を考えながら、保育を実践していきたい。
- ・「子どもの遊ぶ力を育てること」「自ら遊びを考える力」「夢中に遊び込む姿」など、子どもにとって何が大切なのかを考えること。
- ・まず自分自身を意識して、子どもの遊びを先導していないかを振り返る。自らの言動の教育的意思決定を意識し、環境を整えるべきであると感じた。
- ・保育者自身の資質向上が大切。

【幼稚園】

- ・子どもたちが考えたり、試したりして遊びだせる環境の構成をすることが大切である。
- ・子どもの育ちを考え、子どもに対して言葉かけのタイミング、援助の在り方の重要性を考えること。
- ・普段の『遊び』の大事さを再確認した。夢中、没頭して遊び込める環境を保育者は、子どもの興味関心発達の姿から読み取り、整えること。また、子ども一人一人の見取りと記録の必要性と合同保育を進める時の意

見交換と振り返りの時間確保の体制が課題であると思う。

- ・見守ること援助すること等を瞬時に判断できる保育者でなければならない。
- ・子どもの実態把握から、興味のある遊びから学びへつながる経験は何かを見取っていける保育者になること。
- ・保育者は子ども自ら遊びをつくれるような適切な援助や環境を構成する判断力が求められる。子どもに何を育てたいのかの、ねらいをもって子ども自ら課題を乗り越えられるような援助や環境を構成することが大切。
- ・子どもの遊びの姿を見取り、日々の記録を重ねていくこと。
- ・育てたい子どもの姿をめざして、保育者間で話し合いを深め、保育の質を高めていくことが大切。
- ・保育者の発想の転換を行うこと。保育者は遊びを盛り上げ、楽しくしようとするのではなく、子ども自ら遊びを見つけ遊びに取り組む姿や目を輝かせる場面を保育者が捉えることが必要。

資料5：スケジュール

○ 各幼保合同保育研究のスケジュール表

合同保育をするために打ち合わせを数回行う必要がある。また、公開保育後には研究部員と共に参観保育者とのカンファレンスも必要。3組の研究協力園は、ほぼ同様の実践経過を行っていた。

【神功幼保合同保育研究】

(1) 実践研究経過

	月日	時間	打ち合わせ	人数	合同保育	人数	内容	備考
1	5/7	15:15	保幼小合同会議	12			本年度の実施内容	
2	6/4	13:30	打ち合わせ			6	指導案検討	
3	6/8	13:30	事前打ち合わせ				活動内容検討	
4	6/12	9:50			5歳児一斉活動	22		
	6/12	14:30	公開保育反省会	7			カンファレンス	
5	6/13	11:30	事前打ち合わせ	8			7/10の内容検討	
6	6/21	13:30	打ち合わせ	6			今後の計画	
7	7/5	13:30	打ち合わせ	7			7/10の活動確認 指導案の確認	
8	7/10	9:50			公開合同保育	25		
	7/10	14:30	公開保育反省会	100			カンファレンス	
9	7/11	電話	打ち合わせ	2			日程調整	
10	7/12	10:00	打ち合わせ	2			秋の合同保育につ いての調整	
11	7/13	10:00	打ち合わせ	2			合同保育資料について	
12	7/23	10:30	打ち合わせ	2			見取りの話し合い	
13	7/23	14:30	打ち合わせ	5			見取りのまとめ	
14	7/26	16:00 電話		2			秋の合同保育の日 程調整及び持ち方	
15	8/2	15:00	打ち合わせ	7			合同保育の確認	

16	8/6	10:00	保育園参観	8			(第二回保幼小連携) 5歳児保育園参観	
17	8/6	13:30	参観反省会	7			参観の感想と反省会	
18	9/12	14:30	調整と打ち合わせ	2			今後の調整	
19	9/27	15:00	幼児教育推進委員会	1				
22	10/10	14:00	打ち合わせ				今後の計画の検討	
23	10/11	14:00	打ち合わせ				指導案について	
24	10/18	15:00	推進委員と話し合い				今後の取組について	
25	10/19	15:30	打ち合わせ				今後の取組について	
26	10/22	9:30	交流会	100	保育園での遊び	9	どんぐり拾い・遊び	
27	10/24	13:00	保幼小交流会	150	保幼小連携 おもちゃランド	7	小学校での保幼小 交流	
28	10/25	16:30	合同保育準備	2			遊びの写真の交換	
29	10/26	16:00	合同保育準備	2			遊びの写真の交換	
30	10/29	15:30	合同保育準備	2			写真の交換と指導 案の確認	
31	10/30	15:30	打ち合わせ	7			指導案作成	
32	10/31	9:45			合同保育一日目	35	カンファレンス	
	10/31	14:20	振り返り・打ちわ せ指導案作成	11			遊びの展開、子ど もの姿・環境設定	
33	11/1	9:45			合同保育二日目	44	カンファレンス	
	11/1	17:00	公開合同保育・反省 会 保育の振り返り	10			遊びの展開、子ど もの姿・環境設定	

【帯解幼保合同保育研究】

(1) 実践研究経過

	月日	時間	打ち合わせ等	人数	合同保育	人数	内容	備考
1	6/13	13:30	打ち合わせ	6			本年度の研究内容	
2	6/18	13:30	打ち合わせ	16			合同保育について	
3	6/27	13:20	打ち合わせ	6			週案・指導案について	
4	7/10	15:00	打ち合わせ	6			7/12の打ち合わせ	
5	7/11	13:00	前日準備	11			環境構成について	
6	7/12	13:30			大雨・雷注意報発令の 為:合同保育は中止 午後:カンファレンス		7/12の指導案につ いて	
7	7/18	8:30		16	公開合同保育	52		
8	8/2		打ち合わせ	5			8/9に向けて 保育内容・持ち物等確認	

9	8/9	8:00		11	保育園において 幼稚園教員による 保育補助		保育のふり返りと 話し合い	
10	9/4		7/12 合同保育の カンファレンス	15			7/18 実施合同保育の 幼児の様子及び環境 構成・援助について	
11	9/24	13:30	合同保育について	7			二学期の合同保育に ついて	
12	10/3	13:30	打ち合わせ	6			学年別に検討 11/9・11/14 の保育に ついて	
13	10/24	14:20	合同園外保育 下見と打ち合 わせ	6			指導案の検討	
14	10/26	13:30	打ち合わせ				期間案の検討	
15	10/29	14:20	打ち合わせ	3			5歳児・指導案検討	
16	10/30	14:20	打ち合わせ	3			4歳児・指導案検討	
17	11/2	14:30	素材準備	3			航空自衛隊幹部候補生 学校へどんぐり拾い	
18	11/6	13:30	打ち合わせ	4			指導案の検討	
19	11/7	15:00	打ち合わせ	4			指導案の検討	
20	11/8	14:30	打ち合わせ				前日の打ち合わせ	
21	11/9	10:00		10	公開合同保育 園外保育：八坂神社 「どんぐりや落ち 葉拾い」	50	カンファレンス 援助・環境について	
22	11/12	14:30	打ち合わせ	6			指導案の検討・作成	
23	11/13	14:30	打ち合わせ	11			前日準備	
24	11/14	9:30		26	公開合同保育	52	カンファレンス： 援助・環境について 合同保育まとめ	

【六条幼京西保合同保育研究】

(1) 実践研究経過

	月日	時間	打ち合わせ等	人数	合同保育	人数	内容	場所
1	5/9	14:30	打ち合わせ	16			本年度の実施内容	保育園
2	6/12	14:30	打ち合わせ	8			本年度の年間計画	保育園
3	6/13	14:30	5歳児事前打ち合わせ	6			(6/20) 指導案・当日の流れ	保育園
4	6/15	14:30	振り返り 4歳児事前打ち合わせ	6 4	合同保育 (10:00 から)	180	遊び・教師の援助 (6/20) 指導案・当日の流れ	保育園
5	6/19	15:00	打ち合わせ	8			準備	保育園
6	6/20	13:00			雨で中止		カンファレンス	幼稚園
7	6/22	14:30	4歳児振り返り・ 打ち合わせ	6	合同保育 (9:15 から)	180	(6/20) 遊びについて	保育園
8	6/25	14:30	5歳児振り返り・	6				保育園

			打ち合わせ					
9	6/29	9:15			合同保育	150	遊び・教師の援助	幼稚園
10	7/5	13:30	打ち合わせ	4			経過報告 7/25の打ち合わせ	保育園
11	7/23	14:00	事前打ち合わせ	8			7/25の指導案・当日の流れ	保育園
12	7/25	8:30 12:30 14:00	保育実践 反省会 振り返り・打ち合わせ	12 10			幼稚園教員が学級担任 をする。 感想や意見交換	保育園
13	9/3	13:30	打ち合わせ	10			今後の計画	保育園
14	9/21	14:30	打ち合わせ	8			9/25の指導案・当日の流れ	保育園
15	9/25	9:30			合同保育	180	保育園の運動会遊び をする	保育園
16	10/17	13:30	打ち合わせ	10			10/22の指導案・当日の流れ	保育園
17	10/19	14:30		8			準備	保育園
18	10/22	14:30	振り返り	20	合同保育 (9:30より)	180	カンファレンス	保育園
19	10/24	13:30	事前打ち合わせ	10			10/29の指導案・当日の流れ	保育園
20	10/26	14:30	準備	12			10/29の準備	保育園
21	10/29	13:30	事前打ち合わせ	8	合同保育 (9:15より)	27	カンファレンス 10/30の指導案・当日の流れ	保育園 幼稚園
22	10/30	14:00	打ち合わせ	8	合同保育 (9:15より)	24	カンファレンス 振り返り	保育園 公民館 保育園

資料6：神功幼稚園・神功保育園合同保育研究資料

1. 幼保合同保育の実践

1) 平成23年度実施内容

日時	場所		内容
6月10日(金) 9:45~11:00	幼稚園	事前に指導案の書式を変える。 指導案の確認と時間の打ち合わせをする。 後日お互いに反省・評価を出し合う。	クラス・担任の 紹介 園庭で遊ぶ
7月1日(金) 10:00~11:00	幼稚園	事前に指導案の交換確認、時間の打ち合わせを する。(4歳児クラス担任)	(4歳児) プール遊び
7月5日(火) 10:00~11:00	幼稚園	事前に指導案の交換確認、時間の打ち合わせを する。(5歳児クラス担任) プール遊びは、初めての試みだったのでこれか らも枠にとらわれず連携していくことを確認す る。	(5歳児) プール遊び

10月31日(月) 9:50~10:30	幼稚園	事前に時間や観劇する場所の確認をする。一緒に人形劇を楽しみお話しストーリーを共有できた。	おはなし くれよん観劇
1月11日(水) 10:00~11:00	幼稚園	事前に能楽の内容を知り各園で子どもたちに知らせることで楽しめるようにする。子どもたちには、難しい内容だったが伝統芸能に触れる機会がもてた。	能楽鑑賞
1月12日(木) 9:50~11:00	保育所	事前に指導案の交換確認、時間の打ち合わせをする。 幼稚園は、冬休み明けで日数がたっていなかったため来年は、時期を遅らせる。	ふれあい遊び 園庭で遊ぶ

2) 幼保合同保育研究の実際

(1) 幼保合同保育研究会 I * 7月10日

①事前準備・打ち合わせ

6月28日、今までの指導案の形式を見直す。当日の日案は保幼合わせた形で4歳児で1部、5歳児で1部つくる。それまでの保育の経過は保幼で異なるので期間案は保育所と幼稚園の各年齢ごとにつくる。現時点での遊びの様子を話し合う。

7月3日、期間案を持ち寄り、幼児の姿を話し合う。日案をもとに、その日の環境構成や援助の方法、配慮事項の確認をする。教師の援助は保幼の保育者で連携をとりながら、幼児の様子をみていくようにする。遊びを追うのではなく、一人一人の幼児の気付きや、興味、育ちを見取っていくよう話し合う。当日服の汚れを気にせず、思いっきり遊べるように保育園児は着替えとタオルをもってこよう確認をする。遊びの紹介カードと実際の遊びの場をみながらはじめの話し合いをする。4歳児は初めての交流となるのでふれあい遊びも入れ、緊張感をとるようにすることを話し合う。

②保育実践

はじめて遊ぶ保育所の幼児たちにもわかりやすいようにと、園内の遊びの表示、靴を脱ぐ場所の表示、クラス表示、つくって遊ぶコーナーの用具の表示等、絵や写真で用意したことにより遊び出しがスムーズにできたように思う。どの幼児がみてもわかりやすい表示が大切であると感じた。人数も倍になり、活気がでてとてもよく遊んでいた。はじめにふれあい遊びを取り入れたこともあってか、それほど緊張感も感じなかった。顔と名前が一致しない幼児が半分いることで、教師が一人一人の幼児の姿が見えにくくなっていたことを反省する。当日、予定していなかったジュースづくりを幼稚園の4歳児が果物の皮をもってきたので場を設定した。ホイップづくりとつながって楽しいあそびになっていった。幼児の姿から柔軟に対応していくことの大切さを感じた。

③カンファレンス・振り返り《4, 5歳児のねらいに対して》

◎目標達成度

5歳児は今までの継続した交流のなかで、徐々に距離を近づけているようだ。積極的な関わり合いはなかなか見られなかったものの、お互いの存在を大変意識しており、友達のしていることを真似たり、時に話をしながら遊びを楽しんだりしていた。引き続き交流していくことで、今後、一層親しみをもって関わり合い、互いに意見を出し合い、遊びを楽しんでいけると思われる。保育園の4歳児は、初めての交流であったが、自分のしたい遊びを探し楽しんでいた。最初にふれあい遊びをしたことで、少し緊

張もほぐれ、遊びを楽しむことができた。

◎計画の緻密度

保育所と幼稚園の日頃からの連携がとれており、互いの園の子どもたちの様子や、遊びを把握し合えていた。また、前もって幼稚園の遊びを保育所でも取り入れ、親しみやすくしておくことで、当日は保育所の子どもも意欲的に楽しむことができた。

◎準備の万端度

制作の材料、泥遊びや色水遊び等の道具の種類が豊富に用意されており、子どもたちは自ら選び、遊びを発展させていくことができていた。また、園庭の見取り図を用意し、遊びの場所をわかりやすくしたり、靴を脱ぐ場所等を掲示したりしておいたことで、保育所の子どもたちは、戸惑わず過ごすことができた。

◎活動の充実度

それぞれが好きな遊びを選び、楽しんでいた。その中で、幼稚園の子どもは、今まで継続して楽しんできたなかで発見したことや知っていることを保育所の子どもに教え、手助けする姿が見られた。保育所の子どもは、幼稚園の子どもの言うことや遊ぶ姿を意識しながら、真似たり、色々試したり、工夫しながら楽しんでいた。

子どもの遊びは様々な方向に発展するため、保育者は子どもがその時に興味をもっていることや、必要な環境を判断し、タイミングをみて適切に対応していくことで、活動の充実度が上がっていった。

◎経験や発達

年齢や発達にあった遊びであり、子どもたちは自分の好きな遊びを選び、興味をもって楽しんでいた。幼稚園ではホイップづくりや色水遊び、水鉄砲や浮かべて遊ぶコーナーを以前から継続して取り組んでおり、様々なことを発見し遊びを深めてきている。そうした子どもたちは、自信をもち、遊びに対して一層意欲を高めている。また周りの友達に対しても、自信をもって思いや考えを出し合うことができていた。保育所の子どもたちもまた、幼稚園児と一緒に遊ぶなかで、様々な刺激を受け、真似たり工夫したりしながら遊びを楽しんでいた。子どもたちの今日の経験を今後につなげていき遊びを楽しんでいきたい。

また、遊びのなかで失敗することも、子どもたちにとって大切な経験である。子どもは失敗のなかから学び、遊びをより深めていくことができていた。その経験を今後も大切にしていきたい。

(2) 幼保合同保育研究会Ⅱ *10月31日(水) 11月1日(木)

『保育の計画—実施—遊びの見取りと評価』という一連の保育活動を幼保共同で行うなかで、前日の反省を翌日の保育に活かすことができ、幼保の保育者の協働を継続的に深められると考え、2日間連続の公開保育を実施し研修することにした。

①事前準備・打ち合わせ

○10月11日(水)《この頃の子どもの姿と遊びについての話し合い》

保育所の4歳児ではルールのある遊びが、少しずつ広がってきている。幼稚園では、自分のしたいことをじっくりとしていることや、制作、ままごと、虫捕り、運動会の経験などの友達と一緒に遊ぶ姿もあるが、まだまだ自分がしたいという思いの方が強いことが見られる。

保育所の5歳児では、自分の思いを出しきれていない子、相手の気持ちに気付けない子もいるが、気になる興味のある遊びを見つけていくことなどの鬼ごっこ、サッカーでよく遊んでいる。幼稚園では、TV「逃走中」を真似て、鬼ごっこをしている。1学期から鬼ごっこをよくしていたがルールが

統一しないので遊びが長続きしなかったり、みんなで遊ぶことが難しかったりしたが、この遊びで鬼ごっこのイメージが共有された。子どもたちの興味を引きだしながら教師の援助により遊びを広げていきたいと考えている。

○10月22・23・24・30日 《環境づくりを一緒に》

公開保育の遊びとして、保幼の遊びをすり合わせ、「制作…秋の自然物を使う遊び」「泥だんごづくり」「ルールのある遊び」「カプラ」を考えた。

10月22日（月）には、保育所と幼稚園が待ち合わせをして自然物拾いを行った。その後、保育所園庭で遊ぶ。事前に保育所から幼稚園に待ち合わせ場所の手紙をわたし、以上のことを打ち合わせる。

10月24日（水）細かい案の打ち合わせをする。期間案は10月22日～11月2日とする。

○10月18日（木）《再度打ち合わせ（研究部員も参加）》

*それぞれの子どもの姿についての打ち合わせ

幼稚園（4歳児）

・運動会前からタコの家づくり等、自分たちで工夫してつくっている。バッタやダンゴムシ等秋の自然を通して友達と会話が弾み、関わりを深めている。運動会後は年長児とリレーを共にしたり、ルールを真似たりして遊んでいる。自分の思いで急に遊びをぬけたり、強い口調で相手に話したりしているので、友達の思いに気付けるようにしている。

保育所（4歳児）

・春からドッジボールをしたが、今は年長児と楽しんでいる。4歳児だけで集団遊びやルールのある遊びをし、数人の遊びから大きな集団の遊びに発展してきた。園庭の木からドングリや松ぼっくりを拾い集めている。園庭で秋の虫探しをしている。友達との会話を楽しむが、周囲の状況が見えにくい子もいるので状況を考えながら行動ができるようにしている。

→共通する姿 <虫に対する興味、ルールのある遊び、身体を動かす遊び、友達と遊ぶ楽しさ>

幼稚園（5歳児）

・自分の思いを主張するが、友達の話を聞けないので、聞く時間を意識できるように工夫している。文字をつかって言葉集めをしている。体を動かす遊びが好きだが、1学期は鬼ごっこを数人で遊び、すぐに終わっていた。2学期になり、保育者が時に応じて遊びに加わりながら、ルールを共有して楽しめることが増えてきている。秋の自然物を飾ったり、遊びにつなげている。数人の友達との遊びだが、経験不足からか遊びのイメージがつかみにくい子がいるのでその子どもの姿を見取りながら援助をしている。

保育所（5歳児）

・自主的にドッジボールをして4歳児ともに楽しんでいる。サッカーや鬼ごっこのルールを自分たちで考えている。年長児として、年下の友達の世話等を楽しんでいる。固定遊具は友達の姿に刺激され取り組んでいる。泥団子づくりをし、継続して楽しんでいる。新グループを小学校の校區別でつくったりして、友達と声を掛け合いながら活動している。また自然物を集めることを楽しんでいる。自分の主張をするが、思いが伝わりにくかったり、相手の思いに気付いていないところもある。そこでその都度話し合い相手がどんな気持ちか考えられるようにしている。

→共通する姿 ルールのある遊び、身体を動かす遊び、自然物を使つての遊び、話をきき相手の気持ちを考えられるように

※これらを踏まえ、当日までに、自然物を集めに一緒に散歩に行き、当日の遊びに繋げていくようにす

る。

②10/31, 11/1 の合同公開保育に向けて

- ・指導案はどのようにするのか。

用紙はA3サイズ。当日の反省や、明日へのつながりを書ける欄を右横に付け足す予定。遊びの部分を充実して書くことができるよう、日案の中に入れ込むような形にする。

- ・雨の場合はどうするのか。

4部屋用意しておき、初めは1部屋に集まった後、子どもの様子や必要に応じて部屋を広げていく予定。運動が好きな子の遊びも保障できるようにしていく。

- ・当日の遊びの入り方をどのように考えるのか。

先に子どもたちにどのような遊びや内容かを話をしてから遊びに入るのではなく、幼稚園児が遊び始めているところに、保育所の幼児も遊びの図を参考にしながら、自然と遊びに入れるようにしていく。初めての遊びにも、幼稚園児の様子を見ながら楽しんでいけるようにする。

- ・マグネットの表示について、どのように考えるのか。

幼稚園では、マグネットの掲示を遊びの振り返りとして活用している。そこで今回は保育所の幼児が、どのような遊びがどこにあるのかわかりやすいように掲示する。

- ・遊びの内容について、どうするのかの話し合いをする。

以前から鬼ごっこを楽しんでいる幼児の姿があるが、幼児の実態からルールが共有できず遊びが続かなかった。最近テレビ番組をきっかけとし、多くの幼児がルールを共有し楽しむ幼稚園児の姿がある。保育所ではテレビの世界をきっかけとしない遊びを楽しんでいきたいという願いがあり、このような鬼ごっこを受け入れていくべきかと課題になっている。幼稚園児が楽しいでいる鬼ごっこは、きっかけはテレビであったが、今では子どもたちが創造的に思いを共有し楽しんでいるので、子どもたちの遊びの様子を見守っていくことになった。

③交流や話し合いを通して、何に気付いたのか。

- ・発達の姿は共通していたが、それぞれの園の環境や保育観の違いがある。それぞれの思いや考えを話し合い、互いに違いを受け止め合いながら、子どもが自ら遊び込んでいける様に考えていくことで教育的意思決定につなげていくことができた。
- ・合同保育を行うことで、保育所、幼稚園が互いの問題が解決されるメリットがある。
- ・合同保育となると、保育者の配置等を臨機応変に行うことが難しくなる。当日の子どもの姿を見ながら、両園の保育者がどう援助するか話し合ったり、共に環境の再構成を考えていったりすること（協働）が、この公開保育のねらいであると捉えた。

④保育実践

○10月22日（月）に向けて《保育所での遊びを考える時に》

保育所では幼稚園児を受け入れるにあたって、ただ保育所に来るだけでなくワクワクした期待感をもってもらえるようにクラスごとに考えることにした。幼稚園から「直接保育所に行くより、目印を決めて待ち合わせするとより一層期待感が膨らむのではないか。（地図等）」との提案を受け、幼稚園児が「合える喜び」や「保育所でどんな遊びがあるのかな？」などの期待感をもたせることで遊びが広がるのではないかと考えた。

保育所としても保育士主導にならないように各クラスで子どもたちと話し合っ、地図を作った。その事で園児も保育所に幼稚園児を迎えるのだと言う気持ちが強くなったと感じる。

○22日の遊び《どんぐり拾い》

手紙を見ながら保育園に来てもらい園周辺で一緒にどんぐり拾いをするつもりだったが、思ったよりどんぐりが落ちていなかったので事前に収穫したどんぐりを待ち合わせ場所に事前にさりげなく蒔いておいた。どんぐりを一緒に拾うことで一体感が出で、その後の遊びにも良い影響をもたらしたと感じる。

○10月31日（木）《幼保合同保育連続の1日目》

4歳児は「自分のしたい遊びを選び、思いを出して遊ぶことを楽しむ。」「落ち葉や木の実などの秋の自然に関わって遊ぶことを楽しむ。」5歳児は「友達と考えを出しあいながら、遊びを進めていこうとする。」「自然物や様々な素材を選んで使い、試したり工夫したりする。」というねらいをもって合同保育を実施した。

4歳児のぼくたちの町で遊ぶでは、友達と電車に乗ったり、家に一緒に入ったりして遊んでいた。電車ごっこでは友達と気持ちを合わせて走ったり連結したりして楽しむ姿が見られた。ケーキ屋さんでは会話しながら買い物を楽しむ姿があった。年長児の遊ぶ様子を真似ているところもあった。アクセサリ屋さんやごちそうづくりでは、自分のものをつくることを楽しみ、大切にしていた。虫の広場づくりでは、虫の卵を発見したことがきっかけとなり、幼保の園児が共に発見を喜び一緒につくる姿が見られた。

5歳児では、幼稚園の子どもがケーキ、アクセサリ屋を始めているところに保育所の園児が加わり、買い物をして遊び始めた。幼稚園児が他の遊びに行くとお店の人になったりして、自然に交流する姿となった。遊びを進めるなかで必要な約束事を共通理解できるように話し合いをするなど、援助していくことが必要であると感じた。

あそびランドでは、幼保それぞれがつくったおもちゃで遊びを進める姿があった。あそびランドの場所を見直し、店屋と景品づくりの場、修理をしやすいような材料や用具等の置く場所等を考えていくことが必要と思われた。また、砂場では友達とイメージを共有しながらストーリー性をもって大きな山作りをする姿がみられた。カンファレンス後、保育者全員が、園庭で翌日の子どもたちの遊ぶ様子をイメージし、思いを出し合いながら実際に各遊びの場を再構成してみた。遊びの場をつなぎ、より交流ができるように、線路を園舎側にのばし、場の配置を変えることにした。

○11月1日（金）《幼保合同保育連続の2日目》

大まかな環境構成を幼保の保育者が朝から一緒にした。

4歳児のねらいとして「自分のしたい遊びを選び、思いを出しながら友達と一緒に遊ぶことを楽しむ。」「落ち葉や木の実などの秋の自然にかかわって遊ぼうとする。」5歳児は「友達と共通のイメージをもてるよう話し合いながら、遊びを進めていこうとする。」「自然物や様々な素材を選んで使い、試したり工夫したりする。」とした。

4歳児は、2日目ということもあり、幼稚園に着くと自分から遊びをみつけ、遊び始める姿がみられた。電車ごっこでは電車の線路をお店屋さんの前までのばしたことにより、いろいろな遊びに目を向けるきっかけとなった。ごちそうづくりでは、つくる場所を広げたことで、保幼の園児が関ってごちそうづくりをする姿となった。前日はあまりしていなかったどんぐりころがしも電車が横を走ることで興味をもつ幼児が増えた。ケーキ屋さんやアクセサリ屋さんは、前日の経験から遊ぶ姿が多くみられ、わからないことはさりげなく子どもたちで教え合っていた。虫の

広場づくりでは、バッタをみつけたことにより、遊びが盛り上がった。片付けでは片付け方や場所もよくわかり、保育者の手をあまり借りることなくスムーズにできた。

5歳児は、幼保で協力する関係ができていくよう子どもの様子を見ながら環境作りや言葉がけを工夫したことで、互いの遊んでいる様子を感じながら、それぞれの場所で十分に遊びを楽しんでいた。あそびランドでは、おなもみの的あての配置を変え遊びに必要なものをつくる場を工夫することで、より遊びにつながりがみられるようになった。ケーキやアクセサリーをつかって遊ぶ場では、遊ぶ前に友達同士でお店の約束事を確認して決めたり、途中で遊びに加わる子どもにも伝える姿がみられた。ぼくたちの町では、子どもと話し合いながら線路をのぼすことで、他の遊びの場にも目をむけられるようになり、そこから昨日は気付かなかった遊びを始める子どもの姿があった。

⑤カンファレンス・振り返り《10月31日(木)》

【幼稚園4歳児担任からの振り返り】

ねらいを大事にしながら、幼児が何を楽しんでいるのかをしっかりと把握することを保育者間で共通理解した。「町で遊ぶ」は幼稚園で以前からしていた遊び。段ボールの電車に二人で乗っている。二人で気持ちを合わせているところを認めた。遊びの後の話し合いでもとりいれ、他の幼児にも知らせた。「虫の広場で遊ぶ」では、かまきりの卵を発見したことがうれしくて、年長児や保育園児に伝えたりして、発見の喜びを友達と共有することができた。砂場では、自然物を使って豆ご飯をつくる。つくりながら友達とつくっているものやバイキングについて会話したり、様子を見合ったりして思いを出し合っている。つくっているところを認め満足感がもてるようにした。しかし、「ジュースください」と行ってきた子に対して、つくることを楽しんでいた年少児はお店のイメージはまだなかったようだ。

【保育所4歳児担任からの振り返り】

お店屋さんや売るものやアクセサリーをつかって遊ぶなかで、売るものをつくることを楽しむだろうと予想していたが、年長児はお店屋さんやお客さんになり売り買いを楽しんでいた。はじめ保育所の幼児はお客さんになっていたが、一人がお店屋さんになると次々に中へ入りだした。4歳児は主に自分でつくることを楽しんでいた。自分でつくったもので遊びたい子、つくったものとお店がつながらない幼児が多かった。まずは自分がつくりたいところを大切に見ていくようにした。自然物とアクセサリーをつくるために使用すると思われたストロー、ビーズ等の材料の分類ができていなかったため、遊びにくそうにしていたのでつくる場所を移動させた。保育者間で相談してすぐに再構成したことで遊びやすくなった。

【幼稚園5歳児担任からの振り返り】

おなもみの的あてで遊ぶ場では、小学校で一緒におもちゃランドをした経験を生かし、今日は景品づくりを楽しんでいた。折り紙を景品にしようとして折っていて、その幼児は十分に楽しめていたが、周りの幼児にもわかるように的あての場に『景品をつくっているところです』や『休業中』の表示をしてもよかったと思う。砂場では、山づくりをしながら話し合ったり、考えたり、工夫したりしている様子を見て認めてあげるタイミングを逃してしまった。遊びの後の話し合いでは、どうまとめていけばいいのか、幼児の発言をどのようにつなげていけばいいのか戸惑いがあった。話し合いの時間が長くなりすぎたと感じた。

【保育所5歳児担任からの振り返り】

小学校でおもちゃランドを一緒に経験し、継続して遊びをしていたため、幼児からそのおもちゃを「幼稚園へ持って行って一緒に遊ぼう。」という意見がでた。前日（10/30）に、おもちゃを運んだ時、アクセサリ屋さんをみて「遊びたい。」と興味をもつ姿があった。輪投げ等のルールを決めてから遊ぼうと思っていたが、今日はあまり発展していかなかった。他にも魅力的な遊びがあったのかもしれないと思われた。後半になり遊びが楽しくなってきたが修理をしていた姿があった。話し合いが長くなったと思われる。幼児の声がすごく出てきたと思った。店の話が多くなって、他の遊びについての時間が少なかったと思うので、今日決めたルールを明日につなげていきたいと思った。

【参観者からの感想】（保育内容、子どもの姿についての話し合い・一人約2分）

- ・砂場の環境が参考になった。自分から遊びを見つけて楽しめていたと思う。教員がはいらなくても幼児同士でとてもよく遊んでいて関りあっていたと思う。
- ・全てのものが取り出しやすく遊びやすく設定されていた。いろいろな場面がみられて困ることがあっても幼児同士が自分たちで考え、行動する姿、コントロールする姿が育っていると感じた。店の約束についても話し合いで確認していたのがよかった。遊びの展開のなかで保育者同士の話し合い、連携がとれていると感じた。
- ・工夫の多い環境設定がされていた。
- ・砂場で5歳児らしい発言がきかれた。一人一人が友達と関わりあって解決したり、考えていたりする姿があった。
- ・幼児が互いの園の保育者に親しんでいた。

【研究部員からの感想】

- ・遊びの後の話し合いの方法が参考になった。話し合いの部分にねらいがあってもいいのではないかと思った。
- ・教師の援助のタイミングの難しさを感じた。輪投げのところで子どもたちが修理をしながら遊んでいた。難しかったので手伝っていたが、最終的に教師が修理してしまっていなかったかと。
- ・町遊びのところで走っている幼児は、遊びの目的が見つからなかったのか、あるいはもっと体を動かしたかったのか、イメージが共有される所までは至っていないように感じた。
- ・アクセサリつくりのところで途中テーブルの移動をしていたが、幼児の声はあったのだろうかという疑問があった。教師間で連携をとっているのがわかったが、環境の再構成の大切さを感じた。
- ・教師の動きを中心にしていると、とても連携がとれているように感じた。幼児の姿や様子をみながら、その場に応じてすぐに動く教師の姿があったと思われる。
- ・教師同士で話し合いの内容・場所等、短時間で相談されて連携をとりあっていた。短時間の話し合いの後、教師同士が互いを補い合いながら進められていたと思われる。

⑥カンファレンス・振り返り《11月1日（木）》

【幼稚園4歳児担任からの振り返り】

昨日の姿から、今日はねらいに『友達と一緒に』をいれた。場をいろいろ相談し、町をケーキ屋さんにつなげるよう構成し直した。友達と関われるように、場と場のつなぎ方を相談しながら幼児と一緒にした。今日の遊びの様子は、保育所の幼児が来るまでに、園庭にかいた電車の線路を見て走ったり、幼稚園児だけで楽しむ姿がみられたがその後続かなかった。昨日の話し合いで豆ご飯づくりを取り上げたので、今日はごちそうづくりの豆ご飯をつくりたい子が増えた。その思いを認め、

つくる場を広げ再構成した。その後、飾りたい子どもの思いをどのように場を構成しようか迷った。並べた子は、友達と関われるかと思ったが、砂と自然物が混ざり、飾ったものをきれいに大事にとっておく気持ちを子どもたちに取り上げればよかったと思った。昨日のカンファレンスにより、指導案を見直し忠実に保育することにした。留意点を意識した関りがもてず反省した。話し合いでは、できた思いや満足した思いを取り上げればよかったと思った。

【保育所4歳児担任からの振り返り】

昨日の子どもたちの姿から環境を再構成したことで、電車ごっこ、お店ごっこそれぞれ楽しんでいたが、線路のコースを広げ環境を再構成したことで遊びが繋がった。昨日は遊びが見えていなかった子も遊びが目に入り遊びへの広がりが見られた。昨日の続きをしたい気持ちで遊んでいた子がいたが、他の遊びが目に入り、興味が移り昨日と違う遊びを楽しむ姿も多かったので、じっくりと遊ぶ姿が見られなかったと思うが、遊びの興味は広がったと思った。どんぐりころがしでは、うまくいかないで「どうしたらいいかな。」と投げかけたが、同じ場にいた5歳児の女兒は、角度や高さを考えるなどいろいろなアイデアを出す、4歳児はころがすことを楽しんでいたので一緒に楽しんでた。遊びには入れない子には誘いかけ、心を受け止める援助を行った。片付けの時、「もっと遊びたい。」「もっとゲームしたかった。」と言っていたので、今日の遊びを楽しむことができたと思った。

【幼稚園5歳児担任からの振り返り】

今日は昨日の話し合いから景品づくりや的あてを楽しむ姿が見られた。昨日ジャングルジムの所の的あてを置いていたが、見えないので水道側に置くことにした。昨日の反省で幼稚園と保育所の遊びの場を交流できるように思っていたが、場が離れたことで交流は難しかった。

アクセサリーやケーキ屋では、幼稚園児はあまり遊んでいなかった。昨日までに十分遊んでいるから満足したのか、材料に違うものがあればよかったのかと話し合った。

砂場では火山、化石等に見立てて遊んでいたが、継続して遊んでいた幼児が欠席だったため盛り上がり欠け、山づくりが消滅し違う遊びになっていた。

昨日は話し合いが長くなったため、今日は要点をしぼってするように保育所の先生と話し合い、楽しかったこと、認めてあげたいことを話すようポイントを絞った。子どもたちは、うれしかったこと、昨日から変わったことでみんなに伝えたいことを話した。もう少し言葉を引き出せるようにも進めればよかったのかなと反省した。

【保育所5歳児担任から】

今日も幼稚園で遊ぶのを楽しみにしていた。幼稚園に着くと、自分たちの行きたい遊びの場所へ向かっていく姿や友達の姿を追いかけながら遊びに向かう姿が見られた。保育所の幼児はケーキ屋さんの遊びを楽しみ、売り買いで幼稚園児と交流の姿が見られた。昨日の反省から話し合いは、楽しかったことや認めてあげたい子どものことを取り上げるようにした。話し合いで、的あてやケーキ屋さんをしていた子どもたちの表情に満足感があつた。二日間の合同保育を明日にどうつなげるかは、保育園に戻り一人一人の思いを絵で表現したりして受け止めていきたい。

【参観者からの感想】(保育内容、子どもの姿についての話し合い・一人約2分)

- ・幼保がどのように交流しているのを見ると、自然な感じで充実して遊んでいた。保育所では、教材を自由に豊かにつかう経験が少ないので、これだけ自由に使えたら遊びが豊かになるとうらやましく思った。自園では園内の環境を見直し研修をしている。できない、使えないとマイナス

に考えるのではなくできることから取り組んでいきたいと思った。保育の振り返りを大切に、明日の保育に生かしていきたい。

- ・子どもの声を拾うことを目的としていたが、環境が気になった。環境については園に持ち帰り、実態を踏まえながら今から取り入れてできることをしていきたいと思った。子どもの思いや考えを生かし、職員で共通理解をして取り組んでいきたいとも思った。
- ・幼保の子どもたちがどのように関わっているかに焦点をしばって参観した。関わっている姿が多かった。言葉のやりとりや一緒になったときに、力をあわせる環境構成があったと思われる。片付けがスムーズだったことから、遊びの満足感や充実感が伺えた。どの子どもも生き生きと遊べる環境づくりがされていて、遊び込める環境であったと思われる。いろいろ話しかけてくる姿に友達との遊びを楽しんでいる姿が感じられた。
- ・子どもたちに遊びたいという思いで、自分のしたい遊びを楽しめる環境が準備されていたと気付いた。話し合いから遊びへの意欲が感じられた。準備されている材料や素材の使い方に慣れていて制作意欲につながったと感じた。自園で何ができるか考え取り組んでいきたいと思われる。
- ・秋の自然物をたくさん使って自分たちの遊びたい場を自分で選んで遊んでいる姿がとても印象的であった。線路が園内にめぐらされていたが遊びと遊びをつなぐ環境であったと思った。

資料7：帯解幼稚園・帯解保育園合同保育研究資料

1. 幼保合同保育の実践

1) 幼保合同保育研究の実際

(1) 幼保合同保育研究会 I

①事前準備・打ち合わせ

- ・互いの幼児の実態や遊びの様子を出し合い、遊びのおもしろさや楽しさが体験できる交流をしていくことを確認し合った。その中で、この時期ならではの遊びとして、園庭や砂場で砂や土、水を使って遊ぶ姿が重なったので、合同保育に取り入れることにした。
- ・交流については、幼稚園側は迎える、招待するという意識、保育所側は遊ばせてもらうという意識をもたないようにし、『仲間と一緒に遊ぼう』という思いがもてるように、保育者が言葉かけに気をつけていこうと共通理解しあった。
- ・園児 54名の交流となるので、安全に十分遊べるように数に配慮して用具や素材、材料を準備する。どんな用具や素材、材料が、どれくらいの数が必要なのかを考えたり、互いの園で遊んでいる物を話し合ったり、足りないものを持ち寄り補い合ったりした。
- ・用具、素材、材料の提示の仕方は、初めての環境でも扱いやすく、片付けやすいように表示し、視覚的にも理解しやすいようにした。
- ・保育園児にとっては幼稚園の園庭は初めての環境でもあるので、幼児がどのように関わっていくのかは見守り、受け入れるようにしようと保育者で共通理解した。

②保育実践（場所：帯解幼稚園 園庭）

- ・好きな遊びをする活動を行った。保育者間で話し合い、幼児自ら遊びが進められるように視点をあて互いの幼児の姿や遊びの様子から実際に今遊んでいる遊びを取り入れ、4・5歳児が一緒に色水遊びや砂場遊び、ごちそうづくり等をした。

③カンファレンス・振り返り

- ・初めは事前に予想していたように、園庭の固定遊具に興味を示し遊びだした保育所の幼児もいたが、徐々に砂場や色水遊びの場で、準備しておいた用具や材料に気付き、幼児自らが使いたいものを選び遊びだしていった。
- ・日陰のテーブルを幼稚園・保育所の幼児6～7人の幼児が囲み、色水づくりを楽しんでいた。同じ場で遊んではいるが、一人一人の幼児が自分のしたいことに取り組んでいた。できた色水を保育者に見せることで、周りの幼児との関わりも少し生まれ、一緒に遊ぶとまではいかないが、互いに関心をもつ姿や、用具を貸し借りする姿が見られた。
- ・幼稚園児にとっては、大勢の中での遊びで日頃とは違った環境の中、初めは少し緊張もしていたが、少しずつ慣れて周りが楽しむ姿に自分も遊ぶようにする姿が見られた。また、遊んだあとの話し合いの場も、いつもは5人の思いしか聞けないが、多くの遊び方や考えや思いなどを聞ける経験ができて良かった。
- ・保育者が話し合い、幼児自ら遊びが進められるように視点をあて互いの幼児の姿や遊びの様子から実際に今遊んでいる遊びを取り入れ保育内容、色水遊びや砂場遊び、ごちそうづくりをした。

④気付き、学び、課題

- ・合同保育に向けて保育者が話し合いを重ね、指導案を擦り合わせていくことで、互いの園のことを知る機会となり、このことが交流の第一歩であると感じた。
- ・普段経験している遊びの中でも環境の違いから不安定な部分が見られる幼児の姿が見られたことで、今後の合同保育を進める中で人と関わる楽しさや遊びのおもしろさがより感じられるような教員の援助の仕方や意識のもち方を考える必要性を感じた。
- ・初めての交流で、互いの幼児が少しずつ相手に興味をもち、一緒に遊ぼうとするきっかけがつかめそうになったところであると思われる。互いの幼児の実態を出し合い無理のない交流の仕方を考え合ったり、環境構成を共にしたりすることで、幼児自らが好きな遊びを選んで遊びだし、少しずつではあるが、相手を意識し次の交流を楽しみにする姿につながっていくことがわかった。
- ・指導案の書き表わし方が異なっても、共通点を見出しながら、それをどのように擦りあわせていくのかを考え合っていく必要がある。

(2) 幼保合同保育研究会Ⅱ

①事前準備・打ち合わせ

- ・保育者が何度も下見に出かけ、境内の広さ、この場所のできる遊びの内容の検討、周りの木々の様子、危険箇所の確認などを行った。今年は木々の紅葉が遅く、どんぐりもあまり落ちてこなかったため、対処の方法を考えあった。
- ・11月9日（金）の合同保育に向けて、保育内容についての検討をした。月案、期間案（週案）の照らし合わせや、合同期間案（週案）、指導案の作成を行い、4歳5歳共通して気をつけるべきことや援助の確認をし、それぞれの前回の幼児の姿から予想して4歳5歳の発達にあった援助や言葉かけができるようにした。

②保育実践（場所：八坂神社）

- ・両園の中間地点にある神社で待ち合わせ、木の実や落ち葉拾いを行った。

③カンファレンス・振り返り

- ・どんぐりや木の葉が思っていたより少なく満足感が得られるか少し心配していたが、少ないからこそ幼児は見つけたどんぐりや木の葉を大事にする姿が見られた。

- ・保育者が積極的に互いの幼児に声をかけていくことで幼児からも保育者にむけて「見てみて」「〇〇先生」と声が聞かれるようになった。すると少しずつその中で前回不安そうにしていた幼児も他の幼児が拾った葉っぱやどんぐりを見て「かわいい」「きれい」と感想を言いながら穏やかな表情が見られた。保育者が関わることで互いを意識しながら「その木の実かわいいな」とぼそりと言う姿も見られ始め「こっちにあったよ」「教えてあげる」と少しずつ幼児同士の会話が聞かれるようになってきた。その日のさようならの挨拶の場面では、幼児同士が自然と手をタッチし合う姿も見られ、自然のなかで心を開放させ楽しさを共有した思いが行動として表れたのではないかと思われた。

④ 幼保合同保育Ⅰの課題に対する改善点

- ・指導案においては、期間案を何度も擦りあわせし、一本化できるようにした。ねらいの部分においては、教育と養護という部分は残すようにした。

⑤ 気づき、学び、課題

- ・交流を進めていくには、保育者がモデルとなって自らが意識して互いの園児に関わっていくことが、他の幼児の刺激となり、担任が楽しそうにする姿に感化され、自分も進んで関わってみようとする気持ちにつながっていくものと思われる。
- ・事前の話し合いで、援助の仕方を確認し合った。それにより、互いの園児に意識的に声をかけることができた。その結果、幼児たちも互いを意識できるようになった。保育者が意識的に関わろうとすることにより、意図的に関わらせようとしなくても幼児同士が互いを意識し、関わり始めた。このことを大事にしながらいっしょのねらいを持って交流できるよう合同保育の内容を検討していくことが課題である。
- ・幼保の月案、期間案、週案を照らし合わせた時に、幼稚園教員は、保育所が養護の部分を大切に考え保育に取り入れていることがわかり、保育所保育指針に目を通す良い機会になった。
- ・保育所保育士は、期間案という形式を使って表すことが初めてであり、今回は2週間にわたり計画することで幼児の姿や活動、保育者の援助の仕方などが明確になった。
- ・自然の中で遊ぶということは、ただ単に木の実や木の葉を集めるということではなく、五感を働かせ、鳥の声や木、葉、風の音など、周りの様子にも気付くことが大切であったことをカンファレンスに参加して再認識した。また、拾い集めたもので何か『つくる』という活動に進めていこうとしたが、幼児自らが遊びを作りだしていくためには、幼児自身がどうしたいのかを考えさせ、遊びを進めていくべきだったと反省した。

(3) 幼保合同保育研究会Ⅲ

① 事前準備・打ち合わせ

- ・4歳児5歳児年齢別に何度も話し合いを重ね、幼児の姿や遊び、合同保育の中で見られる幼児同士の関わりや変化をふまえ、内容を決めた。また幼稚園と保育所の幼児の人数に差があることも考慮した。
- ・互いに準備しておくものや配置について、話す内容などを細かく話し合い、出し合うことでどのような意図や考えで進めていくのかという意識統一ができるよう努めた。

② 保育実践（場所：帯解幼稚園 保育室）

- ・年齢別に秋の自然物や色々な素材、材料を使って、好きなものを作ったり様々な遊びを考えたりして遊んだ。4歳児は、自然物を使って自分の好きな物を作った。できた作品をみんなで見せ合い、紹介し合った。5歳児は自然物を使って様々な遊びを考えたり作ったりした。

③ カンファレンス・振り返り

【4歳児担任からの振り返り】

- ・今回で4歳児としては3回目の交流となる。回を重ねるごとに、出会うことに期待をもち、幼児自らが相手の姿を見つけると、「こんにちは」と手を振り招いたり、帰る時には、「また、一緒に遊ぼうね。」「今度は遊びに来てね。」と声をかけたり、「また、明日も遊べるの?」と保育者に尋ねるなど、一緒に遊ぶことを楽しみにしている姿が見られ、幼児同士の気持ちが通い始めていると思われた。

【5歳児担任からの振り返り】

- ・保育者の共通理解として、幼児に声をかけすぎたり提案したりしすぎないという点から、幼児への関わりや援助に迷いが出てしまった。その保育者の迷いの中で、幼児の遊びに対する思いや気付き、興味関心が薄れてしまうことがあった為、必要な援助とそうでないものの線引きを何度も合同保育を進めていく上で考え直していく必要があると感じた。
- ・自分なりに素材を組み合わせて自由につくって遊べるように、様々な素材や材料を豊富に用意した。また、幼児が使いやすいように種類別に分類し環境を整えたことで、一人一人が使いたい素材・材料を選び、喜んでつくる姿が見られた。様々な素材の中で、目新しい素材である紙粘土に興味をもち、使ってみたい、触れて遊んでみたいという気持ちが強く表れた。可塑性のある紙粘土に、木の実や小枝、木の葉は付けやすく、刺したり、並べたり、押し込んだりすることで、自分の思い描いた通りになりやすいこともあり、ケーキ作りを楽しんだり、飾り物をつくったりする姿につながったと思われる。

⑤Ⅱの課題に対する改善点

- ・幼児同士を意図的に関わらせなくても、保育者が互いの園児を名前で呼ぶなど意識的に関わろうとすることにより、幼児から保育者に、又、幼児同士が関わりを持つようになってきた。3回目の合同保育では、自ら遊びを選び、遊びを展開する中で幼児同士の関わりが深まるような保育内容を考えた。

⑥気付き、学び、課題

- ・様々な素材や材料は用意したが、この素材はこれをつくるためにという教員保育士の思いが強く表れていたと反省する。素材を画一化せず、様々な大きさや形の物を用意するなど、もっと幅を持たせた素材・材料の提示の仕方をすれば、幼児自らがもっと自由な発想でつくって遊ぶことができたのではないかと思われる。
- ・1回目2回目と違い、普段の経験の違いがはっきりと感ずることができた。互いに当たり前に思っていることこそしっかりと話し合い、確認をしていくことが土台となり遊びや保育が進んでいくのではないかということに気付くことができた。
- ・今回指導案を一本化するにあたり、互いの園の幼児の姿を出し合う中で文化や環境の違いを感じた。しかし、教育的なねらいや今の年齢でどんな力をつけさせたいか、そのための環境構成や援助では多くの共通点を見出すことができた。互いの指導案をすり合わせることで一本化していったことは、大きな学びであった。また、カンファレンスで出された公開保育での意見や感想を受け止め、自園での課題としていきたい。

環境構成を考えていく中で、「こういう遊びをしてほしい」という保育士側の意図が強く働くことが多く、それしかできない環境になってしまいがちだが、子どもが考えたり工夫したりしながら遊びを進めるためには、どんな環境構成であるべきかを考える機会となった。子どもたちの遊びを見ながら、必要な物を足したり、片付けたりしていきながら、見守ったり援助していくところに「教育的意思決定」が働くのではないかと思う。幼稚園と保育所の互いの保育者が一緒に指導案を作成することで共

通理解ができた。今回の合同保育のように就学前の幼児を同じ視点で見ることと、保育者が一緒に研修を受けることで互いの保育の質を高めることになり、それが連携の質を高めることにつながると思う。

【保育所 日案】

日 案

ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園の友達に親しみをもって関わり、一緒に遊ぶことを楽しむ。 ・秋の自然物や様々な用具、素材を使って自分なりに工夫しようとする。 		
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園に行き、ドングリや木の葉、木の枝などを使って遊ぶ。 ・自分のイメージに合った素材を選び、試したり工夫したりしながら好きなものを作る。 		
時間	予想される子どもの姿	環境構成	保育者の援助と留意点
9:30	<ul style="list-style-type: none"> ・友達や保育者と挨拶し、持ち物の始末をする。 ・自分の作りたいもののイメージに合う材料を選んだり、やり方を試したりする。 ・秋の自然物や身近な素材を工夫して使って遊んだり、作品を作ったりする。 ・友達のしていることに関心をもったり、自分の考えを相手に伝え、相手の意見も聞きながら一緒に遊びを進めていこうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・予想される遊びがすぐに始められるように環境を整えておく。 ・子どもが興味をもったものを調べたり、自分たちで遊びに取り入れながら遊んだりすることができるよう図鑑や資料、制作の絵本や自然物を使った遊びの本などを用意しておく。 ・様々な素材を用意し、子どものイメージに合ったものをすぐに見えるように分けて用意する。 <p>【オブジェ】</p> <p>少し大きめの木の枝・椅子などに固定 (毛糸・リボン・ひも類・布・フェルト・コルク・紙類・小枝・ドングリ・葉っぱ 等)</p> <p>【ドングリころがし】</p> <p>ベニア板・木片・紙コップ・牛乳パック ドングリ 等</p> <p>【ケーキ作り】</p> <p>段ボール・空き箱・布・紙・リボン・ドングリ・木の実・小枝・紙粘土 等</p> <p>【洋服、帽子作り】</p> <p>ビニール袋・新聞紙・リボン・布・紙・ドングリ・葉っぱ 等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなで後片付けをし、作ったものを紹介し合える場を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者が明るく積極的に挨拶し、幼稚園と保育所の子どもたちが、互いに親しみがもてるようにする。 ・子どもが気付いたことや見つけたことなどを表現している姿を見逃さず、それが子ども同士に伝わっていくよう、声をかけていく。 ・思いを描きながら考え、工夫している姿を大切に受け止めていく。また、様々な材料の扱い方や表現方法を知らせ、表現することを楽しめるようにしていく。 ・子ども同士の会話や表情から自分の思いを出したり、友達の思いを受け止めたりしながら、協力して作業を進めることができているか見守る。 ・満足感や達成感を味わえるように子どもが工夫したところや友達と協力したところを認め、周りの子どもにも知らせていけるようにする。
11:00	<ul style="list-style-type: none"> ・作ったものを紹介し合う。 		

【幼稚園指導案】

平成24年11月14日(水) 指導案	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ○ 幼稚園と保育園の友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。 ○ 身近な秋の自然物や様々な材料を使って、つくることを楽しもうとする。
内容	<ul style="list-style-type: none"> ○ どんぐりや木の実、落ち葉、小枝などを使って、好きな物をつくる。 ○ 自分の思っていることを、友達や保育者に伝えようとする。 ○ 素材や材料の種類や用具の使い方を知る。
時分	<ul style="list-style-type: none"> ○ 予想される幼児の活動
9:30	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <ul style="list-style-type: none"> ○ 幼稚園児と保育園児が挨拶をする。 ○ 落ち葉やどんぐりなどの自然物を使って、好きな物をつくる。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 集まって話を聞く。 ・ 素材や材料をみんなで見てまわる。 ・ 自分の使ってみたい素材や材料を選び、容器に入れる。 ・ 画板を用意する。 ・ ケーキづくり、マラカスづくり 冠づくり、額づくりをする。 ・ できた作品を棚に飾る。 </div> <div style="width: 50%;"> <p>□ 環境構成 ◇ 教師の援助</p> <p>□ 必要な素材や材料を使いやすいように用意しておく。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>画用紙、段ボール紙、紙粘土、プラスチック容器、ペットボトル(500 ml) ビニールテープ、両面テープ、布テープ、セロテープ、ボンド、輪ゴム、はさみ、ホッチキス、</p> </div> <p>□ つくりたい物に合わせた素材を選ぶことができるよう種類別に分けて置く。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>どんぐり、落ち葉、小枝、木の実</p> </div> <p>◇ 自分の思った物がつくれるように、幼児の話を聞いたり、一緒に材料を探したり、アイデアを出したりする。</p> <p>◇ 個々の発想や工夫を大切に受け止める言葉がけをする。</p> <p>□ つくった物を使って、ならしたり踊ったりして楽しめるように、親しみやすい曲を用意する。</p> <p>□ 自分のつくった物を丁寧に扱えるようまた、友達の作品も見られるように出来た物を置く場所をつくっておく。</p> </div> </div>
10:20	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <ul style="list-style-type: none"> ○ 片付ける。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 残った素材をもとの場所にもどす。 ・ ごみの始末をする。 ・ 画板を片付ける。 </div> <div style="width: 50%;"> <p>□ 後片付けがしやすいように、種類別の表示をした入れ物を用意し、自分で気づいて片付けられるようにする。</p> <p>□ みんなの顔が見れるように、円になって座る。</p> </div> </div>
10:35	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <ul style="list-style-type: none"> ○ 集まってどんな物をつくったのか、話をする。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 友達の作品を見たり、話を聞いたりする。 </div> <div style="width: 50%;"> <p>◇ 制作物への思いを、1人1人に聞きながら、工夫したところなどを認め、自信につなげていく。</p> <p>◇ 思いが十分に伝えにくい時は、必要に応じて保育者が言葉を添え、個々がつくったことに満足感をもてるようにする。</p> </div> </div>
11:00	<ul style="list-style-type: none"> ○ さようならの挨拶をする。
反省評価	

【幼保合同保育指導案】 平成24年11月9日(金)		
担任	幼一二年保育 4歳児年少 ○○○○ 保一 4歳児 ○○○○○ 幼一二年保育 5歳児年長 ○○○○ 保一 5歳児 ○○○○○ ○○○○ ○○○○	
ねらい	(4歳) ○ 幼稚園と保育園の友達と一緒に触れ合って遊ぶ楽しさを味わう。 ○ どんぐりや落ち葉などの自然物を拾ったり、遊んだりすることを楽しむ。 (5歳) ○ 幼稚園保育園の友達に親しみをもってかかわり、一緒に遊ぶ楽しさを味わう。 ○ 落ち葉や木の実を拾ったり触れたりして、色や形、大きさ、においなどに気付く。 (共通) ○ 公共の施設での過ごし方を知り、約束を守って遊ぶ。	
内容	(共通) ○ 幼稚園保育園の友達と一緒に歌を歌ったり、手遊びを楽しんだりする。 (4歳) ○ 園外保育に行き、身近な秋の自然に親しむ。 ○ 幼稚園や保育園の友達と触れ合い、親しみを感ずる。 ○ どんぐりや落ち葉の色や形、大きさに気づきながら楽しんで拾う。 (5歳) ○ 色づき始めた木々や落ち葉に気付き、季節の変化を感じる。 ○ 友達と誘い合い、落ち葉やどんぐりを拾い、集める。 ○ 友達と一緒にどんぐりを並べたり、数を比べたり、ころがしたりして遊ぶ。 (共通) ○ 集団で行動する時の約束を知り、守る。	
○予想される幼児の活動 ◇環境構成 ○保育士・教師の援助		
保育園 7:30 ○登園する。 ・持ち物の始末をする。 ○戸外で遊ぶ。 9:30 ○片付けをする。 ○手洗い・うがい・お茶を飲む。 ○園外保育に出かける準備をする。 9:45 ○園外保育に八坂神社に行く。	幼稚園 8:30 ○登園する。 ・持ち物の始末をする。 ○戸外で遊ぶ。 9:20 ○片付けをする。 ○手洗い・うがい・お茶を飲む。 ○園外保育に出かける準備をする。 9:40 ○園外保育に八坂神社に行く。	
10:00 ○八坂神社に着く。幼稚園、保育園の友達と互いに挨拶を交わす。 ◇前日までに、保育士と教師が八坂神社の木の実や木の葉の色づき状態を把握し、幼児が興味関心を深められるような教師のかかわりや安全面について十分話し合っておく。 ◇安全に遊びに取り組めるように保育士と教師間で連携を取り合い、境内の出入り口や通路に十分配慮する。 ○歌を歌ったり、手遊びをする。 ◇保育園、幼稚園の幼児が互いに触れ合ってうたったり手遊びできる曲を準備する。 □保育士や教師も仲間に入り一緒にする楽しさを表現し、多くの友達と触れ合う楽しさを知らせる。 ○先生の話聞く。神社の境内で遊ぶことや約束について話を聞く。 □幼児が理解し行動できるように、細かくわかりやすく話をする。 ・神社境内から飛び出さない。 ・神社の石の柵から外へは行かない。 ・灯籠の上には登らない。 ・神社の建物の中には入らない。		
【4歳】	○ 友達とどんぐり拾いや木の葉集めをす	【5歳】
◇保育士・教員自身が感動の気持ちを表していくようにする。 □どんぐりや落ち葉を拾いながら発見したこと、驚いたことなどに共感しまわりの友達にも知らせ、関心がもてるようにする。	◇まわりの幼児の姿に気付けるよう、保育士・教員自身が違いの園の幼児と積極的にかかわっていく。 □自然体験に伴う幼児の感動や気付きを受け止め、まわりの幼児と共有できるように言葉がけをしていく。	
10:50 ○集まって話を聞く。 ○幼稚園、保育園の友達と挨拶をする。 □集めた物を使って遊ぶ機会があることを知らせ、期待をもって次へとつないでいけるように話をする。 11:00 ○幼稚園・保育園に帰る。		
反省・評価	・自然の中で遊ぶ場合、五感を働かせてかかわり気付くような働きかけが大切である。(4歳児担当) ・次の活動の展開を想定して、「これで何をつくりたい?」と問いかけたが、子ども自身がどうしたいのかを聞いて進めていくべきであったと反省した。(4歳児担当) ・保育者が遊びを見守りつつも、互いの子どもたちに声をかけることができた。(5歳児担当) ・子どもが気に留めていないことにも気付けるような援助をしていきたい。(5歳児担当) ・親しみを感ずることが伺われた。今後は、遊びや環境を通して、関わりがもう一歩深まるように援助したい。	

平成24年11月14日(水) 指導案

人数	幼稚園 二年保育の児童 〇〇組 男2名 女3名 計5名 保育員 5名 男17名 女10名 計27名 研修合計—32名
担任	幼稚園 〇〇〇〇 保育員 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ○ 幼稚園、保育員の友達に親しみをもちかわちあわむって遊ぶ楽しさを味わう。 ○ 友達のお話をきくことに興味をもったり、自分の考えを相手に伝える、相手の質問も聞くたりしながら、一緒に遊んで進めていくこととする。 ○ 秋の自然物や様々な素材、道具を使って自分なりに工夫して遊ぶことを楽しむ。
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・どんぐりや木の葉、木の枝などを使って遊ぶ。 ・自分のイメージに合った素材を選び、紙したり工夫したりしながら好きなものを作る。 ・自分で工夫したことや考えたことなどを友達に伝える。 ・共同の素材や道具を大切に扱い、みんなで賢く使い分けながら遊ぶ。
9:30	<ul style="list-style-type: none"> ○ 予想される幼児の活動 〇 教師の援助 〇 準備運動 ○ 自分たちで工夫して活動を進めることができるように幼児に様々な自然物や素材があることを知らせる。 ○ 好きなものをつくる。(〇 予想される幼児の活動 〇 保育士教師の援助 〇 準備運動) ○ 保育士、教師がきこくけを作ったり、仲間として遊びに加わったりすることでまわりの幼児とかわちあわむながら活動に取り組めるようにする。 ○ 幼児が製作したことを見つけたことなどを褒め、そのことが幼児同士に伝わり、より声をかけていく。 ○ 思いやめながら考え、工夫している姿を大切に受け止めていく。また、さまざまな材料の思いや表現方法を知らせ、表現することを楽しくめるようにしていく。 ○ 幼児同士の会話を表現から自分の思いを出したり、友達の思いを受け止めたたりしながら盛り上げて遊びを進めることができるようになる。 ○ 自然物を使った遊びの写真や動画を幼児が手に取るように撮ることができやうに置いておく。
11:00	<ul style="list-style-type: none"> ○ 片付けをする ○ 話し合いをする。 ◇ 後片付けをし、作ったものを紹介しあえるよう、円になつて座る。 ◇ 満足感や達成感を感じあえるように幼児が創意工夫したところや友達と協力したところを認め、まわりの幼児にも知らせていくようにする。 ○ また別冊保育者の友達とあそぶことを楽しむ。
反省・評価	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの主体性を大切にすることを、幼児へ声をかけすぎないように意識すること、興味喚起した結果、幼児の思いや考え、説明が理解するようになり計算にみることもできた。一方で、見取りと個別の判断において、難しさを感じた。 ・今回は、最初から作る活動が中心であったため、友達と一緒に遊ぶ機会にこそまでは至らなかった。「ケーキを焼きたい」という声が出たため、それぞれの遊びが広がっていき、これを楽しめたように見える。 ・今回は、各賞での賞状の遊びをもちこんだり、今回の遊びをさらに発展させて遊ぶ機会を期待したりする必要がある。

秋の素材作り方

◇ 大きめの木の枝をいすに固定して立てておき、高い場所にも幼児の手が届きやうに巧技台を用意しておく。

【毛糸・リボン・布・フェルト・コルク・つばようじ・おじくぎ
包紙紙・新聞紙・ぼたん・ダンボール片
ポンド(2)・のり(2)・てふき(4)
いす(2)・巧技台
小枝・どんぐり・葉っぱ・木の枝・大きめの木の枝(2)】

○ 友達と一緒に盛り上げる楽しさを満足感を得るよう一人一人の考えを認めたり、受け止めたたりしながら保育士、教師も一緒にアイデアを出したり、実現できるようなヒントを出したりしていく。

秋の自然物や様々な素材を使って好きな物を作る

◇ 幼児が興味をもったものを譲ったり、自分たちで遊びに取っ入れながら遊んだかきすることができるように友達や資料、制作の絵本や自然物を使った遊びの本などを用意しておく。

【ダンボール片(丸・三角・四角)・空き箱・新聞紙・包紙紙・綿
リボン・レース・スプレー・リボン・布(約5cm 平方)
ビニール袋・新聞紙・ハンガー(3)
葉っぱ・どんぐり・セロハンテープ(1)・両面テープ・ポンド(2)・のり(2)・てふき(4)】

○ 自分たちが工夫して取り組むとしていることを認め、まわりの幼児にも知らせていく。

◇ どんぐりころころがしをしよう(プール)

◇ 遊びが広がりをやうに大きな板を用意したり、どんぐりころころがしに参加しに参加しにいく幼児もどんぐりころころがしに遊べるように板などを用意しておく。

◇ どんぐりころころがしに興味をもてるような素材を用意しておく。

【ベニヤ板・木片・くぎ・おんから(7)・大型積み木(2)
箱トピック・牛乳パック・どんぐり・ポンド(2)・筒・空き箱
はさみ(4)・てふき(2)・机(1)・セロハンテープ(1)】

○ 危険な道具を使用する時の約束事を確認し、安全に使用できるように使いやうや約束を幼児と共に確認しあう。

○ ポーリングをしよう(廊下)

◇ 作った物ですぐに遊びが始められるように広い空間を確保しておく。

【ペイントボール(10)・ボール・ビニールテープ(2)・油世マジック(2セット)
どんぐり・木の枝】

○ 自分たちでルールを考えたり、取り組んだりしている姿を認めることで、多くの友達と遊ぶ楽しさを味わえるようにする。

資料8：六条幼稚園・京西保育園合同保育研究資料

1. 幼保合同保育の実践

1) 幼保合同保育研究の実際

京西保育園と六条幼稚園は、合同保育に向けて、事前事後の準備・指導案の立案・振り返り等、保育を協働して取り組むことを積み重ねてきた。一緒に子どもたちを目の前にして共に保育をし、子どもたちの姿を読み取り、次の育ちへとつなげてきている。研修体制もでき意見を交換し合える信頼関係も築かれる。また、同じ場において大学の先生方や多くの参観者の方々の指導助言を受けることで、各自の資質向上にもなり多方面の捉えを学ぶことができた。合同保育実践の振り返りも、これまでの一連の協働する研修として行う。

(1) 幼保合同保育研究会 I

①事前打ち合わせ

- ・昨年度経験している5歳児は、保育所に行くことや来てもらうことを楽しみにする姿が見られた。保育所の場に慣れておくため、事前の保育を行うことにし、互いの遊びの情報交換をした。実際に保育所で幼保の子どもたちが遊ぶことで用具や素材など足りないものもでてきたので、幼稚園から持ってくるようにした。
- ・同じ4歳児でも、入園して間もない幼稚園児と保育所の幼児では経験の差があると思われ、互いの幼児の実態について話し合った。
- ・多人数の幼児が遊ぶため、保育園の狭い園庭の場の工夫を考えた。
- ・乳児と共に生活している保育所の現状を幼稚園側が理解したり幼稚園では関わるのが少ない3歳児と共に遊ぶことで異年齢と関わる楽しさを感じたりすることができるように今回の合同保育では、保育所の3歳児も一緒に遊ぶことにした。

②保育実践

- ・どろんこ遊び ・木工遊びなど ・シャボン玉遊び
- ・草場やグミ、野菜を使ってジュース作り ・石鹼を削って泡立ててホイップを作る
- ・木片にくぎ打ちをして遊ぶ ・片栗粘土で遊ぶ ・にじみ絵をする
- ・音楽に合わせて踊ったり歌ったりする ・ぬかを使って団子作り

③カンファレンス・振り返り

【幼稚園教員の振り返り】

子どもたちは、初めは、固定遊具に興味をもち、遊んでいる子も多かったが、一通り遊ぶと、目新しい遊びに関心をもつようになった。

- ・4歳児は、教員が誘ったり一緒に遊んだりすることで、安心して遊び始めていた。色水遊びでは、幼稚園でも様々な素材でジュースを作ることを楽しんでいたので、遊びの場が変わっても同じように遊びだす。その中で幼稚園にはないグミなどで「どんな色になるのかな。」と楽しみにしながら遊んでいた。
- ・5歳児は、ぬかを使っての団子作りは幼稚園にない素材であったが、幼稚園での泥だんご作りからの経験から、作った泥団子にぬかをまぶして、固まるかどうか試す幼児も見られ、その様子を見た保育所の幼児が真似をしてやってみるなど、それぞれの園で経験を取り入れて遊びを考えだしていた。また、昨年度の経験から顔見知りの保育者がいることで、自分から関わったり声をかけてもらうことに喜びを感じたりしている幼児も多かった。しかし目新しい遊びへの興味が強く、子ども同士の関わりが少なかった。

- ・6月という時期は、幼稚園の4歳児にとっては、入園して間もない時期である。園児たちの今までの経験の違いから、木工遊びを4歳児のこの時期の遊びとして入れるのがふさわしいか検討した。その結果、保育所の幼児は経験もあり5歳児に教えてもらったり見たりして遊ぶことはあるかもしれないが、この時期の4歳児としては、もっと体全体で水や砂、泥などに関わる経験をさせる必要があるのではないかと考えた。
- ・片栗粘土は、どの子も興味をもち、やってみたいと思う素材であったので、幼保の幼児たちが遊びにとりかかりやすかった。そのことで、緊張感が和らぎ他の遊びにも入りやすくなったと思われた。

(2) 幼保合同保育研究会Ⅱ

①事前打ち合わせ

- ・運動会を終えて互いの園での遊びの様子を伝え合い、合同保育当日にどのような遊びや環境を整えていくかを共通理解をした。遊びの内容を考える際には、互いの園の情報交換をし、お互いの園の子どもたちが興味のあることを出し合った。
- ・雨天の場合も考えられるので室内でも遊びを展開できるように場を考えたり工夫したりした。
- ・遊び後の話し合いについては、互いの保育者間の打ち合わせが不十分であったため、両方の子どもたちの話を十分にきくことができなかったという反省から、役割分担をし話し合いが次につながるものになるよう共通理解をした。
- ・幼稚園児は、遊びは同じでも環境が変わったり場所が違ったりすると遠慮してしまうのか、幼稚園で遊んでいるように意欲的にじっくりと遊びに取り組むことができなかった。幼稚園に戻り、話し合いをもった時に「もっと、自分たちの遊んでいるものを持ってきたい。」という思いがあり、次の日からは、毎朝自分たちで使いたいものを用意し、持っていくようにすることになった。その結果幼稚園児も遊びに意欲的に取り組み、ダイナミックに遊ぶことができるようになった。
- ・遊びの場を考える時に、話し合いのみではまともならず、実際に幼保の保育者と一緒に園庭に行き、遊び道具や素材、場を具体的に確認して話し合った。そのことで遊びのイメージが共通になり、保育を行う時の環境が構成しやすくなった。

②保育実践

・『リレー』5歳児

幼稚園の運動会で使ったハチマキを持っていくこと自分たちで準備をし意欲をもってリレー遊びをしようとしたが、なかなか進まず、保育者の仲介でリレーをすることができた。その日の振り返りから少し子どもたちに任せてよいのではないかと保育者間で共通理解があった。次回からは子どもたちが自分たちで進めようとする姿がみられたが、思うように進まず、課題が残った。最終日は、保育者の援助の在り方を考え、共通理解をしてリレーを見守り、援助した。

③指導案【5歳児 10/31分 4歳児 10/31分】

次ページ参照

4 歳児遊戯会 平成24年10月30日(火) 9:15~10:20 いろいろなあそびをする

10:20~ 話し合い

10:30~ 片付け

保 竹田・榎野・栗田・各務

初 高野・森田

・予想される子どもの経験 図保育者の説明 幼稚園環境

ねらい、いろいろな遊びに興味をもって、じっくりと取り組む。

・秋の自然物や身近な素材を使って次々と一持にイメージを

もち、遊ぶことを楽しむ。

●準備で遊ぶ

- ・風船を飛ばして解りをつけてごちそうを作ったり たんこ作り・さらし作りを楽しむなどしている
- ・子どもたちが自分なりに解りを考えた事やごちそうを作る楽しさを共有する。
- ・子どもたちがイメージを膨らませやすいように、木の葉・どんぐりなどを活用しておく。

●自然物を使って遊ぶ

- ・いろいろな自然物や素材を使って解りづけを考えカーキ作りを楽しむなど、エプロンをつけて保育者や友達に持って帰ることを楽しんでいる。
- ・一人一人の経験や想像を交け合わせ、作る楽しさを分かちあえるように、出来たカーキをお互いにのせたり、テーブルに運んだりできるように、トレーや紙皿を活用しておく。
- ・自然物や素材を使いやすいように種類別に分類しておく。
- ・より本物らしく子どもたちが使ってみたいと思えるように、素材を用意し、行われたまは半袋をカオルが配るように置いておく。

●ひっつきむしで遊ぶ

- ・保、ひっつきむしを付けて、絵にならなくていくことを楽しんでいる。
- ・初、平塚海に絵をかき、ことを楽しんだり、ひっつきむしをつけたりしている
- ・子どもが絵に思ったことに興味し、子ども自身がこうしてみたらと思えるような声かけをする。
- ・自分たちでひっつきむしを探れるようにハサミを用意する。

●音楽に合わせて踊ったり歌ったりする

- ・運動会で踊った踊りやポンポン傘を持って踊ったり、コスチュームやリボンを自分で作り、つけて踊ることを楽しんだりしている。
- ・保育士も一緒に踊り、踊っている姿を認め、楽しさを共有する。
- ・みんなが楽しめるような曲を選び、運動会で使ったポンポン・フープや踊りに使いたい物を自分たちで探れるように材料を用意する。

●リレーをして遊ぶ

- ・5歳児のしているのを見て興味をもったり、次々を渡ったりしてリレーを楽しんでいる。
- ・ルールが理解しにくいときには、保育者が仲立ちとなり、5歳児に声をかけながら、観察できるようにする。
- ・5歳児と一緒に走る楽しい気持ちを受け止め、思いやり走る姿を認め、それぞれのおまじが楽しむように場の確保をする

●ジュースやごちそう作りをして遊ぶ

- ・樽をおろし器で搾ったりオシロイハンカチをすり鉢で絞ったりすることを楽しみ、ジュースを作ったり遊んでいる。
- ・「おいしい物を作りたい」「きれいなカーキを作りたい」とコスモスや木の葉を解ったり作り方を考えたり、保育者に教えてもらう事を楽しんでいる。
- ・野菜の胡麻やどんぐり、木の葉などを使ってごちそう作りをしている。
- ・「100ができた」と嬉しい気持ちや子どもたちのイメージを交け合わせたり一持に走ったりして満足感を味わえるようにする。
- ・材料を分類して用意し、用具を使って切ったり、盛り付けたりしやすいようにする。
- ・出来たごちそうやジュースを保育者に食べてもらったり、次々作った物に興味をもったり出来るようにテーブルや椅子を用意しておく。
- ・自分で作りたいと思った時、遊びに入りやすいように机を積極的に用意し、場を広げていく。

●いろいろな物を解いて遊ぶ

- ・波板やベニヤ板、といをつなげて、「こういうふうなコースを作りたい」と次々と一持にコースを作ることを楽しんだり、ものの解り方に関心をもったりしている。
- ・図形保互いの遊びを想像できるように、保育者が声をかける。
- ・解り方の違いに気づいたり、知したり出来るようにいろいろな解り方を想像できるようにする。

●木片で遊ぶ

- ・木片に釘を打つことを楽しんだり、できたものを自分のイメージに見立てたりしている。
- ・図形や自然物の解り方を知らせ、自分で試をつけてながら、遊ぶことが出来るように声かけをする。
- ・子どもたちのイメージに合わせて、自由に材料を取り出せるようにする。
- ・出来た物を並べる順番を覚えておく。

取場

作り台

水道

器具

水道

梁山

舟 船

廊下

玄関

くま組

そう組

トイ

らいおん組

ぼんた組

④カンファレンス・振り返り

- ・リレー遊びでは、幼児だけで遊びが進められなかったことから、子どもたちが「何が問題か」を考えたり意識したりすることができるような援助の在り方、主体的に遊ぶ子ども姿の見取りから適切な待ち方を学ぶことができた。
- ・合同保育では、自園とは違う場で遊ぶこともあり、初日から幼児が主体的に遊びに取り組みにくかった。幼児が遊具や道具を自分で持っていくことで、主体的に遊びを進めていく姿につながるということがわかった。
- ・互いの幼児が遊んでいることに興味をもったり刺激をうけたりしながら、遊びを進めていくためには、遊具や素材を置く場、遊びの場同士のつながり考えることが大切であると気付いた。
- ・遊びの後の話し合いで、幼児の思いをしっかりと聞くためには、事前の保者間での打ち合わせを密にしておくことが大切であることや、主になる保育者は、事前に決めておくが、その保育者が、全員の遊びの様子を把握しているわけではないので、子どもの思いを引き出しやすいように話を進める保育者と話し合いを補助する保育者に分かれて進めるようにすることに気付いた。また、作ったものや見せたいものを見せながら話を進めることで、周りの友達に思いやイメージが伝わりやすくなることがわかった。



おはよう おかえり こんにちは
声かけ 気にかけて 笑顔かけ

毎月17日は子ども安全の日です